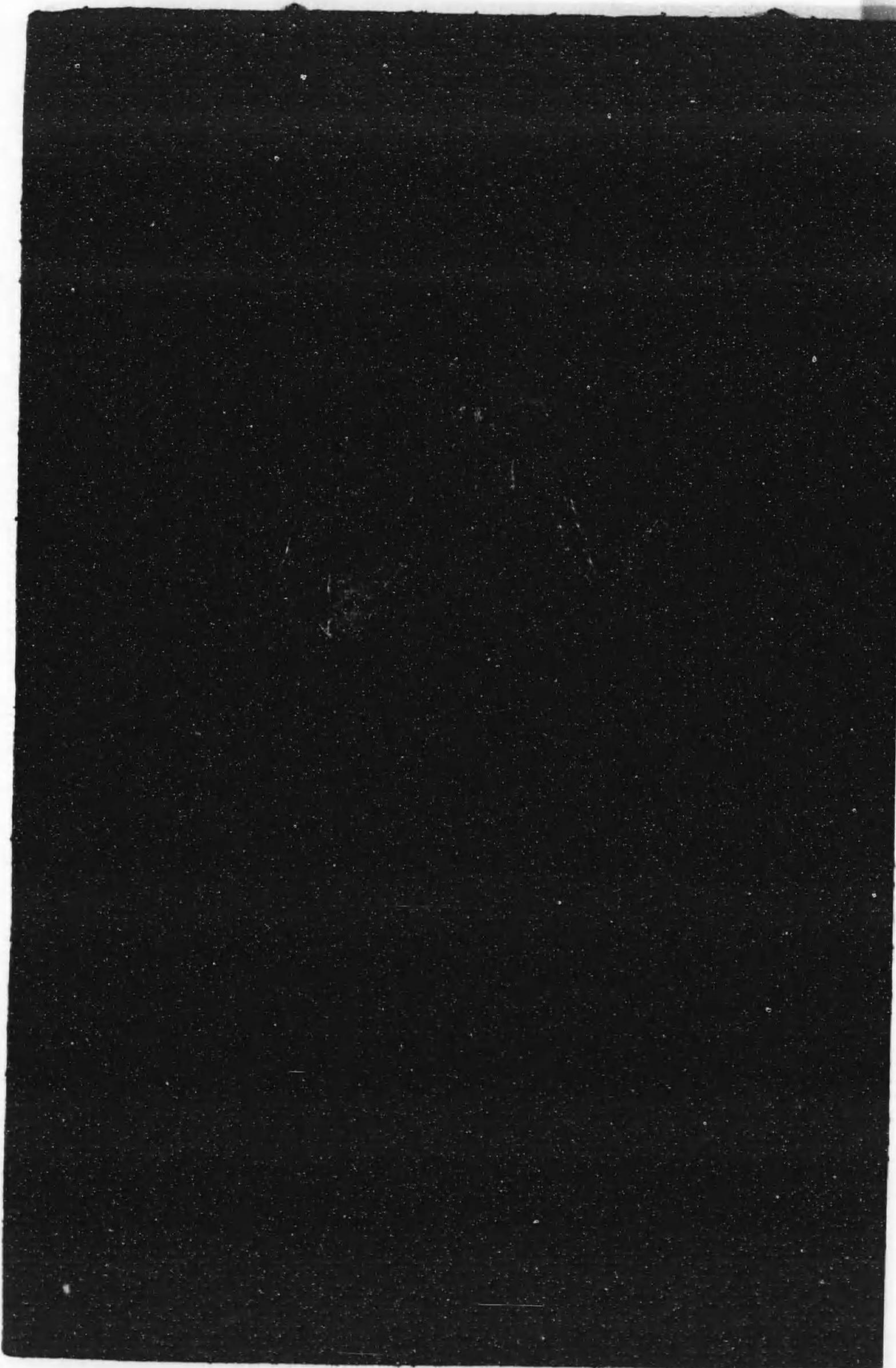
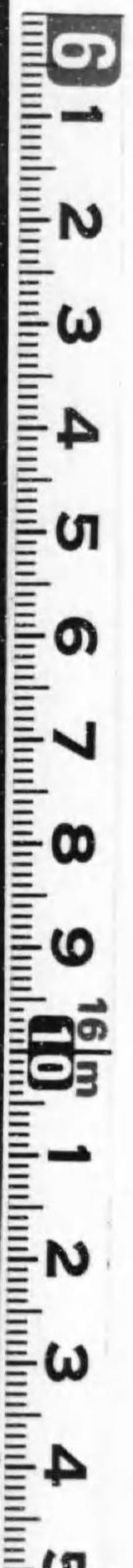


始



時 220
671



小林榮子著

新註
枕

草紙

東京言海書房



總目次

一、凡例	至自四一頁
二、はしがき	至自四四頁
三、本文	至自五二頁
四、系譜	至自一〇頁
五、年表	至自四一頁
六、圖解	至自四一頁

總目次

凡 例

一、珍しいから、あながち、よい本といふ事はなく、却つて、よい本が弘く行はれるわけでもあるから、本文は北村季吟の春曙抄をもととし、かたはら他本を参照した。註の中に「一本」とあるのは、あとから見た前田家本の事である。

一、枕草紙は、もと／＼清少納言が氣任せに書いた隨筆で、章段は後の人が見易い爲に、つけたのであり、従つて前田家本のやうな特殊な分け方もある位ゆるゑ、この書には章段をつける事をしない。

一、詞の意味は、あてゝある漢字で分つて頂けるやうにした。たとへば本文には「歸る人の」として、註に「歸る人は、こゝにては男の事」とでもする處を、本文にすぐ「歸る男の」とし、「するさう」として、註に「するさうは水晶」とする代りに本文で、すぐ「水晶」として置いた。さうする方が讀むのに註を見る度數がへつて、それだけ興味を持ち續けられると思ふからである。

一、註は本文のあと、口譯は本文の上に置いた。

一、文の詞も、やはり口譯して入れておいたけれども、時には本文の通りに入れて（ ）の中に口譯をしておいた例外もある。それは「さてその左衛門の陣に」の條の地の詞に「いみじくとある仰言には」とある

から、どうしても「いみじく云々」の文の詞を、そのまゝに入れておかなければ意味の通じない恐れがある類である。歌はすべてそのまゝを記して（ ）の中に口譯を入れて置いた。

一、假字つけは私のこれまでの例によつて、動詞までとした。たとへば「延す」を、振假字なしならば無論「延ばす」と書かなければ読みちがふ恐れがあるけれども、假字をつけるには、もとく「延」が「野」の意味でもないから、「ば」の動詞までをつけて、「す」の助動詞からを下につけた。見た眼の冗漫でない上に、頁の節約ともなるわけである。

一、「山は」川は「橋は」と擧げてある名は、大ていは古の歌で面白く感じたか、都の近くで實際に見たり聞たりしたのを擧げたのであらうから、古歌にあるのは、それによる事とし、さもないのは、なるたけ都近くにもとめた。たとへば轟の橋は紀伊にも近江にも、その他にもあるけれども、古い地名便覧の山城の部に「轟の橋」とある處の註に「東山清水の麓、三年阪の下に渡したる小さき橋」とあるのを見て、清少納言が車でさも外出した時に小さな石橋を通つて、こゝは何といふ橋と、きいて、形に似合はず名の大きいのを面白く感じて並べたのもあらうと一旦は、それにしたけれども、しかし、やつぱり歌から取つたらうかとも思つて兩方を擧げて置いたり、「かさゝぎの橋」も、その書（横とちの木版本で國々の名所は古い證歌がそへてある。櫻井光枝といふ人の序文に「松野の翁が、はやう）に「山城の御池通、烏丸西へ入る町の溝にのせしなりとか」と言つてあり中々よい本で、天保九年の新刻である。）

かけたりし橋」とあるけれども、これも歌から、思ひ出したのかとも思つて兩方を擧げて置いた類である。

一、口譯はすべて意譯にして逐次譯（直譯體）にしない。それは詞のわけは、漢字と註とで盡してあるから、口譯は専ら清少納言の口吻を寫し出すに力めた。例へば、

「方弘はいみじう人に笑はるゝものかな」を「方弘は非常に人に笑はれるものよ」の直譯にしないで、「何だつて方弘は、あんなに人に笑はれるんだらう」と言ふやうに、「ものかな」の意味を「何だつて」と「だらう」とに現はし、

「いみじき面地して事を行ひなどするよ」を「えらさうな顔つきをして、さしづなんかして居るんだもの」のやうに「などするよ」の感嘆詞を「なんか」と「だもの」の語勢に現はし、又「ふみ月ばかり」の條の、

「いでぬる人も、いつのほどにかと見えて、萩の露ながらあるに、つけてあれど」を「出て往つた人も、もう疾うに露のまんまの萩に、つけて、文をよこしてあるけれども」のやうに「いつの程にかと見え」を、「もう疾うに」とし、「萩の露ながらあるにつけて」を、「露のまんまの萩に文をつけて」とし

（ついでに言ふ。このふみ月の條は、實によく出来て居て、當時の宮廷の男女間の情事を繪のやうに寫し出し）又、行成が、「かうた筆つきは、徳川時代のつや物の名人、爲永春水を思はせる情趣の深いもので、この草紙中の白眉である。）

語らうとならば何耻づる。見えなどもせよかし」と言つた詞を、「こんなに心易く咄をするのだから
(顔ぐらゐ) 見せてもよさうなものだ」とし、

「斧の柄も朽ちぬべきなめり」は「斧の柄」の故事は註にゆづつて、口譯には、單に供の者の口吻の
「これは長くなりさうだ」とし、

「かるびいみじうて」を「馬鹿に身輕で」のやうにした類である。

一、口譯中、() の中の一行に書いてあるのは、本文にない詞を補つたので、「春は曙(がよい)」の類
であり、() の中に二行に書いてあるのは註で、「殿(隆)」の類である。

一、口譯が非常に、わるい詞で(たとへば「癪なものには「氣に障るものは「耳」躊躇されたけれども、作者の口吻
が啖可のやうなので、據どころなく荒い詞に譯してある。

はしがき

目次

- 一、枕草紙といふ名……………一
- 二、枕草紙と源氏物語……………二
- 三、清少納言と紫式部……………三
- 四、定子皇后並に藤原道隆の家族……………二
- 五、彰子中宮並に藤原道長の家族……………三
- 六、この書を出版した次第……………二九
- 七、前田家本……………三〇
- 八、小白河の八講を、この書に、「北白河の八講」とした次第……………三五

九、「定本」といふ事……………三七

十、定家卿の偉大な功蹟……………四〇

十一、誤つた事を、そのままに傳へる弊……………四二

(終り)

一、枕草紙といふ名

もとは何とも題のつけてない冊子であつたのを、後の人が「清少納言が記」と名づけ、又その後の人が終りの「枕にこそはし侍らめ」といふ詞をとつて「枕の草紙」と名づけたものである。(一條天皇時代から二百余年後の順徳院御撰の八雲御抄、並に禁秘抄にも「清少納言が記」と記されてある)

その「枕にこそはし侍らめ」とある一節の次に又、

「左中將の、いまだ伊勢守と聞えし時、里におはしたりしに、端の方なりし疊をさし出でしかば、この草紙も乗りて出でにけり。惑ひ取り入れしかども、やがてもておはして、いと久しくありてぞかへりにし。それより、ありきそめたるなめりとぞ。」

とある書がある。

これは又、無論、後の人の附け加へた、ことわりの文章で、考へて見ると「枕にこそはし侍らめ」とある一節の初めの「物ぐらうなりて文字も書かれずなりたり」の處あたりも、後の人の附け足しで、題も、その人の撰みではないかとも思はれる。「物ぐらうなりて」など、目を限つて、いつまでにと、いそいで書いたものではなく、思ふ事をあとからくと、折にふれて書き付けた無題の冊子であつたのであらう。

(あとでいふ前田家本には、この一節もない。)

勿論、清少納言の事であるから隠す氣もなかつたらうけれども、もつと書く氣で置いたのが、そのまゝになつたのではあるまいか。

そして、その「書きさしの中」にすら、前田家本などの異ひを見るにつけても、首尾一貫した小説とちがひ、いくらでも抜き差しの出来るものであるから、幾人の人が、自分の好き好きや、感じを言ひ添へたり省いたりしたかも知れない、極めて頼りないものではあるけれども、しかし、もとからのまゝである處(生昌の條や、時鳥さゝや、淑景舍春宮に參り給ふの類)も多分にある事と思ふから、清少納言の傳を偲ぶには充分であるし、その頃の宮廷の有様を窺ひ知るに必要な冊子である。

跋文の跋文である「左中將の」云々の一節は、無い本に隨つて置いた。

一、枕草紙と源氏物語

枕草紙は、折々の感想や好みを断片的に記した隨筆で、たとへば、いろ／＼な色に染めた糸を並べたやうなもの。源氏物語は、更に、その糸を一幅の錦に織り成したやうなもので、どちらが優つて居るとか劣つて居るとか比べる事は出来ない、全く別なものであると思ふ。

三、清少納言と紫式部

清少納言は宮仕へといふものを極度に禮讃して「生先なまきなく、まめやかに、えせ幸ひなど見て居たらん人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、仍さりぬべからん人の娘などは、さし交らはせ、世の中の有様も見せならはさまほしう、内侍などにも暫時あらせばやとこそ覺ゆれ」(大人に成て、こくめいによい夫で、むさく馬鹿らしく見える。やつぱり可なり人の娘など)と言つて居る。そして宮中の儀式や上達部殿上人の花やかさを見、その人たちと親しくする事を無上の悦びとして居る。(正暦元年六月に父、肥後守、從五位上、清原元輔が八十三歳で卒し、翌二年の冬はじめて宮仕に出たので、清少納言は元輔の晩年の子といふから、五十四五歳の時の子として、二十六七歳で、上つたわけである。もつとも女子が一人あつたといふ) 定子中宮をも非常に渴仰して、この草紙に「宮は、白き御衣どもに紅の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる。御髪のかゝらせ給ふなど繪に書きたるをこそかゝる事は見るに、現にはまだ知らぬを、夢の心地ぞする」と言つたり、「御額おんひたい上げさせ給へる釵さし子に、御分け目の御髪の、いさゝか偏よて著く見えさせ給ふなどさへぞ聞えん方なき」と恍惚くわうこつと見上げて居る様を記して居る。(これは主従の幸福であつて、清少の二面無邪氣な處がよく見えて居る)

勝氣の性質である事は、「親にも君にも、すべて打語らふ人にも、人に思はれんばかりめでたき事はあらじ」と言つたり、「憚はづかしき人の、歌の本末問ひたるに、ふと覺えたる我ながら嬉し。物あはせ何くれと挑

む事に勝ちたる、いかでか嬉しいからざらん。又いみじう我はと思ひて、いたり顔なる人、はかり得たる。女どもよりも男はまさりて嬉しい」と、立派な人に歌の本末をきかれて、すら／＼と出たのや、したり顔な人を、ひしやげつけたのは嬉しいものだと言つてあるのにも現れて居る。又「御前に人々所もなく居たるに今、上りたれば少し遠き柱もとなどに居たるを御覽じつけて、「此方」と仰せられたれば、道あけて近く召し入れたるこそ嬉しけれ」と、中宮の特別の御待遇を、人の前に見せ得た時の嬉しさを言つて居る。これを、紫式部が、宮仕に召された時の事を日記に、「師走の廿九日に初めて参りしも、今宵の事をか。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなく立ち馴れにけるも疎まし身のほどやと覺ゆ」と嘆いたり、「めでたき事おもしろき事を見聞くにつけても、たゞ思ひかけたりし心のひく方（通世の事）のみ強くて、ものうく、思はずに嘆かしき事のまさるぞいと苦しき。いかで今は、なほ物忘れしなん。思ひがひもなし罪も深かりなど、明け立てば打ながめて、水鳥どもの思ふ事なげに遊びあへるを見る。『水鳥を水の上とやよそに見ん、我も浮きたる世をすぐしつ』」と、言つて居るのに比べると、大へんな違ひである。

同じ日記に、

「源氏の物語、御前（影子中宮の）にあるを、殿（道長）の御覽じて、例のすゞろ言ども出で來たるついでに、梅の

枝に渡かれたる紙に書かせ給へる。道長『好き者と名にし立てれば見る人の、折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ』賜はせられたれば、鶯人にまだ折られぬものを誰か此の、好き者ぞとは口馴しけん』とあるやうに、源氏物語に、かこつけて道長が挑みかけたのを巧みに、やんわりと外して居たり、又「渡殿に寝たる夜戸を叩く人ありときけど恐ろしきに、音もせて明したる早朝、道『夜もすがらくひなより勝になく／＼ぞ、横の板戸を叩き佗びつる』返し、鶯たゞならじとばかり叩く水鶏ゆゑ、明けてはいかに悔しからまし』」（素通りをしてもと氣まぐれに叩く水鶏の爲に戸をあけたら、どんなに後悔の種だらう）と、こゝでも上手に逃げて居る。

自分のお仕へ申て居る中宮の父君で、此の世をば我が世ぞと思ふ御堂關白——清少のやうな定子皇后のお氣に入りの人すら、「御堂方」と言はれたほどに誰をも引つける力を持つ——當時で言へば勿たない位の人の懸想にも、露ばかり心を動かさなかつたのは、あながち夫が好きであつて、なくなつた後にもその人が忘られなくてと、いふのではなく、哲人のやうにすべてを大悟し大觀して居る式部の心には、露と置き露と消えてゆく、はかない人の世の榮辱などを何とも思つて居ないし、さういふ、はかない人間に好かれた處で、ほめられた處で、一向に嬉しいとも思はないのである。と言つて決して思ひ上つたなどといふ心持では微塵もなく、優しく思ひやりの深い——佛陀が慈眼で、下界にうごめく衆生の轉んだり起きたり泣いたり笑つたりの様子を、じつとあはれみ見て居る——と同じ心持なのである。その心持は、源

氏物語を通じてよく窺はれる。たとへば六條御息所のやうに夕顔上をおびやかし、葵上を呪ひ殺したやうな恐ろしい嫉妬深い人でも、娘の齋宮について伊勢へ下向する時、内裏へお暇乞にゆく處の「父大臣の限りなき筋(后)に思し志して、齋き奉り給ひし有様かはりて、末の世に内裏を見給ふも、物のみ盡せず哀れに思さる。十六にて故宮に参り給ひて、二十にて後れ給ふ。三十にてぞ今日又九重を見給ひける御息」そのかみを今日はかけじと忍ぶれど、心の中に物ぞ悲しき」のあたりは、涙なしには讀み下せない。又末摘花や、近江君のやうな、心の至らない人でも、孝心は深く、それにもほろりとさせられるし、紫の上のやうに、讀む中に一寸反感を持つ位に好運で格別の寵愛と榮花に浸つて居る人でも、源氏が、そこにも此處にも情をかける人のあるのを心細く感じて「風吹けば先づぞ亂るゝ色かはる、淺茅が露にかゝるさゝがに」と詠むあたりは、あはれであり、三十七才で死ぬ少し前に、養ひ孫の匂宮に、「大人になり給ひなば、爰(六條院)に住み給ひて、此の對の前なる紅梅と櫻とは、花の折々に心とどめてもてあそび給へ。さるべからん折は佛にも奉り給へ」と、我身には言はぬ、やさしい氣質を見せてあつたり、物の紛れのあやまちをして、自責と畏怖の思ひに死んでゆく柏木も、尼になる女三宮も、どれもあはれな人の子の描寫で、讀んで居て決して憎めない人ばかりである。そのやうにすべてを達觀して居る紫式部である。いつまでの壽命で、いつまで變らない心を持ち續け得られるか、自分にも分ら

ないやうな、はかない人間に、褒められても嬉しくはなく、毀られても悲くもなかつたのであらう。

清少納言が人の毀譽褒貶に、やたらに怒つたり喜んだりしたのは、まことに成人と子供、哲人と凡人との違ひである。そこで清少納言には「香爐峯の雪は」と言はれれば、すぐにその下の「簾を撥げて」の句を實行して人を、あつと言はせたり、竹の事を「此の君」と言つて殿上人を感服させたりして大得意で居るに反して、紫式部は「いかに人も傳へきつて、にくむらんと恥かしさに、御屏風の紙にかきたる言をだに讀まぬ顔をし」たり、「さるさまの事(學文)知し召させま欲しげにおぼいたりしかば、いと忍びて人の侍はぬ、ものゝひまゝに、おとゝしの夏ごろより樂府といふ書二卷をぞ、しどけなく、かう教へ立て聞えさせて侍るも隠し侍り」(彰子中宮廿二歳の時の事)とある位である。

性質は右の通りとして、さて二人の年頃と容貌とは、どうであつたかと推しはかり見る。

式部は、長保三年に夫の宣孝が死し、六年後(この間の何年か)源氏物語を書いたらしく、宮中に上つた時分には、もはや命を受けて、石山寺に籠つて書いたといふのは俗説で、いくら式部でも一月や二月の日數で書けるやうな一寸したものではない。に彰子中宮の宮女に召され、その時すでに二人の女子があり、日記の様子を見ても、三十歳前後であつたらしく、一方清少納言は定子皇后入内の翌正暦二年に出仕したのが廿六七歳の頃らしく、それより十六年後の式部が出仕の時には、清少納言の方が少くも十歳の年長者であつた筈であるが、却つて式部の方が、世路を遙に長く踏んだ人のやうなのは、いく

つになつても性質だけのものである。

容貌は、紫式部は決して醜い人では、なかつたと思はれる。道長が折々につけて挑んだのは、あながち容貌が美いばかりでなく、才を愛でたのかも知れないけれども、式部の娘が一人は大貳高階成章に嫁して、後一條天皇の御乳母となり大貳三位といひ、一人は左衛門督兼隆に嫁して、後冷泉天皇の御乳母となり越後辨といつた。

(大貳三位は、後一條天皇に御乳を上げた御乳母ではあるまい。紫式部の夫の宣孝は、長保三年四月に四十七八歳で、なくなつて居る。後妻にしても、その妻の紫式部が、その時廿四五歳より下ではなからうから、五年めに宮中に入る時は廿九歳か三十歳にはなつて居て、長女は多くて十一二歳であらうか、それから三年後の後一條天皇の御誕生の時、やつと十四五歳であるから、その四五年後に御乳母として御仕へ申したのであらう。紫花物語の後一條天皇の崩御の條に「三位たちもいとむつまじき人なれば」とあつて、古註に大貳三位としてある。(三位は御乳母の位である))

系圖には



とあり高階氏系圖に

成章——— 章任 母大貳三位

とある。

昔も今も高貴の方の御乳母には、容貌性質の優れた人を選ぶのが通例であるから、母の式部も必ずや醜い人ではない處か、多分美人であつた事と思ふ。

さて清少納言の容貌は、どうであつたらう。この方は、枕草紙の中に自分で言つて居る詞で、ほと想像がつく。それは、清少納言と仲よしであつた藤原行成が、「女は眼はたてざまにつき、眉は額に生ひかかり、鼻は横さまにありとも、たゞ口つき愛嬌づき、おとがひの下、頸など可愛氣にて、聲惜からざらむ人なむ思はしかるべき」と言つたといひ、又、「顔の憎氣なるは心愛し」と言つて、「おとがひ細く、愛嬌おくれたらん人は、あいなう、かたきにして、御前にさへ悪しう啓する」といふ、その行成が、ある時、ふと、清少納言の顔を見てから、局の簾を上げて入つたりするほど近しく、し出したとあるから、思ふに、願の下や、頸は、ふつくりして可愛く、口元がやさしく、聲がよかつたのであらう。そして、眼はその頃の美人型の垂り眼でなく吊り上つて居て、鼻は横廣く、眉は太かつたのかも知れない。とにかく、さう醜い顔ではなく、性分の通り、ばつきりした顔であつたのであらう。

序でに清少納言の晩年と紫式部の晩年について私の知つて居るだけを言ひ添へる。

清少納言は老年になつて獨りで汚い家に住んで居たといふ。余りに貧しい様子を年若の殿上人たちが笑つ

て通つたら、簾の中から「駿馬の骨を買ふ者もあつたぢやあないか」と聲をかけたといふ。耻ぢて隠れ
ても居す負けない氣で、やり込めた處は、やつぱり清少納言である。

紫式部が、日記に仲間の人たちを品評して、和泉式部や赤染衛門の歌をほめたりしてある中に「清少納
言こそ得意顔に、いみじう侍りける人。然ばかり賢し立ち眞字書き散して侍るほども、よく見れば、ま
だいと堪へぬ事多かり。(不堪能)斯く人に異ならんと思ひ好める人は、必見劣りし、行末憂てのみ侍れば、
艶になりぬる人は(氣どろ)いとすごう、すゞろなる折も、ものゝ、あはれに進み、興しき事も見過さぬほ
どに、おのづから然るまじく好色なるさまにもなるに侍るべし。そのあたになりぬる人の果いかでかは、
よく侍らん。」とある。批評眼と想像力の傑れた式部の言つた事に、悲しくも些とも違はなかつた。(これ
ると定子皇后が、おかくれに、なつてから七年めに紫式部がお宮仕へに上つてか)今でいへば極めてモダンな、フラツバ
ーとでもいふ性格で世渡りの橋を、ともすれば踏み外しさうな人である。そこへ持つて来て、その橋が
頼りない危つかしい橋でもあつた。お仕へ申て居た定子皇后は早くお崩れになつて、その御子達は彰子
中宮の庇護のもとに、お情けに生きて居る宮達であり、皇后の御實家は皆な早死にで、わづかに御弟の
隆家があるばかり。それすら眼の療治の爲に筑紫の大貳を望んで下向し、年へて都に歸つても道長の威
勢に壓されて花々しい事もなかつたのであるから、清少納言の、よる邊もなくなつたわけ、その上、若

い時分に才に任せて素行が修まらなかつた爲に、一時の興の相手にはしても、定まつた夫になる人もな
く、兄弟もなかつたらしいから、年とつてから破れ放題の家に垣も崩れ、昔鳴した人だけに、往來の人に、
さし覗かれ嘲笑されたのであらう。

紫式部の晩年は、榮花物語に、道長の四女嬉子が後朱雀天皇の東宮の御時の女御で、後冷泉院をお生
み申して、なくなつた條の、お乳母の人たちの中に「又大宮(上東門院)の御方の紫式部が娘の越後の辨、左
衛門督の子生みたる、それを仕うまつりける」と數へてあるから、その頃(万壽二年)たすると、この時四十余歳)
まで、まだ彰子のお傍に仕へて大故參の女房で、よい御指導役であつたのであらう。そして宮仕中に、
なくなつたか、でなくばお暇を頂いて閑かな余生を送つたのであらう。沈着いた思慮の深い、その頃
は珍しい操行の人であり、お仕へ申上東門院は、醫療の不完全極まる當時に珍い八十七歳の長壽者で、
お里の人達が榮達を續けて居たのであるから、粗忽のない綿密な人が、極めて安全な鐵橋を靜かに渡つ
たやうな半生であつたのであらう。

四、定子皇后及藤原道隆の家族

枕草紙を見て、定子皇后の容貌風格は、如何にも好もしい立派な方に感じられる。

御妹の淑景舎よりも、お美しいと清少納言が褒めて居る故、父の道隆に似て美しかったのであらう。

(大鏡に、道隆の容貌は、御容貌は、いと美麗におはしまし、帥殿(伊周)に天下執行の宣旨下し奉りしに、彼の民部卿殿(俊賢)の、頭辨にて参り給へりけるに、中略、他人の、いと然ばかりなりたらん(重症)には、異様なるべきを、仍いと清爽に貴におはせしかば、病づきてしもこそ容貌は要るべかりけれとなん見えしとこそ民部卿殿は常に宜ふなれ」と言つてある)

一條天皇の十一歳の御元服の時に、十五歳で入内され(榮花物語には十六歳とある)て、女御から中宮になられた。それから六年めに父關白道隆が薨じ、その翌年四月には御兄伊周、隆家の二人が罪を得て流人となつた。御心痛の余りに髪をきつて削ぎ尼の姿となられたが、十二月に脩子内親王をお生みになつた慶びに、翌年二人の御兄を召還された。

その年に、大納言藤原公季の女、義子を女御とされ、又右大臣顯光の女、元子も入内したけれども、榮花物語に「内(天皇)には人見る折ぞといふやうに今めかしう(今更に)何事につけても中宮(子定)を常に戀しう思ひ聞えさせ給へり」とあるやうに、さういふ場合にも定子中宮への天皇の御あはれみは益加はるとも滅する事がなかつた。

翌年二月に第一皇子敦康をお生みになつた。そして、その年十一月に入内した藤原道長の長女彰子が、中宮となる爲に、定子中宮は皇后となされた。

翌年二月一日に、彰子中宮が父の土御門の第に退出した。榮花物語に、「このひまに、いかで一宮(敦康)

見奉らんと思召せど、(一條天皇)万つ、ましようて得宜はせぬに、殿(道長)「この頃こそ一の皇子見奉らせ給はめ」と奏させ給へば、いと嬉しう思召されて、院(母女院)にも聞えさせ給へば、中宮(定子)の事に中宮とある)参らせ給ふべきよし度々あれど、つ、ましようのみ思召すに、まめやかに院も聞えさせ給へば、宮(子定)思し立たせ給ふ」とあつて、その月の、つごもりに参内された。同じ條に、「中宮(子定)は、もの心細氣に哀なる事どもをのみぞ申させ給ふ。『この度は参るにつ、ましよう覺え侍れど、今一度見奉り、又今宮(敦康)の御有様後めたくて、斯く思ひたち侍るなり』など、まめやかに哀れに申させ給ふ」とある。其の時に又御妊娠になつて、その御産で、おなくなりになつたのである。同じ書に、「長保二年十二月十五日の夜になりぬ。中かゝる程に御子生れ給へり。女に、おはします(親王)後の御事になりぬ。(後産の)額を突き騒ぎ、万に御誦經とりいでさせ給ふに、御湯など参らするに食し召し入る、やうにもあらねば、皆人あわて惑ふ。(中)いと久しうなりぬれば、なほいと覺束なし。『大殿油近う持て來』とて帥殿(隆)御顔を見奉り給ふに、無下に亡き御氣色なり。あさましくて呼び奉り給へど、やがて冷えさせ給ひにけり」とある、はかない御最期であつた。

又、同じ書に「上(一條天皇)は中宮(子彰)の御方にも渡らせ給はず、のぼらせ給へとあれど聞し召し入れでなん、すぐさせ給ひける。宮(子定)は御手習(手書き)をせさせ給ひて、御帳の紐に結びつけさせ給へりけるを、今

ぞ帥殿(周伊)御方々など取りて見給ひて、この度は限りの旅ぞ、その後すべきやうなど書かせ給へり。いみじうあはれなる御手習どもの、内わたり(上主)の御覽し聞し召すやうなどやと思しけるにやとぞ見ゆる。夜もすがら契りしことを忘れずば

戀いひひん涙の色(帝)ぞ欲見ゆき

また、

知る人もなき別路に今はとて

心細くも急ぎ立つかな。

また、

烟とも雲ともならぬ身なりとも

草葉の露をそれとながめよ。

などあはれなる事ども多く書かせ給へり。この御言のやうにては、例の作法(火)にては、あらでと思し召しけるなんめりとて、帥殿(周伊)準備せ給ふ。鳥邊野の南の方に二町ばかり離さり、靈屋たまやといふものを作りて築つきなど築つて、こゝに在しませんとせさせ給ふ中宮みやは今年ぞ二十五にならせ給ふける。その夜(御葬送の夜)に成ぬれば、黄金作りの御絲毛の車にて、おはしませ給ふ。帥殿(周伊)よりはじめ、さるべき殿

ばら皆仕うまつらせ給へり。今宵しも雪いみじう降りて、おはしますべき屋(無)も皆降り埋みたり。中やがて御車を昇き下させ給ひて、それながら(車の)おはします。今は罷出給ふとて殿ばら明順、道順

(皇後の母方の御をぢ)などいふ人々も、いみじう泣き惑ふ。折しも雪、片時におはし所も見えずなりぬれば、帥殿(周伊)

誰もみな消え残るべき身ならねど

ゆき隠れぬる君ぞかなしき。

中納言(家隆)

白雪のふり積む野邊は跡たえて

いづくをはかと君を尋ねん。

僧都君(隆)

故里にゆきもかへらで君ともに、

同じ野邊にてやがて消えなん。(どれも「雪」に、か) (けて言つてある)

など宣ふも、いみじう悲し。今宵のこと繪にかきて人にも見せまほしう、あはれなり。内裏うちには今宵ぞかしと思ほし明させ給ひて、御袖の氷も所せく思し召されて、尋常よつねの御有様(下)ならば、霞まん野邊も

眺めさせ給ふべきを、いかにせんとのみ思し召されて、

野邊までも心ばかりは通へども

わがみゆきとも知らずやあるらん。

などぞ思し召し明しける。曉に皆人々歸り給ひて、宮には侍ふ人々(皇后の侍女達)待ち迎へたるけしき、いとことわりに見えたり。おはしまし所、雪のかきたれ降るに打ちかへり見つゝ、こなたさまにおはせし御心地ども悲しく思されたり。」とある。

父兄の政權争ひの渦中に、随分と御苦勞の多い御身であるのに、枕草紙で見ると、いつもにこ〜とお傍の誰もの心もちを損じないやうに努められたらしく、少しも屈託の御様子が見えて居ないのは、芝居のお姫様のやうなのとは大分違つて、憂うつな心もちなどを傍の者に見せないのを、貴人の嗜みとしてあつたのであらうか。清少納言たちも亦、一言もさういふ御慰めの詞を申上げて居ず、御心配申上げた様子も見えないのは、後世、幕府の大奥に女中が奉公する初めに、「御殿内の事を一切他に洩さない」といふ誓紙を書かされたといふ、さういふ事が不文律にあつたのでもあらうか。例をいふと、生昌の邸にお下りになつたのは、お産の爲である。お里やしきの二條宮は前の年に焼亡した爲、據なく、横直で忠義な中宮大進

の小さな邸に下がられたのである。その當時の中宮のお身の上は、父道隆、長兄道頼、母高内侍、外祖父高階成忠といふ有力な後援者が、四年の間に相ついでなくなり、御叔母で帝の御母である三條女院は道長を御寵愛になつて、この一門には御不快であり、次兄の伊周や弟の隆家は罪を得て流され、召還は、されたけれども逼塞の身であり、行啓に際して、道長は廷臣を引きつれ宇治に避暑して、時刻に成ても供奉すべき公卿は一人も居合せなかつた、さういふ悲哀や不満の事が一向に記されて居ないで、おもしろさうに生昌を、からかつて居る記事ばかりである。もつとも一條天皇が非常におやさしくて、どの妃たちをも公平に待遇され、ことに定子皇后には御親しみが深かつたやうであるから、その點は御満足であり、侍女達も張合がよかつたのであらう。

關白道隆は、藤原兼家の長男である。大酒家であつた事は大鏡に「大疫癘の年にこそ亡せさせ給ひけれ。されども其の御病にはあらで御み酒の亂れさせ給ひにしなり。男は上戸一つの興の事にすれど、過ぎぬるはいと不便なる折侍りや。祭の歸途御覽するとして、小一條大將(時濟)関院大將(朝光)とひとつ御車にて、紫野に出でさせ給ひぬ、鳥の突い居たる形に瓶を作らせ給ひて、興あるものに思して、ともすれば大み酒入れて召す。今日もそれにて飲らするを興せさせ給ふ程に、余り漸う過ぎさせ給ひて、後には御車の後、口の簾皆上げて、三所ながら御髻(もみ)放ちて在しましけるは、いとこそ見苦しかりけれ。大方この殿達の

参り給へる、尋常にて出で給ふをば、いと本意なく口をしき事に思召したりけり。物の覺えず、御装束も引き亂りて、御車差しよせつゝ人に倚りて乗り給ふぞ、いと興ある事に爲させ給ひける。但し此の殿(隆)御酔の程よりは疾く醒むる事を爲させ給ひし。御賀茂詣の日は、社頭にて三度の御土器定まりて参らする事なるを、其の御時には彌宜神主も心得て大土器を参らせしに、三度は然る事にて七八度など飲つて、上の御社に参り給ふ道にては、やがて傾向のけざまに後の方を御枕にて不覺に大殿籠りぬ。一の大納言にては此の御堂殿(道)ぞおはしまし、かば、御覽するに夜に入りぬれば、御前の松明の光りに透りて御透影の在しませねば、あやしと思召しけるに、参りつかせ給ひて御車搔き下したれど得知らせ給はず。如何にと思へど、御前ごぜん驅ども、得驚かし申さで只侍ふなめるに、入道殿(道)下りさせ給へるに、然てあるべき事ならねば、轡の外ながら高やかに、「やゝ」と御扇を鳴しなどさせ給へど覺き給はねば、近く居寄りて、表の御袴の裾を荒らかに引かせ給ふ折ぞ、覺おどろかさ給ひて、さて御用意は慣はせ給へれば、御櫛笄具し給へりける取り出で、粧つくりひなどして下りさせ給ひけるに、些さり氣なく清げにおはしましければ、然ばかり酔ひなん人の、其の夜は起き上るべきかは、それぞ此の殿の御上戸は好く在しける。その御心の仍終りまでも忘れ給はざりけるにや、御病づきて亡せ給ひける時、西に搔き向け奉りて「念佛申させ給へ」と人々の勸め奉りければ、「濟時、朝光などもや、極樂にはあらんすらん」と仰せられけるこそ、あ

はれなれ。」とある。

北の方の貴子は和守高階成忠の女で高内侍といつた。大鏡に「後の世は高二位とこそ言ひ侍りしか。さて積善寺の供養の日、この入道殿(道)の上座に侍りしは、いと珍かなりし事かな。略中行幸節會などには、南殿にぞ参られし。それは、實まことしき文者にて、御前かまへの作文には詩文奉られしはとよ。少々の男子おのこには優りてこそ聞え侍りしか。略中女の余りに學識まなぶかしこきは運あしと人の申すなるに、此の内侍、後には、いとみじう墮落せられしも、其の故ゆゑとこそ覺え侍れ」とある。(道隆の薨じた後、伊周、隆家の流罪さわさりたる最中に、なくなつた故、零落といつたのであらう。)
この人の腹に定子皇后と、伊周と、隆圓僧都と、隆家となほ四人の女子とがある。伊周は容貌が美しく學問も勝れて居たらしいが、輕忽であつたらしい。弟隆家の従者に花山法皇を射奉らせたり、太元法を法琳寺に修して道長を咒咀したりして、その罪で太宰府に流された。大鏡に「心幼く在する人にて、略中斯様の事(略)さへ、帥殿(伊)は常に負け(道長)申させ給ひてぞ」とある。同書に又、「かゝれど只今は一宮(皇后)の出(敦康)、在しませ頼もしきものに思し、世の人も然は言へど、下には追従し怖ち申したりし程に、今の帝(後一)東宮(後朱)差し續き生れ(彰子)の出(出)させ給へりしかば、世を思しくづをれて、月來御病もつかせ給ひて、亡せさせ給ひにしぞかし、御年三十七とぞ承りし。略中御咳せき病びょうにやなどぞ思しける程に、重り給ひにければ、修法しほふせんとて僧召せど、参る者なきは、如何はせんとて、道雅の君(伊周)の(長男)を使にて、入道殿(道)

に申し給ひにけり。夜いたう更けて人も静まりにければ、やがて御格子の許によりて咳き(人の注意をひく爲の咳拂ひ)給ふ。誰ぞと問はせ給ふに御名告申して、『然々の事にて、修法初めむと仕うまつれど、阿闍梨に參で來る人も侍らぬを、給はらん』と申し給へば、『いと不便なる御事かな。得こそ承らざりけれ。いか様な御心地ぞ。いと怠々しき御事にもあるかな』と、いみじう驚かせ給ひて、『誰々を召したるに、參らぬぞ』と悉しく問はせ給ひて、『某阿闍梨をこそは奉らせ給ひしか』とある。衰へたあたりには、時の權威者に憚つて、祈禱師も寄りつかず、政敵たる道長に、おめ／＼と哀を乞ふやうな、あはれな臨終であつた。

隆家は隆圓僧都の次で四男である。氣魄のある人で、道長もこの人には憚つて居たらしい。大鏡に、『數多の人の下臈になりて(隆家)かた／＼すさまじく思されながら歩かせ給ふに、御賀茂詣に仕うまつり給へるに、無下に下りて在するがいとをしくて、殿(道)の御車に乗せ奉らせ給ひて、御物語細やかなるついでに『先年の事(配流せ)は、おのれが申し行ひたるとぞ世間には言ひ侍りける。其許にも然かぞ思しけん。されども然もなかりし事なり。宣旨ならぬ事、一言にても加へて侍らましかば、此の御社に斯くて詣りなましや。天道も見給ふらん、いと恐ろしき』とまめやかに宣はせしなむ、なか／＼に面おかん方なく、術なく覺えしところ、後に宣ひけれ。それも、此の殿(隆)に在すれば、然様にも仰せらるゝにぞ。

帥殿(伊)には、然までもや聞えさせ給ひける。」とある。

この人も、式部卿宮敦康親王の御即位を、心頼みに待つたけれども、一條院の御臨終に、『彼の事(敦康を儲君とする)こそ終に得せず成りぬれ』と仰せられたので、噫れの人非人やと言ひたかつたと、道長を憤つた事も見えて居る。眼を煩つて、その治療の爲に、自ら望んで太宰權帥になつた。筑紫に在任中に、刀伊國(女眞と)から攻めて來た時の事を、大鏡に、『筑紫にては豫ての用意もなく、大貳殿、弓矢の本末をも知り給はねば如何と思しけれど、大和魂偉く在する人にて、筑後、肥前、肥後九國の人を發させ給ふをば勿論にて、府(太宰)の内に仕うまつる人をさへ押取りて戦はせ給ひければ、彼奴が方の者ども、いと多く死にけるは、然は言へど家貴く在します故に、いみじかりし事平げ給へりし殿ぞかし』とある。氣象の勝れた人であつたらしい。

淑景舎の次の妹の事は、大鏡に、『三の御方は冷泉院の皇子帥宮(敦)と申し、をこそは、父殿聳取り奉らせ給へりしも、後々はやがて御中絶えにしかば、末の世は、一條わたりにいと微しくて在するとぞ聞え給へりし。まことにや、御心ばえのいと沈着すおはしましければ、かつは宮も疎み聞え給へりけるとかや。僧、客人などの參りたる折は、御簾をいと高やかに押しやりて、御懷ろを披げて立ち給へりければ、宮(敦)は御面打ちあかめてなん在しける。侍ふ人も、顔の色たがふ心地して俯伏してなん、立たんも、は

したに術^{すゝ}なかりける。宮^(道)には、『見返りたりしまゝに、動きもせられず、物こそ覚えざりしか』とこそ仰せられけれ。又學生ども召し集めて作文し遊ばせ給ひけるに、黄金を三十兩ばかり、屏風^{かぶ}の上より投げ出だして人々打ち給ひければ、ふさはしからず憎しとは思はれけれど、その座にて饗應し^(やす事)申して取り争ひけり。『黄金給はりたるは好けれども、然も見苦しかりしものかな』とこそ、今に申さるれ。人々詩文^{うた}作りて講じなどするにも、巧拙^{たくち}いと高やかに評め給ふ折もありけり。二位新發^{あたら}(高階)の御流^{ながれ}にて、この御族^{みむね}は皆、女も學識^{がくし}の在したるなり』とある。學識はよいけれども、性質が異常であつたらしい。父道隆の白酒が崇つて、さういふ子が出来たものか。その次の女子は、『御匣殿』といつて、敦康親王の御母代^{ははしろ}として宮中に在る間に、天皇の御子を身に持つたまゝ、十七八歳でなくなつた。

五、彰子中宮並藤原道長の家族

彰子は、定子皇后の入内から十年めに、十二歳で女御となつたのであるから、年齢から言つても、決して定子皇后に競争心など持つて居るわけではないけれども、定子皇后の父兄達と彰子の父の道長とは、前々から心中に鎬^{かぶ}を削つて居たので、定子皇后のお腹の一の皇子は、彰子が入内の前年に御誕生なされたので

あるが、遂に皇儲になられず、それより十年の後、彰子が廿一歳の時に敦成親王^(後一條)を、次の年に敦良親王^(後朱雀)をお生み申したので、一の皇子^(親王)方の外戚たる伊周は、悶々の余りに病歿した。さういふ關係があるから、定子皇后の競争者とは、しないでも、對照者として彰子中宮を擧げる。

彰子が入内當時の事を、榮花物語に『余り幼き御有様なれば、參り寄れば翁とおぼえて、我れ恥しうぞ』など宣はするほども、只今ぞ廿歳^(一條天)におはしますめる。同じ帝と申しながらも、いかにぞや、かたなりに飽かぬ所も在しますものを、此の帝は、いみじう御かたちより初め、清らに驚嘆^{あさま}きまでぞおはします。大御酒^{おほみき}などは少し食し召^めけり。御笛を得も言はず吹き澄まさせ給へれば、侍ふ人々もめでたう見奉る。打ちとけぬ御有様なれば、『これ打ち向きて見給へ』と申させ給へば、女御殿^(子)『笛をば聲をこそ聞け、見るやうやはある』とて聞かせ給はねば、『さればこそ、これや稚き人、七十の翁の言ふ事を斯く宣ふよな、あな耻かしや』と戯れ聞えさせ給ふ程も、侍ふ人々、『あなめでたや、此の世のめでたき事には、只今の我等がまじらひをこそせめ』とぞ言ひ思ひける』と記してある。慧敏な人であつたらしい。定子皇后の崩ぜられたのは、彰子が中宮となつた十三歳の年である。それから九年めに後一條天皇、次の年に、後朱雀天皇を擧げられた。^(それから三年めに一條天皇は御歳三十二で崩ぜられた)

道長が非常な信心家であつた事は、大和の金峯山から發掘された經筒^(道長自身に書いた紺紙金)でも明か

ある。それに「二百日潔齋の後、金峯山に上る」云々とあり、「寛弘四年丁未八月十一日左大臣正二位藤原道長」と認めてある。(博物館所蔵)寛弘四年は、彰子が、敦成親王(後一條天皇)をお生み申した前年である。定子皇后には一宮敦康親王(當時九歳)があり、彰子中宮には、入内後九年のその年まで、お子様のなかつた事が、どんなに道長を焦慮させ、一心に信心をさせたか窺はれる。(寛弘六年正月三十日、中宮及ビ敦成親王ヲ呪咀スル事、厭符露顯ス」と史にある。五ひにさういふ事をし合つて居たのであらう。)

定子皇后の残された皇子皇女は皆、彰子の情の翼の下(もと)に育まれた。寛弘八年六月十三日、一條天皇が東宮(三條天皇。皇后は、道長の女妍子である)に御位を譲られ、即日、敦成親王を皇太子とされた時の彰子の態度を、榮花物語に「例の人におはしまさば、是非なく嬉うこそは思し召すべきを、上(一條天皇)も道理のまゝにと(長子敦康を)こそ思しつらめ、彼の宮(敦康、この時十三歳)も、さりとともさやうにこそは、あらめと思しつらんに、斯く世の響きにより、引きたがへ思しおきつる(一條天皇の御遺旨)にこそはあらめ。さりととも御心(敦康)の中の嘆かしさ、安からぬ事とは、これをこそ思し召すらんと、いみじう心苦しういとほし。若宮(敦成)は、いまだ、いと稚くおはしませば、おのづから御宿世に任せてありなんものをなど思しめして、殿の御前(道長)にも、『なほ此の事(敦成太子に立つること)いかで然らでありにしがなんとなん思ひ侍る。彼の(敦成)御心の中には、年頃思しめしつらん事の違ふをなん、いと心苦しう理なき』など、泣く／＼といふばかりに申させ給へば」と記してある。けれども

道長は「世の中、いと、はかなう侍れば斯くて世に侍る折、さやうならん御有様も見奉り侍りなば、後の世も思ひなく、心安くてこそ侍らめとなん、思ひ給ふる」と言つて彰子の意見は徹らせなかつた。三條天皇も外戚(道長)の抑壓を不快に思召され、「心にもあらで浮世にながらへば、戀しかるべき夜半の月かな」の御詠があり、御在位僅に四年三ヶ月で、敦成親王(後一條天皇)に御讓位。翌年敦良親王が皇太弟(後朱雀)となられた。

されば上東門院彰子は、後一條、御朱雀二代の母后として、醫療の不完全な、お産といへばたゞ大勢の僧に、やかましくお經をよませるばかり、病氣はすべて「物のけしたと言つて、逆上性の女房か童女を、「よりました」といふものにし、大勢の僧が祈り責め立てるので、その家に崇りさうな人の氣になつて、いろいろの事を口走るのを打ちたゞいたりするだけで、典藥寮とか典藥頭とかいふものは、あつても一向役に立てなかつたらしい。だからお産で死ぬ人が非常に多かつた。さういふ時代に八十七歳の壽を保ち、弟頼通次第教通の引つゞいての關白の世盛りには、榮花の一生を終へた。まことに福祿壽を兼ね備へた婦人である。(この一家は、道長は六十二歳で普通であるが、倫子は八十九歳、その容貌は父の道長が美丈夫で、母の倫子も無論美しい人の母程子は八十歳、頼通は八十三歳、教通は八十歳の長壽であつた)容貌は父の道長が美丈夫で、母の倫子も無論美しい人であつたらしいから、定めて美しかつたのであらう。紫式部日記に、彰子の御産のあとの處に「御帳の中を覗き参りたれば、かく國の親と、もてさわがれ給ひ、うるはしき(もの)御氣色にも見えさせ給は

す、少し打なやみ面やせて、大殿籠れる御有様、常よりも纖弱あつかに若く美しげなり。小さき燈籠を御帳のうちにかけたれば、隈もなきに、いとどしき御色あひの底ひも知らず美麗きれいなるに、髣髴こぼた御髪は結ひて、まさらせ給ふ事わざなりけりと思ふ。かけまくも、いと更なれば得ぞ書き續け侍らぬ」とあり、國史にも「彰子豊艶、髪、身より長き二尺五寸」とある。とにかく廿歳の天皇に廿五歳の定子皇后よりは、十二歳の彰子中宮の方が將來のある御配偶であり、その點がすでに有利であつた。入内より十三年め廿四歳の時に一條天皇に永訣され、皇太后、太皇太后宮としての生活が非常に長かつた。

藤原道長の美丈夫であつた事は、大鏡に「只、轉輪聖王（佛經にあり、この王は身に三十二相を具し、位に即く時、天名と）などは斯くやと、光るやうにおはします」とあつて、氣魄も一族の中、否、當時の誰よりも傑れたものであつた。「虎子如渡深山峯」と、えらい人相見が、道長の容貌を見て言つたのに些とも違はないと、大鏡にある位で、そのいくつもの例の中に、伊周の南の院で、弓遊びの集りがあつた時に、道長も參會したが、伊周との勝負に、道隆が、不公平なさばきをしたのを不快に思つて、射直す時の様子を、同じ書に「道長が家より帝、后、立ち給ふべきものならば、此の矢、中れ」と仰せらるゝに、同じものゝ中心まなこに中るものか。次に帥殿（周伊）射給ふに、甚じう憶し給ひて、御手もわななく故ゆにや、的の邊あた近くだに寄らず、無邊世界を射給へるに、關白殿（道隆）色蒼いろあざくなりぬ。又、入道（道長）射させ給ふとて、「攝政關白すべき

ものならば、此の矢中れ」と仰せらるゝに、初と同じやうに、的の割るゝばかり射させ給ひつ。響應し聞えさせ給へる興も醒めて事苦ことくなりぬ。父大臣（道隆）帥殿（周伊）に、「何か射る、勿射なそく」と制せさせ給ひて、興こころさめにけり」とある。

北の方倫子は、左大臣雅信の女で、道隆の室貴子のやうな、學者ではあるが、やゝ突飛なのとは違ひ、優婉な淑女であつたらしく、琴瑟相和して、よい家庭で、あつた事は、倫子の六十の賀に道長が「あり馴れし契は絶えて今更に、心汚しに千代といふらん」と詠んだ歌にも見える。（道長より二歳の長であつた）

一夫多妻の當時であつたから、道長も、この倫子の外に、もう一人の室があつた。それは西宮左大臣高明の忘れ形見で、東三條女院が姫宮の通りに、大切に養育なされたのを、お氣に入りの御弟の道長にだけ、お許しになつたので、その二人の室の腹に男女十二人といふ子福者でもあつた。大鏡に「この殿の君達、男女合せて十二人、數のまゝにおはします。男も女も御官位つかさどこそ心に任せ給へらめ。御性質ごこころ人格じんかくどもさへ、聊かたか不充た分にはて誹とがれさせ給ふべきもおはしません、とりくゝに有識にめでたくおはしますさふも、たゞ他事ことならず、入道殿の御幸福ごさいはひの言ふ限なくおはしますなめり」とあつて、道隆の子女のやうに、出来不出来がなかつた。中にも彰子（一條天皇の中宮）妍子（三條天皇の皇后）威子（後一條天皇の中宮）關白頼通、同教通のやうに權貴を極めたのは、いづれも倫子の出であつた。

頼通は一條天皇の寛仁三年に、父に代つて關白となり、職に在る事四十九年、八十三歳で薨じた。教通も兄について關白となり、在職八年、八十歳で薨じた。いづれも穩健な貴公子であつたらしい。かう比較して來ると、一たいに道隆の一家は、突飛で思慮の淺い處があり、道長の一家は、穩健で用意が深い。召使はれた清少納言と紫式部までが、よく、その家風に出合つて居る。もつとも合ふ處があるから、召されもし、仕へもするのであらう。

けれども定子皇后が、さういふ家の娘で、「香爐峯の雪は」とたづねられたから、清少納言が、簾を撥げて、今の世までの語り種を残したので、人に隠れて白樂天の樂府をお教へ申すやうな、紫式部をお傍に置かれたから、彰子中宮は、いよゝゝ淑徳の高い婦人となられたのであらう。(後年、教康親王の御嬪(母は具平親王の女)になされた事や、伊周の女が一人は頼道の弟、右大臣頼宗の室となり、一人は上東門院となられた彰子に侍らつて居たのも、必ずや彰子の情深い、はからひで、そのかけには、紫式部の指導の効があつた事と思ふ。)

以上で、私は、枕草紙と源氏物語。清少納言と紫式部。定子皇后、並に道隆の家族と、彰子中宮、并に道長の家族とを比較して、讀者の參考に供したつもりである。

これよりは、どうして私が、余り好きでない枕草紙を出版する事になつたか、又それに就て恩借した、前田家本の價値と、それからの收穫とについて、語らうとする。

六、この書を出版した次第

ちき至高慢な事ばかりを並べて、そのくせ、後の寫し誤りもあらうけれ共、春は曙のやうな簡潔な處ばかりでなく、少し長い記事になると、當らぬ詞や冗慢な書き方があつて、私は枕草紙を好まない。隨て面倒な註釋をして、他に興味を分たうとは思つて居なかつたけれども、中古文の中で語格の正しい優秀な文章の、源氏物語と、大鏡と、伊勢物語と、つまり自分の好む書だけを註釋して出した後に、枕草紙もと三四の方からすゝめられた。丁度その時分に、ある本屋から頼まれたので、引受けた處が、いつまでに出るかときいて、「一年位」と言つたら、「そんなに長くかゝりますか、なるだけ早く」とせついで、大いそぎで原稿紙をこちらの望みに刷らせてよこしたのに、とばしりといふものは、實に妙な處へまではねかるもので、なにがしといふ人が情死した爲に、その人の口入で買った株が、どうしたとか、そんな事も少からぬ打撃で、店が悲境に陥つたさうで、頼みに來た支配人も、そこに居なくなつた。さういふわけで中途から大分ゆつくりしたけれども、とにかく出來上り、未詳の處も分つたりしたのを、虫の住處とするのも惜く、さりとて、その本屋の名の入つた原稿紙を持ち廻るのも嫌で、乏い私財を思へば少々悲壯ではあるが、自費で出す事にした。頼まれた途中で障りの出來た事は、不運のやうであるが、頼まれなければ

ば着手しない本である。やはり宿縁があるのであらう。

近松を校訂した時は、どうしてかう親の心などを、よくも寫したものであらうと眼を掩ふて、すゝり泣いた事もある。源氏物語を註釋した時は、どうして、かう上手なのだらうと、感涙を拭つた事が幾度か知れない。この枕草紙には、それほどに感服した處はないが、しかし、あの時代の女流の文學（和泉式部日記、蜻蛉日記などの類）と比べれば、やはり一頭地を抜いて居る。源氏物語が富士山ならば、他の群峯中の雄なるものでは、たしかにある。

七、前田家本

枕草紙を註釋したらと勸めた方の中に、故内田魯庵氏もあつた。

國語の方ではないけれども昔、私が紅葉先生のお弟子として書いた時分に、新聞に褒めて下さつたので、御鑑識に副ふものが出来たらと永年心がけて、源氏物語活釋を出した時に、持参したのが初まりで、時々お談しを伺ひに上つた。

註釋に、とりかゝつてからの或る時、「前田家の育徳學園で、かういふものを百部だけ出して、同家に關係のある處へ配つた。中には實業家など、讀みさうもない人が貰つて居る。その人達の子孫の代に、賣りでも

して世間へ出るんでせう」とて、貸して下さつたのは、同家に傳はつた古い枕草紙の寫本を、寫真版にして、活字本を副へたものであつた。

悉く拜借して讀んで見ると、多分、同家の何代目かの、奥方か姫君か女中かの文才のある人が、枕草紙を「春は曙の卷」「正月一日の卷」「小白河の卷」めでたきものゝ卷」と四つに分け、そこに同じ類を集めたものらしく、たとへば「春は曙の卷」には、その一章を初めとして「九月九日」のやうな處と「冬は」「月は」「川は」「市は」といふやうに、すべて「何は」と擧げた章を集め、「正月一日の卷には」、その章を初めとして、すべて月令や、その時々々の景色、たとへば「六月のつごもり」「冬はいと寒き」の類と、雜纂の章を集め、「小白河の卷」には、その章を初めとして「宮に初めて」「院の御はての年」「菩提といふ寺にて」の類の記事を集め、「めでたき物の卷」には、「六位の藏人」を初めとして「あてなるもの」「うれしきもの」「あはれなるもの」のやうに、すべて「もの」の字のついた章を、おもに集めてあり、そして、大分自分流に筆を加へたり省いたりした痕が見え、又、大進生昌の條のやうな、一番、清少納言の面目の躍如とした處が全然無かつたり、流布本とちがつた處が多くて珍しいといふだけ、大したものではないけれども、しかし貸して頂けた事は、まことに有がたく、それによつての收穫の二三は、別項に記して、よろこびを讀者に分つ事とした。

先づ流布本と違つて居る例に、「春は曙」の章を挙げると、(一は流布本にない處。(二)は前田家本にない處。(三)は流布本の體〇のついで居るは假字がひの處である)
 春はあけぼの。そらはいたく霞みたるに、やうやう白くなりゆく山ぎはの少しづつ、あかみて、紫立ちたる雲の細く棚引きたる。夏はよる、月の頃は更なり闇も、螢の細く飛びちがひたる。又た一つ二つなどほのかに打ち光りてゆくもおかし。雨などの降るさへなかし。秋は夕暮。夕日のきはやかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥の寝にゆくとして三四二三など飛びゆくさへあはれなり。ましてかりなどの連れたるが、いと小さく見ゆるをかし。日入り果て、風の音むしのねなど、はたいふべきにあらすめでたし。冬はつとめて。雪のふりたるは、いふべきにあらす、霜などのいと白く、又、さらでもいと寒きに、火などいそぎをこし、炭など持て渡るもつきんくし。晝になりて、やうくゆるくゆるびもてゆけば、いきも消え、すびつ火桶も、白き灰勝ちに消え成りぬるはわろし。となつて居る。随分な違ひである。

思ひちがへ、寫しちがへらしい例は、

- イ 流布本 犬は打も殺しつべし
- イ 前田家本 犬は打も殺してまほし
- ロ 流 かたらひの岡(大和の跡山を言つたのであらう)
- ロ 前 かたびらの岡
- ハ 流 なが鳥帽子
- ハ 前 なる鳥帽子

- ニ 流 こんげんろく(坤元録)の御屏風
- ニ 前 こむ源六の御屏風

の類。又、

- 流 牛は額つき、いと小さく白みたるが腹の下、足の下、尾の裾白き
- 前 牛は額いと小さく白きが、腹の下、足の根などは白き

などのやうに、前田家本の方が簡潔な處もある。

右の外、

- イ 流 貴き事の限にもあらず
- イ 前 貴き事のみにもあらず
- ロ 流 香の薄もの二藍の直衣
- ロ 前 からの薄もの二藍の直衣

のやうに相違して居る處が數限りなくあつて、一々舉げて居るのは煩に堪へない。

寫した人が、多分婦人である事は文體で分り、學殖のない人であつた證據は、前の「こむ源六の御屏風」だの、流布本の

「すさのなの尊の、いづもの國におはしける御事を思ひて、入丸がよみたる歌などを見る、いみじうあはれなり」とあるのを、

「すさのみかどの、いつもの國におはしましける御ともにて、人まろがよみたる歌などを見るに、いみじうあはれなり」としたやうに、神代の素盞雄尊を帝とし、はるか後の人皇四十二代持統天皇の朝の人、柿本人麻呂が尊の御供をして出雲の國へ往つたなど、飛でもない事にしてあるのでも分る。

年代は、その本の附録の「四季物語歟」とある處に、細字で「貞亨四年」と横書きがあるから、徳川五代將軍綱吉の時代の書寫であらう。(貞亨五年が元祿になつた。)

その附録には、四季の景が、いろ／＼言つてある中に「正月に寺ごもり」の條がある。多分誰かの作の四季物語(鴨の長明のといふ四)を寫す中に、枕草紙の一章を混じたのであらう。さて收穫と思はれる個所は、

イ 流 ほそねり骨など骨は、かはれど

(あとの「七月ばかり」の條に「ほすの葉の紙張りたる扇ひろこり」云々とあるから、朴の木を細く削つたのと塗つた骨なのであらう。)

ロ 前 すまのうまや

(その頃は、都の公卿達が須磨明石に謫けられた例が多いから、ゆかしく思つたので「やまのうまや」ではあるまい。)

右の外に、旁證としての收穫は「ある處に中の君とかやいひける人の許に」の條の「さしのぞきたる髪の、かしらにもより來す、五寸ばかりさかりて」が、春曙抄と、それに據つたと見られる日本文學全書との外の諸本には「さしのぞきたる、かしこより五寸ばかりをさりて」となつて居て、いろ／＼に註さ

れてあつても到底分らないのが、前田家本には、春曙抄と同じく「さしのぞきたる髪の、かしらにもより來す、五寸ばかりさかりて」となつて居る。これならば、女のかもじが五寸ばかり、すり下つたのを、月明りで男が見たので、下文の「驚かさるゝ心地して、やをら立ち出でにけり」の意味がよく分る。

丁度この本が出来上る前に、頒布された前田家本と、貸して下された方とに、これらの收穫を、讀者と共に感謝したいと思ふ。

(春曙抄(徳川五代將軍綱吉時代、北村季吟の著)は、本文には、さうなつて居ても、註では「かしこより云々とある、尤可用か」「五寸ばかり、こなたまで月のさしたるさまなり」と簡単に言つてあり、屋代弘賢(徳川十一代將軍家齊時代)自書の「清少納言が記」には、この一節が全然ない。)

八、「小白河の八講」を、この書に「北白河の八講」こした次第

上に掲げた前田家本の、巻の名ともなつて居る「小白河」といふ地名は、どの書にも「不詳」とか「未詳」とかしてある。分らない事を、其のままにして置くのは氣がすまないで、地名などの本を、あれこれ調べ、何をしながらも絶えず心に懸つて居た。處が、忘れもしない昭和四年六月三十日、雨の降り暮した午後三時に、ふと發見した。

「小白河の八講」を、この書に「北白河の八講」とした次第

その日は誰も居なかつた。一時から机に向つて又しても小白河の地名を探す爲に、あの書、この書の頁を繰る間に、いつも眠りの足りない私は居眠つてしまつた。覺めると同時に無意識に、手近の、それまでも何度も見たであらう都名所圖會の一冊をとつて披けたら、そこに「白河」といふ字があつて「水上は北白河にて」云々とあつた。眼を大きくして次の頁を見ると「眞信公亭、いにしへ北白河にあり、白河殿といふ」とある。眞信公とは藤原忠平の諡である。八講をしたのは、その眞信公の嫡孫の右大將濟時である。そこで八講をしたのであらうと思ひながら、又先をくると、石佛の繪があつて、その上に細字で「小白河の石佛は」とある。「ゆ」「小」思はず膝を打つて「呼」と口の中で叫んだ。「小」の字を誰か「小」と見紛らはしく寫したのが、「小白河」になつたものであると思つて、史料綜覽を見ると、寛和二年六月十八日の條に「右大將藤原濟時、白河ニ於テ八講ヲ修ス」とある。「白河殿」で修したといふ意味か。問題の「小白河、所在未詳」の煩はしさを避けてあるのか。わづか三分か五分の居眠りである。夢を見る間もないのに、さも夢の告でもあつたかのやうに、不用意に手にとつて披けた處に、その地名があつて、わかつたといふ事は、いはゆるこけの一心を、神明が慙んで教へられたのではないかと、今に不思議である。とにかく有りがたい事と思ふ。その後、念の爲に圖書館にゆき、註釋書のあるだけを見たが、いづれも「小白河」で所在は「未詳」もしくは「不詳で」あり、中には八講のぬしを「小一條左大

臣師尹」と誤り註されたのもあつた(濟時は後に左大將となり、小一條左大將濟時卿と言はれたから左大臣と、ふと誤られ和二年に薨じて居る。)なほ又念の爲に、枕草紙以外の木版本を二三見たら、「北」の細字は悉く「小」となつて居る。昔は大てい、さう書いたと見える。

子供は、私が余り長い事、屈託して探してたのを氣の毒に思つたらしく、「品物の發明には登録といふ事が、あるけれども」と、つまらなさうに言つてくれる。けれども、そんな事は、どうでもよろしい。分らない所が分つた時の嬉しさは、自分一人で味ふのだから、それで充分に報いられて居る。

九、「定本」といふ事

この頃どなたかの註釋された源氏物語に、「定本」といふ字が冠せてある。それは河内本(鎌倉時代に河内守親行といふ人が寫した)といふ稀書を得られ、それによつて定家本をなほされたのだといふ事である。

そのなほされた例を見ると、(以下餘分の詞には――相違の處には○を施す)

イ、定家本　よくなる琴をあづまにしらべて、
河内本　よくなる箏の琴をあづまにしらべて

ロ、定　雑々の人なき隙を思ひさだめて(葵の上の車)
河　雑々の人は少き所の隙少しあるを只しめにしめて(争ひの處)

「定本」といふ事

定 見てしがなとおもほせど、けさやかにとりなまむもまばゆし。

河 見てしがなとおもほせど火などをけさやかに、とりなまむも、まばゆかるべければ、(夕顔の河原院の處)

定 さばかりの人は思し憚るべき事ぞ。

河 さばかりの人のなからひは思し憚るべき事ぞ。

の類で、右の中「イ」は「箏の琴」と言はないでも、「あづま」(七)に合せると言へば、たゞ「琴」だけで「箏の琴」(十三)とわかり、「ロ」の「雑々」(下)の人なき隙を思ひさだめて」だけで、「雑々の人は少き所の隙少しあるを」など拙く、くどく言はないでも分り、「ハ」の「火などを」と言はないでも「顯著にとりなまむも」で、「火をつけてはつきりあらはすのも」の意は分り、「まばゆかるければ」と續けてあるよりも、「まばゆし」と切つてある力強い方が紫式部の筆法であり、「ニ」の「さばかりの人は」も、「のなからひは」と冗漫に言はないでも、前後の関係で「さばかりの人の中は」の意に充分とれる。

伊勢物語にも丁度同じ例がある。たとへば

イ、定家本 去年を戀ひて往きて、

異本 去年を思ひいで、彼の西の對に往きて、

定 人を据ゑてまもらせければ、いけども得あはで、

異 人を据ゑてまもらせければ彼の男いけども得あはで、

定 女の得うまじかりけるを年をへてよばひ渡りけるを、

異 女の得あふまじかりけるを年をへてよばひ渡りけるを、

の「イ」の定家本のやうに、「戀ひていきて」の簡潔な方が「思ひ出で、彼の西の對にいきて」よりは、力強く、「ロ」の異本のやうに、「彼の男」と断らないでも、前からの續きや、あとの歌で「彼の男」といふ事は、よく分り、「ハ」の定家本のやうに「女の得うまじかりける(自分のものと)」を年を経て、よばひ渡りける」ならば、きこえるけれども、異本の「逢ふまじかりけるを年を経て婚よはひ」では、分らないやうに、すべて定家本は簡潔であり、異本は、くどくなつて居る。

紫式部は、事を叙するのは極めて細密であるけれども、語句は極めて簡明である。一つ二つの例を挙げると桐壺の巻で、桐壺の更衣がなくなつた葬儀の條に、「内裏より御使あり、三位の位贈り給ふ由、勅使來てその宣命讀むん悲き事なりける」とある。四位の更衣が、女御の位である三位を贈られたのである。更衣の母の心に、随分とおもだしく嬉しい事ではあるが、それにも紛れ得ない、又それにつけて、いよいよあきらめ切れない複雑な心持を、「悲き事なりける」の一句に盡したのは、いみじい筆である。又夕顔の巻に、夕顔上が河原院で物の怪におびえて死んだ翌日の條に、「なほ悲しさのやる方なく、たゞ今の骸を見では、又いつの世にか、ありし貌をも見んと思し念じて、例の大夫(推)隨身を具して出で給ふ。路遠く覺ゆ」とある。昨日まで、「來ん世も深き契たがふな」と約束された人に俄に死に別れて、今日はその人の葬りの前に逢はうと急がれるのである。「路遠く覺ゆ」の一句は、紫式部であつて、初めて言ふ

事の出来る、短い勁い秀句である。

それで私は、源氏物語は、語句の簡約な定家本の方が、紫式部のもとの文章であり、河内本は、前田家本の枕の草紙の「春は曙」の章のやうに、後の人が自分に分る程度に詞をふやしたものであると思ふ。
(伊勢物語も、それと同じ意味で注釋の時、定家本に據つた)とにかく、どれを定本と極める事は不可能であると思ふ。

十、定家卿の功蹟

前の章に定家本といふ事を言つたについて、その卿の偉大な功蹟を述べたくなつた。

卿が古典を愛される余りに、忠實に古本の面目を傳へて、異本の發生を防がうと努められた事は、實に涙ぐましい尊い事である。自たい筆まめの方と見えて、その日記の明月記は、治承四年の十九歳から嘉禎元年の七十四歳に迫んで居る。(その間、壽永から安貞にわたつて、すべて十九年ばかりの關失はあるけれども)

その記録(原文は漢文である)の

六十四歳の條に「去年十一月より、家中の少女等をして、源氏物語を書せしむ。昨日表紙訖る。」として「狂言綺語といへども鴻才の作る所、之を仰げば彌と高く、之を鑽れば彌堅し、短慮を以て之を辨すべけんや」と激賞してある。

六十五歳の七月八日の條に「暑熱焦くが如し。經を寫さんと欲するも、心神迷て字を成さず」とある。

(三十一歳から殆ど毎日寫經されて居る)

六十九歳の三月廿七日の條に「午時參殿、入御の後、退出。源氏物語の料紙草子を給ふ。老筆更に叶ふべからざる事なり。桐壺書くべきよし仰せらる。甚だ見苦しき事歎」

同年四月四日の條「源氏を書くの間口熱齒痛を發し、朽齒極めて弱る。苧をつけて少年嬰兒の如く引いて落し了る。」(齒を抜くこと)

七十歳の八月七日「徒然の余り、一昨日より盲目の筆を染めて書し、伊勢物語了る。其の字鬼の如し。」同年八月卅日の條に「朝、拾遺集を書し終る」とある。又

七十二歳の正月廿日の條に「紫日記、更級日記その外蜻蛉日記の所殘か、之に仍て書て出す」云々とある。

右の外に古今集、千載集、土佐日記、大和物語等も書寫されて居る。

卿の寫本が正確で、誤字や脱字のない事は、後鳥羽院が、新古今和歌集の御點歌五卷を書き出すやうに命ぜられた時に、「定家は字の誤なく早速の故に之を命ずる」と仰せられたとあり、七十歳の八月十八日の條に「大和物語を書し、今日終る。平生書く所のもの、落字なきを以て惡筆の一得となす。毫心數行

を脱落し、之を書き入る。耻と爲す」と、偶まの脱落を非常に耻ぢられてるので分る。

もし、この卿が疼む手に筆を呵し（六十九歳の二月十九日の條に「疼む手を以て慙いに部類萬葉集を書き始む」とある）口熱を蛭に吸はせ（同じ卅日の條に「朝の間止觀を校す、未の時、口熱、蛭を飼ふの後、又之を校す」とある）盲目といふ程の老眼をしばたきながらの、貴い勞力をせられなかつたら、源氏物語、紫式部日記、土佐日記、更級日記その外いくつかの歌集等も、ほんとうのもの、もとのものが残らなかつたかも知れない。實に、この卿は、歌人である以上に、古典の守護神であつた。

十一、誤られた事をそのまゝに傳へる弊

源氏物語は、雲隱までが一貫した紫式部の大美文であり、あとの「匂宮」と「紅梅」と「竹川」の三卷は、見るに堪へない悪文である。「宇治十帖」は間々語格の不用意な處があつて、雲隱までのやうな微瑕のない白玉とは、ゆかないけれども、しかし中々の美文である。紫式部の女、大貳三位が書いたといふ説は中つて居るやうに思ふ。母の文才を享けた娘が、母の書いたあとを継ぎさうな事でもある。けれども紫式部自身は（以上の三卷は勿論）宇治十帖を書くやうな事はしない。

なぜといふと、夜居の僧が冷泉院に、源氏の君と藤壺との秘事を密奏したのと、宇治十帖で、侍従が薰

に、柏木と女三宮との密事を告げるのとは、全く同じ手法である。

紫式部は、さういふ重複した趣向をするやうな、平凡な作者ではないからである。

佛教が盛んな頃の女性で、遁世の願ひの深かつた紫式部が、因果の大理を説かうとした趣意は、源氏の君が柏木と女三宮の密事を知つた時に、人しらぬ藤壺との昔の罪を、父帝は必らず心中に知し召して、我がこの苦痛と同じ思ひを味はられたのであらうと、深く慙ぢ恐れる處で盡してある。

そして間もなく、紫上がなくなつた。

源氏の君が十七才の時に、小柴垣から垣間見て、藤壺に似た若紫を得られてから、他に幾人の思ひ人があつても、「今年は去年に増り、今日は昨日にまさる」鐘愛をされたのは、その若紫の紫上である。

その人が三十七歳で「霞の間から見える権櫻」のやうな美しい姿を、地上から消してしまつた。源氏の君の心には、大きな悔恨のあとに、果しない愁傷が襲つたわけである。

それで、その翌年の幻の卷には、玉と磨いた六條院の庭園の、正月から十二月までの移りかはる景につけて、源氏の君が紫上を戀ひ惚ぶ情を、艶麗を極めた筆で細叙し、十一月の處に「やう／＼然べき事も御心の中に思し續けて、侍ふ人々にも、ほど／＼につけて物給ひなど」し給ふと、かたみ分けの事を記して、その次は雲隱といふ卷の名に、源氏の君が隠遁の事と、その後の薨去とを知らせて、一字も書

護られた事をそのまゝに傳へる弊
 かないといふ超人的の終局がつけてあるので、あとの人が、どうしたの斯うしたのと、つけるのは全く
 蛇足である。

以上のわけで、たしかに匂宮からは別人の筆であり、随つて年立に一年の違ひ位は、ありさうな事であ
 るのに、本居宣長のやうな方までが、その年立の相違の辨を、いろ／＼と骨折つて書かれてあるのは、
 實に不思議である。

すべて、前人の言つたあとを踏襲し、骨折つてそれに合せやうとするのは、國文界の弊と思ふ。

私は、源氏物語五十四帖といふ事を否定し、伊勢物語では業平の事實上の東下りを否定し、又この草紙
 で小白河の事をいふ。よくもよくも異説を立てる生意氣なといふ批難を負はうかと、冷汗が出るけれど
 も、日蓮上人が、「これ傲れるにあらず、正法を惜む心の強盛なるべし」と申されたのと、同じ心持で
 ある事を、分つて頂きたい。(完)

昭和五年九月十四日

小林榮子 しろす

本文目次

春は曙……………	一	今内裏の東をば……………	二五
頃は……………	二	山は……………	二六
む月ついたちは……………	三	峯は……………	二九
七日は……………	三	原は……………	二九
八日……………	五	市は……………	三〇
十五日は……………	六	淵は……………	三一
除目のほど……………	七	海は……………	三一
三月三日は……………	八	渡りは……………	三一
祭の頃は……………	九	みさゝぎは……………	三二
こと／＼なるもの……………	一一	家は……………	三三
思はん子を……………	一一	清凉殿のうしとらの……………	三四
大進生昌が家に……………	一二	すさまじきもの……………	四五
上にさぶらふ御猫は……………	一八	たゆまるゝもの……………	五三
む月ついたちやよひ三日は……………	二四	人にあなづらるゝもの……………	五三
よろこび奏すること……………	二四	にくきもの……………	五三

本文目次

文ことばなめき人こそ 五九
 小一條院をば 六三
 心ときめきするもの 六六
 過ぎにし方戀しきもの 六七
 こゝろゆくもの 六七
 びらう毛は 六九
 説經師は 七一
 菩提といふ寺に 七五
 北白河といふ處は 七六
 ふみ月ばかり 八四
 木の花は 八九
 池は 九二
 せちは 九五
 木は 九七
 鳥は 一〇三
 あてなるもの 一〇八
 虫は 一〇九
 ふみ月ばかりに 一一一

似氣なきもの 一一二
 細殿に 一一四
 とのもり司こそ 一一五
 職の御曹司の西おもて 一二六
 殿上の名對面 一二三
 若くてよろしき男の 一二五
 若き人とちごは 一二六
 人の家の前を 一二七
 瀧は 一二九
 川は 一三〇
 橋は 一三一
 里は 一三三
 草は 一三三
 集は 一三七
 歌の題は 一三七
 草の花は 一三八
 おぼつかなきもの 一四一
 たとしへなきもの 一四二

忍びたる處にては 一四三
 けさう人にて來たるは 一四四
 ありがたきもの 一四五
 うちの局は 一四六
 職の御曹司におはします頃木立 一五〇
 あぢきなきもの 一五二
 いとをしげなるもの 一五三
 心地よげなるもの 一五三
 とりもてるもの 一五四
 御佛名のあした 一五四
 頭中將の 一五六
 かへる年の 一六四
 里にまかでたるに 一七〇
 ものゝあはれ知らせがほなるもの 一七四
 さてその左衛門の陣に 一七五
 職の御曹司におはします頃西の廂に 一七六
 めでたきもの 一九二
 なまめかしきもの 一九八

宮の五節いださせ給ふに 二〇〇
 細太刀に平緒付て 二〇四
 内裏は 二〇五
 無名といふ琵琶の御琴を 二〇七
 淑景舎 二〇八
 上の御局の御簾の前にて 二一〇
 御乳母の大輔の 二一一
 ねたきもの 二二二
 片腹痛きもの 二二六
 あさましきもの 二二七
 口惜きもの 二二八
 五月の御さうじの程 二二九
 御方々 二三二
 中納言殿參らせ給ひて 二三三
 雨の打ちはへ降る頃 二三四
 淑景舎春宮に 二三七
 殿上より 二四八
 二月のつごもり 二四八

本文目次

遙なるもの 二五〇
 方弘は 二五一
 關は 二五三
 森は 二五四
 卯月のつごもりに 二五六
 湯は 二五七
 常よりも殊に聞ゆるもの 二五七
 繪に書きて劣るもの 二五八
 書き勝りするもの 二五八
 あはれなるもの 二五八
 む月に寺に 二六一
 わびしげに見ゆるもの 二六九
 暑げなるもの 二七〇
 耻しきもの 二七〇
 むとくなるもの 二七二
 修法は 二七三
 はしたなきもの 二七四
 關白殿の黒戸より 二七六

九月ばかり 二七八
 七日の若菜を 二七九
 二月官のつかさに 二八〇
 頭辨の御許よりとて 二八〇
 などてつかさ得はじめたる 二八三
 故殿の御爲に 二八五
 頭の辨の職に 二八七
 五月ばかりに 二九一
 圓融院の御はての年 二九三
 つれづれなるもの 二九八
 つれづれ慰むるもの 二九八
 とり處なきもの 二九九
 なほ世に愛たきもの 三〇〇
 故殿などおはしまさで 三〇五
 む月十日 三一二
 清げなる男の 三一二
 おそろしきもの 三二五
 清しと見ゆるもの 三二五

きたなげなるもの 三二六
 いやしげなるもの 三二六
 胸つぶるもの 三二七
 うつくしきもの 三二八
 人ばえするもの 三三〇
 名恐しきもの 三三一
 見るに殊なる事なきもの 三三三
 むづかしげなるもの 三三三
 えせものゝ所得る折 三三四
 苦しげなるもの 三三六
 うらやましきもの 三三七
 とくゆかしきもの 三三〇
 こゝろもとなきもの 三三〇
 故殿の御服の頃 三三三
 宰相中將 三三六
 此のやよひつごもり 三三七
 弘徽殿とは 三四三
 昔憶えて不用なるもの 三四五

頼もしげなきもの 三四六
 經は不斷經 三四七
 近くて遠きもの 三四七
 遠くて近きもの 三四七
 井は 三四八
 受領は 三四九
 やどりのつかさの 三四九
 大夫は 三四九
 女のみとり住む家 三五一
 宮仕人の 三五一
 雪のいと高くはあらで 三五四
 村上の御時 三五五
 みあれの宣旨 三五七
 宮に始めて参りたる頃 三五七
 したり顔なるもの 三六六
 風は 三七〇
 野分のまたの日こそ 三七二
 こゝろにくきもの 三七三

本文目次

嶋は 三七五
 濱は 三七五
 浦は 三七六
 寺は 三七七
 經は 三七七
 文は 三七八
 佛は 三七八
 物語は 三七九
 野は 三八〇
 陀羅尼は 三八一
 讀經は 三八一
 あそびは 三八一
 あそびわざは 三八二
 舞は 三八二
 彈物は 三八三
 調は 三八三
 吹き物は 三八四
 見るものは 三八六

五月ばかり山里に 三九〇
 いみじう暑き頃 三九一
 五月の菖蒲の 三九二
 よくたきしめたるたきもの 三九二
 月のいとあかきに 三九三
 大きにてよきもの 三九三
 短くてありぬべきもの 三九四
 人の家につきにくしきもの 三九四
 ものへいくみちに 三九五
 行幸はめでたきもの 三九五
 よろづの事よりもわびしげなる車に 三九六
 ほそどのに便なき人 三九九
 三條宮におはします頃 四〇〇
 かなな月十日あまり 四〇二
 成信中将こそ 四〇二
 大藏卿 四〇三
 覗きたなげに塵ばみ 四〇三
 珍しといふべき事には 四〇六

本文目次

うまやは 四〇七
 岡は 四〇七
 社は 四〇八
 降るものは 四一三
 日は 四一四
 月は 四一四
 星は 四一四
 雲は 四一五
 さわがしきもの 四一五
 ないがしろなるもの 四一六
 ことばなめげなるもの 四一七
 さかしきもの 四一七
 上達部は 四一八
 きんだちは 四一九
 法師は 四一九
 女は 四二〇
 みやづかへどころは 四二〇
 身を代へたらん人などは 四二一

雪高う降りて 四二一
 細殿の遣戸 四二二
 只過ぎに過ぐるもの 四二三
 殊に人に知られぬもの 四二三
 賀茂へ詣づる道に 四二四
 は月つごもりがたに 四二五
 いみじくきたなきもの 四二六
 せめておそろしきもの 四二六
 頼もしきもの 四二六
 いみじう仕立て 四二七
 世の中に 四二八
 男こそなほいとありがたく 四二九
 よろづの事よりも情あることは 四三〇
 人のうへいふを 四三一
 人の顔に 四三一
 うれしきもの 四三二
 關白殿二月二十日の 四三八
 たふときもの 四六二

歌は……………四六二
 さしぬきは……………四六三
 狩衣は……………四六三
 單衣は……………四六四
 わろきものは……………四六四
 下がさねは……………四六六
 扇の骨は……………四六六
 檜扇は……………四六六
 神は……………四六七
 崎は……………四六八
 屋は……………四六八
 時奏する……………四六八
 日のうら／＼とある……………四六九
 成信中将は……………四七〇
 常に文おこする人の……………四七六
 きら／＼しきもの……………四七八
 方違などして……………四七九
 雪いと高く降りたるを……………四八〇

陰陽師のもとなる童……………四八一
 やよひばかり……………四八一
 清水にこもりたる頃……………四八三
 しはす廿四日……………四八四
 宮仕する人々……………四八六
 みならひするもの……………四八七
 打ちとくまじきもの……………四八七
 右衛門尉なる者の……………四九一
 又小野殿の母上こそは……………四九一
 又なりひらが母の宮の……………四九二
 をかしと思ひし歌などを……………四九三
 大納言殿参り給ひて……………四九三
 僧都の君のおんめとの……………四九六
 男は女親なくなりて……………四九八
 定澄僧都に……………四九九
 まことや下野に下る……………四九九
 或る女房の……………五〇〇
 びなき所にて……………五〇〇

女のうはぎは……………五〇一
 唐衣は……………五〇一
 裳は……………五〇一
 汗衫は……………五〇二
 織物は……………五〇二
 紋は……………五〇二
 片つ方のゆだけ……………五〇三
 かたちよき君達の……………五〇三
 やまひは……………五〇四
 こゝろづきなきもの……………五〇五
 みやづかへ人の許に……………五〇六
 初瀬に詣うで……………五〇七
 いひにくきもの……………五〇八
 東帯は……………五〇九
 たくみの物食ふこそ……………五〇九
 物語りもせよ……………五一〇
 或る所に……………五一〇
 女房の参りまかでするには……………五二二

すき／＼しくて……………五一三
 清げなる若き人の……………五一五
 前の木立高う……………五一五
 きよげなる童の……………五一八
 見苦しきもの……………五一九
 ものぐらうなりて……………五二〇

(終り)

新口譯 枕草紙

小林榮子著



春は曙(がよい)。段々あたりが白くなつてゆくと、山の麓がぼつと赤るんで、紫が、つた雲が細くたなひいて居る(のが非常におもしろい)。夏は夜(がよい)。月の時分はいふも更なり、闇でも、螢が飛び交たりするのは(やはりよい)。

そして、雨が降つたりするのまで又よい。秋は夕暮(がよい)。夕日が、まづかに、あたつて、山がはつきりと近く浮び上つた處へ、ねぐらにゆく鳥が三

春は曙

春は曙。漸う白くなり行く山際少し紅りて、紫立たる雲の細く揺曳たる。夏は夜。月の頃は勿論なり、闇も仍螢飛び交たる、雨などの降さへ興し。秋は夕暮。夕陽輝に射て、山端甚近くなりたるに、鳥の宿所へ往とて、三四二など飛び往さへ恰なり。況て雁などの列たるが甚小く見る甚興し。日入り果て、風の音虫の音など甚恰なり。冬は早旦。雪の降たるは言べきにもあらず、霜などの甚白く、又、然でも甚寒きに、火など急ぎ熾して、炭持て渡るも甚似合し。晝になりて温く緩和もてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰勝に成ぬるは厭し。

羽四羽二羽と、一かたまりづゝ飛んで往くのおもしろい。まして雁などが列を作つて往くのが、(高く澄んだ空に)小さく見えるのは、非常によい。冬は早朝(がよい)。雪の降つたのは勿論、霜などが真白く、又さうでなくとも、非常に寒いから火など急いで熾して、炭を持ち歩くのも非常に似つかはしい。晝になつて寒さが段々緩んでゆくと、炭櫃や火桶の火も(誰もかまはないので)白い灰澤山になつたのは、いやだ。

時節は、正月と、三月と、四五月と、

七月と、八九月と、十月と、十二月と、(かう言つてゆくと)すべて、どの時でも、それ相當に一年中おもしろい。正月一日は(又)まして空の景色がうららかに(これまでの冬とちがひ)珍しく霞み籠めてあるのに皆なが、とりわけ、身なりをつくるつて、君をも、自分をも、祝ひなどして居る様子が、格別おもしろい。

七日は、雪の間に見える若菜の青やかなのを摘み出して、平日はそんな物を御覽にもならない(高貴の)御前に持ち出し、白馬を見やうとて、有位の人の家人は、車を綺麗に装ひ立て、拜見に出かける。中の御門の闕の處を引き込む時、(乗合ひの人の)頭が一處にぐら

む月ついたちは 七日は

春は曙 美しく窓切よき句の開卷の初めにある事は、この書の喧傳さるゝ原因の一つなるべし、この下に「こそ、よけれ」ぞ、よき」その他何といふ詞を添へても不可なり、言ひ切りたる處に力と味ひあり○あかりて 東天、紅を潮するなり「白くなりゆく」の下に「に」の字を入れば解し易し○紫立ち 立ちば「稍」の意に用う、紫が、りたるなり○たなびきたる この下に「が、おもしろし」の意こもりたり○夏は夜「春は曙」と同じいひ方なり○降るさへ「さへ」は一つある上に又、副はる時に用うる助詞(てに)なり、闇の夜も、螢の飛び交ひたるはおもしろく、その上に雨のふりたるも、おもしろしとなり○山の端いと近くなりたる 常は遠くに見ゆる山の、入目のはなやかなる爲に、はつきりと近く見ゆるさまなり○三羽四羽二羽 三々五々といふに同じ、三羽、或は四羽、或は二羽づゝ、むれを成して飛びゆくさま○あはれなり 古へは詞の數少かりし故、大方は「あはれ」と「なかし」にて評し去りたり。あはれと云ふ中にも、處によりて哀れなる意にも、可憐なる意にも、おもしろき意にもいへり、こののは、おもしろき方なり○いふべきにもあらず「無論おもしろい」の意○もてゆけば「追々」の意○すびつ 炭櫃の略にて圍爐裏をいふ、禁秘抄殿上の下侍(三間)の條にも「有炭櫃四面敷疊號三侍臣亂遊所也」とあり○火を火 昔のは木をくりたるなれば桶といひたるべし、中に真鍮を張りて灰を置き、火を入る○わろし この詞も「悪き」事にも、「拙き」意にも、「醜き」事にも用ゐたり、こののは「いやだ」とか「いけない」とかいふ意に用ゐしなり、「なかし」「あはれなり」など、揚ぐる方のみを重ね來て、終りの一つを「わろし」と抑へたるは、變化ありて轉結頗る可ともいふべし。

頃は、正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、惣

て節に就つゝ一年ながら興し。

正月一日は、況て、空の景色うらくと珍く霞み籠たるに、世に在りと在る人は、姿貌格別に粧ひ、君をも我身をも、祝などしたる體、殊に興し。

む月 正月をいふ。初春改曆の時は、人の心相せて相睦べは睦月とも、春陽發生の意にて生月の界ともいへり○まいて「況て」の音便にてやわらかくいふなり、「一年ながらなかし」と前に言へるを受けて「その中にもまして」の意○うらく「うらら、うらら」をつめたるなり、のどやかなる事○かすみこめたる 天も地も霞にて包みたるさま○君をも祝ひ 元日の祝賀なり、「元日の節會」といふ。

七日は、雪間の若菜青やかに摘み出つゝ、例は、然も然る物、眼近からぬ所に持て騒ぎ、白馬見んとて、里人は車清げに仕立て見に往く。中の御門曳き入る程、頭ども一處に轉び合て、挿櫛も落ち、用意せねば折などして笑も亦興し。左衛門の陣などに殿上人數多立などして、舍人の弓ども取て、馬ども驚して笑を、僅に見入れたれば、立膝などの見るに、主殿司、女官などの行き交たるこ

つき合つて、刺櫛も落ち、悪くすると折れたりして、笑ふのおもしろい。左衛門の陣などに殿上人が多勢立つて、舍人が弓など持つて、馬をおどして笑ふのを、ちよいと覗くと、立部などが些し見える(中)に、主殿司や女官などが往きちがつて居るのがおもしろい。どれ位の人が、九重の雲深いわたりを、こんなに恐れ氣もなく馴れ歩くのだらうなど、思ひながら(見ると)見入は、ひどく狭くて、(よく見える處が)舍人の顔の生地も顯はれ、白粉の、ゆきつかない處は、とんと黒い庭に雪が處々消えて居るやうで、誠に見ともない。馬が(何かに驚いて)跳ね上り騒ぐのも恐しさに、後じさりをして、よく見られなかつた。

そ興しけれ。如何ばかりなる人、九重を斯く立ち馴すらんなど思ひ遣るゝ中にも、見るは甚狭き所にて、舍人が顔の素も露れ、白きものゝ行き着ぬ所は、眞に黒き庭に雪の叢消たる心地して甚醜し。馬の跳り騒たるも恐く覺れば、引き入られて熟も見遣れず。

七日 後世の七草なり○さしもさるもの 然しも然るものにて、「そんなにも、さういふもの」なり、野菜なればいふもてさわざ「持ち騒ぐ」にて、もてはやす事、支那の荊楚歳時記といふ書に、「正月七日、七種の菜を食すれば、万病邪氣を免る」とあるにならひて、第五十二代嵯峨天皇承和元年正月始めて七日に白馬節會を行はれ、七種の菜を膳に上されたり。七種は七種の菜の稱にて、秋の七草に對していふ、芹、薺、御行、葵、佛座、(田平子) 菘、蘿蔔をいふ、後世七日の朝に唱へ言して、この七菜を打ちばやし粥に炊きて食し七種粥といふ○白馬 正月七日左右馬寮よりあな馬(黒毛に青味ある馬)廿一疋を紫宸殿の庭中に引き渡して天皇の御覽に供す、禮記に、「迎春東郊一見青馬七匹」とありて陽氣を助くる意なるべし、醍醐天皇の延長年間より白馬となされたれども、もとのまゝに呼ばるゝなり。その後にある宴を白馬節會といふ○さと人 内裏の外にある人はいふ、有位の人の家族など○中の御門 内裏の東面、御芳、陽明、二門の間にある待賢門をいふ、南面の中の御門は朱雀門なれど、この頃は西の京裏へ、東の京のみ榮えなれば貴紳も多く此の門より入りしなるべし○戸じきみ 戸をしめる時の支へ木にて高し、それを牛車の乗り越ゆる時ゆるゝなり(此の頃の車は轆を直ちに車臺にくゝり付けたるな

れば動搖烈しきなり)○頭ども 前二人、後二人向ひ合ひて乗る故、烈しき動搖の爲鉢合せするさまなり○さしぐし 梳く爲にあらで、飾りにさすなり、されど延喜式(醍醐天皇延喜五年藤原時平等の撰輯して上りしもの)に、「凡、内命婦三位以上聽用ニ象牙櫛ニ云々と見えなれば清少納言等のは木櫛(折れなどしてとあるを見るにも)なるべし、万葉集に、「つげの小櫛もさ、す來にけり」などもありて木ならば黄楊なり○左衛門陣 左衛門陣は建春門内に、右衛門陣は月華門内にあり、出入を管する武人の詰所、(中の御門即ち待賢門を入り右折したる處に左衛門陣あるなり)○殿上人 昇殿を許されたる人にて五位以上なり○舍人 殿人の約といふ、天皇々族に侍して雑役をなす官にて、攝關以下の臣にも賜はる、牛車の牛飼、乗馬の口取等をもいふ、「弓ども」と下にあれば、こは今日の儀仗に立ちたる近衛の舍人なるべし○馬ども驚かし 殿上人の戯るゝさまなり、白馬が大庭より左衛門陣を経て、陽明門に達する途次○はつか「僅」なり○立じとみ 蒞(細き木を縦横に組みて格子とし、格子の間を板にて張りたるものにて日除の戸なり)を衝立の如く作りて庭先等に置き、眼かくしとするもの○とのもりづかさ 主殿寮の官人にて供御、御輿、鞆、等々の事、及び殿庭、洒掃、庭燎等の事を掌る○女官 内侍、命婦、藏人をニヨクランといひ、以下の下臈をニヨクランと呼ぶなり○行きちがひたる立部 立部にある温明殿の簀子などにてなるべし○いかばかりなる人 こはまだ清少が清原元輔の娘として、白馬の行列を建春門外にて見物せるなれば、禁中を立ちならす人を羨しく見るさまなり○見るはいと「見える眼界は僅の場所にて」の意○顔のきぬ 儀装する時は男子も顔に米の粉にて製したる白粉を塗る。こは舍人等、疲勞して汗に白粉の剝け落ち生地のはらはれたるさまなり、晴晴しき處に出で、も唯恐れてはあらず、それらを笑ひ見る清少のさまなり○よくも 行列を仔細にも見ぬなり、此の處「車清げに仕立て、見にゆく」までは大らかに世間の事を書きて、さて嘗て自身の経験したる事を書けるなり、「よくも見やられず」は「よくも見やられざりし」の意にて、過去にありし事を記し出でたるなり。

八日は、(叙位された)人々が祝ひをして馳け歩き、車の音も、ふだんよりは格別に聞えて、おもしろい。

八日、人々拜謝して走り騒ぎ、車の音も平日よりは殊に聞えて興し。八日 女官叙位、女王に祿を賜ふ日なり、祿は人別に緇二疋綿六屯○車の音 女王などの、拜謝に參内あるさまなり。

十五日は、もち粥のお節供を頂く。粥の木を後に隠して、古参の女房や他の女房たちが、ねらふのを打たれまいと、いつも、うしろに氣を配つて居る様子も可笑いのに、どうした拍子か、うまく打ちあてた人は、たまらなく、おもしろがつて笑ふのも非常に陽氣だ。打たれた方の人は、残念に思ふのも、もつともだ。去年から新規に通ふ女房さんなどが、参内するのを、早く来よかし、自分こそ、打つてやらうと思ふ女房が、隠れて覗いて居るのを、前の方に居る友達的女房が、知つて居て笑ふと、だまつて「と手まねで制したりするのを、婢さんは知らぬふりして鷹揚にして居なされる。

女房「一寸此處の物を」など、いつて、

傍へ馳け寄りざまに打つて逃げるのを居合せた女房達が、ワツと笑ふ。婢さんも怒りもせず、にこ／＼笑つて居る様子が、格別驚いたらしくもなく、顔を少しあかめて居るのもよい。又てんでに打ち合つて、男までが女を打つたりする。なぜか自分が打たれると、泣いて怒つて、打つた人をのろつて、(死んでしまへなど)縁起の悪い事を言ふのも可笑い。禁中などの儀式張つた處までが、今日は皆な、ふざけて禮儀も何もない。

除目の時分など、禁中では非常におもしろい。雪が降つて、かん／＼凍つて居る上を申文など持ち歩いて居る。それも四位や五位などの若い快活な

十五日は糯粥の節供奉る。粥の木引き隠て、家の御達女房などの覗ふを、打れじと用意して、常に背後を用意したる氣色も可笑きに、如何にしてげるにかあらん打ち當たるは、甚う興ありと打ち笑たるも、甚映々し。憾しと思たる道理なり。去歲より新う通ふ婢の君などの内裏へ参る程を、待遠く、所に就て我はと思たる女房の覗き、奥の方に彷徨ふを、前に居たる人は心得て笑を、「噫喧々々」と招き懸れど、君見知す貌にて、寛裕にて居給り。「此處なる物取り侍ん」など言ひ寄て、走り打て逃れば、在る限笑ふ。男君も憎からず愛敬づきて笑たる、殊に驚す、顔少し赧みて居たるも興し。又互に打て男などさへぞ打める。如何なる心にかあらん泣き腹立ち、打つる人を呪ひ、禍々しく言も可笑し。内裏邊など貴きも、今日は皆亂て禮儀なし。

もちがゆ 十五日を望潮(満潮の轉)十五夜を望月(満月の轉)といへば、十五日の朝なればいひしか、又この頃は諸般を通じて、餅といひし故、あづき粥の事をいひしならんか、土佐日記正月十五日の條に「今日あづき粥煮す」とあると、鴨

長明の著といふ四季物語に、七種の粥の事をいひて「この事、推古の御代よりある事にて、赤きは陽の色を借らせ給ふ御事にて、小豆の御粥賜はらせ給ふとぞ、冬の陰の余氣を、陽徳にて消させ給ふ御心なるべし」とあるにて明かなり○かゆの木かゆをたきたる粥のもえさしとも、かゆを焦げぬやうに、かきまはす棒ともいへり是にて腰を打たるれば、その年はらむといひし故、若き女は耻かしく思ひしなるべし○御達「何の御」など敬稱さるゝ上臈たちなり○新う通ふ この頃は夫の方より妻の家に通ふなればいふ○ころもとなく 俗に岡焼などいふ氣分にて、早く来よかし、打たんと待遠に思ふなり○たゞずまふ た、すむを延しいへるなり、「目成る」を「まもらへ」隠るを「隠るへ」の如し○あながま「噫驚」にて、「あゝやかまし、おだまりなさい」の意○招きかくれど 手を振りて制するさま。

除目の程など、内裏邊は甚興し。雪降り凍りなどしたるに、申文持て歩く。四位五位若やかに心地好げなるは甚頼し氣なり。老て頭白きなどが、人に兎角案内言ひ、女房の局に寄て己が身の偉き

は、大きに頼もしさうだ。年をとつて髪かみの白い人などが、人にいろくくと取次などを頼み、女房の、へやに寄つて、自分のえらい點などを熱心に咄して聞かせるのを、若い女房達は、口眞似身ぶりをして笑ふけれども、そんな事は知らずに「よろしくお奏し下さい」「お啓し下さい」など言つても、望み通り役にあり付けたのはよいが、とう／＼ありつけなかつたのは實に氣の毒だ。

三月三日、うらくかに、のどかに（日の）照つた様子（や）、桃の花が丁度咲き初めた様子（や）、柳などが非常に風情のあるなどは、言ひやうもなくよい。それも芽ぐんだばかりで、繭に籠つて居るのがよい。開いてしまつたのは、きたならしい。桃の花も、散つたあとは、

いやなものだ。（又）美しく咲いた櫻を長く折つて、大きな花瓶に挿したのはきれいだ。櫻の直衣ちしやまに出だ桂けいで、お客人にしる、御兄おにい様方にしる、その花の傍で、何か言てお出でになるのは、誠にお美しい。その邊を、蝶や鶯が、美しい顔つきをして飛んで歩くのも、實に美しい。

祭の時分は非常におもしろい。（初夏であるから）木々の葉がまだ茂らない若々しい青さで、霞も霧も邪魔をしない、はつきりした空の様子も、何となくおもしろいのに、少し曇つた夕方（や）夜など、こつそり啼いてゆく杜鵑が、聞きながへかと思はれる位、遠くで微かなのを聞きつけたのは、堪らなくうれしい。祭が近づいて、青朽葉、二

由よしなど心を遣やりて説さき聞きするを、若わかき女房は眞似まねをし笑わらど、争いか知しん。「好よきに奏そうし給たまへ」「啓けいし給たまへ」など言ても、得えたるは好よし。得えず成なりぬること甚いさ可あはれなれ。

除目 官に除し目録に記す意にていふ、正月十一日より十三日までには縣召アガタメシの除目あり、春の除目ともいふ、諸國司を召して任官あるなり、秋のは司召ツクシとして在京諸司の官人を任ぜらる、なほ臨時に行はる、な臨時の除目といふ○申文 上へ申す文書にて奏文といふ。自身の効能をときて、何處の國司とさるれば、しか／＼の事を致さんなど希望と抱負を述ぶるなり○案内いひ 縁をたよりにて申請しもらふなり○奏し 天皇に申し上げること○啓し 三宮（太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮）又は皇太子に申し上げる事。

三月三日は、うらく／＼と長閑に照たる。桃の花の今咲き初る。柳など甚趣いざな致なきこそ勿論なれ。其も未だ繭に籠りたるこそ美しけれ、廣りたるは憎し。花も散たる後は可厭うたてぞ見る。美麗く咲いたる櫻を長く折て、大なる花瓶に挿たるこそ美しけれ。櫻の直衣に出桂して、客人にもあれ、御兄の君達にもあれ、其處近く居て物など打ち言たる、甚美し。其の邊に鳥、蟲の面貌、甚美うて飛び歩く、甚美し。

やよひ 草木の彌生いよせいひさがる故にいふ「彌生」の約○桃の節句 三月三日、支那にて水邊に出で、盃を流れて浮べて宴を張りしに習ひ、我が國にても第二十三代顯宗天皇の時始められしが、その後、中絶し村上天皇の頃より又復活し、群臣に詩文を献ぜしめられ佳節とせられたり○さらなれ 「いふも更なり」の意○まゆにこもりたる芽出でて、まだひらがらぬをいふ、柳の糸の縁語なり○櫻の直衣 櫻は表白、うら濃き蘇芳色なり、（蘇芳は熱帯地方に産する落葉木の削片を水にて濃く煮、馨を加へて染めたる色、紅染に似て少し暗し）直衣は貴人の暑服、「たゞ人」を「なほ人」といふに同じく正服に對して「たゞの服」の意なり○出しうちぎ 「うちぎ」は内着の意にて衣の下に着る、横を縫はぬ衣なり、飾りの爲に袴の外に垂れて表衣の襦の下に出す故にいふ○御兄 皇后の御兄。

祭の頃は甚興いそじ。木々の木葉未だ茂うはなうて、若やかに青みたるに、霞も霧も隔ぬ空の景色の、何となく漫に可興いそじに、少し曇たる夕つ方、夜など忍しのびたる杜鵑の、遠う空耳かと覺るまで不明しきを、聞き付たらんは、何心地かはせん。祭近くなりて、青朽葉、二藍などの絹ぬいとも押し巻つ、細櫃こびつの蓋ふたに入れ、紙などに氣色ばかり包て、往き交ひ持て歩くこそ可興いそじけれ。末濃、叢濃、巻染など、平日よりも美う見ゆ。童女の頭ばかり洗ひ修飾つくひて、服は

藍などの絹の、くるく巻いたのを、細櫃の蓋に入れたり、紙などに一寸包んで、あちこち持ち歩くのがおもしろい。紫の裾濃や、ぼかし染や、巻染など、平日よりも美しい。童女が頭だけ洗って、きものは(忙しさに)くちやくちやに、なつて、(折目もつかず)綻びが切れたりして、だらしのないのが、足駄の鼻緒をすげさせたり、履の裏を刺させに持ち歩いたりして、早くその日になればよいと、元氣に走り歩くのもおもしろい。(常は)ふしぎなほど、ばたばたと身を踊らせて飛び歩く童女たちが、祭の衣装を身につけると、急に定坐といふ法師などのやうに、そりそりと、しなを作つて、ねり歩くのが可笑い。身分々々の母と

皆瘞え綻び、打ち亂れかゝりたるもあるが、履子、履などの緒着げさせ、裏を刺せなど持て騒で、疾その日にならんと急ぎ走り歩くも興し。騒う踊て歩く者等の装束き立つれば、甚く定坐といふ法師などの如に、練り徘徊こそ可笑けれ。分際に就て、親小母の女、姉などの、供して修飾ひ歩くも興し。

祭 この頃たゞ祭といへるは賀茂社の祭なり祭神は上の社には別雷神、下の社にはその御母と外祖父賀茂建角見命を祀りあり、四月中の酉の日(その月酉の日二つなれば下の酉の日)に行ふ社前に葵の蔓を飾り、神輿に供奉する人々の衣冠にもつけ、車の簾などにもかくるによりて葵祭といひ、又、男山八幡宮の祭に對して北の祭ともいふ〇體も隔てぬ 五月なれば春の霞は去り夏の露も、まだなきさま〇何となく、そゝろに「そゝろ」に「何となく」の意味あり重複〇何心地かはせん「かは」は反語なれば、これにては何心地もせぬ事となる、作者の不用意か寫し誤りか〇青朽葉 染色の名、落葉の朽ちたる如き色なるを以て名づく、藍にていへるは表青、裏黄〇二藍 これも染色の名、赤藍と青藍との間色〇縹びつ横長き宮なり〇けしきはかり「わざと」〇すそこ たゞ「濃き」「淡き」といへるは皆紫なり、すその方濃く染めあるをいふ〇むらじ むらは一かたまりなり、處々濃くなり居る、今いふ「ぼかし染」〇まき染 巻きおきて染むるなり、絞りの類〇打ちみだれかゝり だらしなくなりかゝりたる意なるべけれど「かゝり」の三字はなき方よろし〇けいし 足駄の類、和名抄にこれを「沓付足駄」とよみたり、漆にて塗り

か叔母とかいふ女や、姉などが、童女のあとについて形をつくるつて、やつたりして歩くのもおもしろい。

まるでちがふもの(は)、

法師の詞(俗人とは、まるでちがふ)。男(と)女の詞(も、まるでちがふ)。その外、下賤な者の詞には、きつと餘計な字が入つて居る。

可愛い子を法師にしたのは實に氣の毒だ。自たい非常に頼もしい事なのだけれども、(人には)たゞ、木の端かなんぞのやうに、人間の仲間とも思はれないのが非常に氣の毒だ。精進物のまづいのを食べ、夜寝るにしながら、若い男の身では、女がなつかしくない事もあるまい。(だから)女が居るからつて、忌はしい嫌ひなものでも居るやうに、

ことくなるもの 思はん子

殊別なるもの、

たるものらし、履子の音便なり〇定者 法會の行道(經文を唱へつ、佛の前に還り歩む)の時、香爐をとりて前行する僧なり〇おやまはの女 母や、なばなどの女にて、「母や、なば」といふ意、その外に「姉」なり。

法師の詞。男女の詞。下賤の詞には必ず文字余したり。

文字余り「實子の子」「蓮花の花」「葉つ葉」など、今もいふ。

思ん子を法師に爲たらんこそは、甚心苦しけれ。然は、甚頼しき業を、唯木の端などの如に思たらんこそ最惜けれ。精進物の不味を食ひ、寝るをも若きは女も懐しからん。女などの在る所をも、何か忌たるやうに、差覗すもあらん。其をも安からず言ふ。況て験者などの方は甚苦し氣なり。御嶽、熊野、到らぬ山なく歩く間に、恐き眼を見、験ある評出で來ぬれば、此處彼處に呼れ、得意に就て安氣もなし。甚く煩ふ人に關りて、靈氣調するも、甚苦しけ

覗いても見ないといふわけはない。それを(どうかして見でもしやうものなら)飛んでもない事のやうに評判される。まして、驗者などの方は、餘計に骨が折れる。御嶽とか、熊野とか、どんな奥山をも修行して歩く間には、恐い眼にも遭ひ、驗があると評判され、彼方此方に呼ばれて、流行るにつけて樂は出来ない。大病人に引かゝつて、怨靈を調伏するのに、餘り草臥れて居るでもするが最期、睡つてばかりと咎められるのも、どんなに窮屈だらうと察しられる。(けれども)それは昔の事で、當世の修驗者は、のんきで樂らしい。

大進生昌の家へ、宮様(中)がお出ましになるのに、東の表門は四足にして、そこから御輿が入る。北門から入る女房の車などは、禁裏のやうに陣屋がないから、車のまゝ入れると思つて、髪つきの見ともない人も、餘りこしらへ

もしず、車からすぐ、家の入口に下りられるものと、油断をして居たのに、横柳毛の車などは、門が小さい爲につかへて入らないので、例の筵道を敷て下る事になつてしまつた。腹が立つて堪らないけれども、據どころない。殿上人や地下まで、すらつと並んで陣の傍で見物して居るのが口惜しい。御前に出て、斯々な眼に遭ひましたと申上げると、宮、此處だつて、人が見ないものでもないのに、なぜ、そんなに油断をしたぞ」とお笑ひになる。清、けれども其れは皆な見つけて居りますから、立派に粧り立てましたらこそ、びつくりされませう。とにかく、是れ位の家には、車の入らない門といふものがあるものでは御座いませぬ。参つたら、笑

れば、困じて打眠ば、眠などのみしてと咎るも、甚所狭く、如何に思ふと、是は昔の事なり、今様は安氣なり。

たのもしき「一人出家すれば九族天に生るといふほどの功德ある事な」の意○驗者 法を修して病氣平癒、惡鬼退散等を祈るもの○御たけ 大和の金峯山なり金の御嶽を畧していふ○熊野 紀州牟婁郡にある熊野權現社なり御嶽と共に修驗者の苦行する處○いかに思はんと 思はんの上に「苦しく」の意こもり、下に「思ふ」の意含まれたり、「いかに苦しく思はんと思ふ」なり。

大進生昌が家に、宮(中宮)の出させ給に、東の門は四足になして、其より御輿は入せ給ふ。北の門より、女房の車ども、陣屋の居ねば入なんやと思つて髪容醜き人も甚くも修飾す、寄て下べきものと思ひ侮りたるに、板柳毛の車などは、門小ければ障りて得入ねば、例の筵道敷て下るに、甚憎く腹立しけれど、如何はせん。

殿上人地下なるも、陣に立添ひ見るも憾し。御前に参りて有つる様啓すれば、宮「此處にも人は見るまじくやは。何かは爲しも打解つる」と笑せ給ふ。清然ど其は皆眼慣て侍れば、美く爲立て侍んにしこそ驚く人も侍らめ。然ても斯許なる家に車入ぬ門やはあらん。見ば笑ん」など言ふ程にしも、生「是參せ給へ」とて御硯など差入る。清「いで甚拙くこそ在しけれ。何てか其の門狭く造て住み給けるぞ」と言ば、笑て、生「家の程、身の分際に合て侍るなり」と答ふ。清「然ど門の限を高く造ける人も聞るわ」と言ば生「噫恐し」と驚て、生「其は于定國が事にこそ侍るなれ。舊き進士などに侍すば、承り知べくも侍ざりけり。適此の道に罷り入にければ、斯だに辨へられ侍る」といふ。清「其の御道も偉からざめり。筵道敷たれば皆陥入て騒つるわ」と言ば、生「雨の降り侍ば、實に然も侍ん。よし、又仰せ掛べき事もぞ侍る。罷り立ち侍りなん」とて去ぬ。宮「何事ぞ。生昌が甚う怖つるは」と問せ給

つてやりませう」と言つて居る所へ、
丁度、生「これをおさし上げ下さい」と
言て、御硯などさし入れた。清「あな
たはまあ、一たいつまらない事をなさ
つたものね。何だつて門をあんなに狭
く造つてお置きになつたの」と言ふと、
笑つて、生「身分相當の家を作りまし
たので」と、返事をする。清「だつて、
門だけ高く作つた人もあつたではあり
ませんか」と言ふと、生「あゝ恐ろしい」
とびつくりして、生「それは于定國の事
で御座いませう。古い進士でもなけ
れば、承知いたしては居りませぬ。
私などは、たまく此の道に入りま
したから、是だけでも會得出來ますが」と
言ふ。清「その道も餘り偉くは居らし
やらないでせう。進道をお敷きなさつ

ふ。清「否す。車の入ざりつる事言ひ侍る」と申て下ぬ。同じ局に
住む若き人々などして、萬の事も知す眠たければ、皆寝ぬ。東
の對の西の廂兼である北の障子には、繋金もなかりけるを、其も
探す。家主なれば案内を熟知て開てけり。奇う嘔ばみたるもの
の聲にて、生「侍はんは如何」と數多度いふ聲に驚て見れば、几帳
の背に立たる燈臺の光も顯露なり。障子を五寸ばかり開て言なり
けり。甚う可笑し。更に斯様の好色しき事夢に爲ぬ者の、家に御
座たりとて、無下に心に任するなんめりと思も、甚可笑し。我が
傍なる女房を起して、清「彼見給へ。斯る見ぬ者あめるを」と言
ば、頭を擡て見遣て、甚う笑ふ。女「彼は誰ぞ、顯證に」と言ば、
生「否す。家主、局主人と判め申べき事の侍るなり」と言ば、
清「門の事をこそ申つれ。障子開け給へとやは言ふ」生「仍其の事
申し侍ん。其處に侍んは如何に如何に」と言ば、女房「甚醜しき
事、更に在せじ」と笑めれば、生「若き人在しけり」とて引閉て去

たから、皆なが落こちて大さわぎしま
したわ」と言へば、生「雨が降りまし
たから、なるほど、然う御座いましたら
う。まあ、又何か被仰られない中、
お暇致しませう」と往て了つた。宮何
を、生昌が、あんなに怖がつたのか
とお尋ねになる。清「いゝえ別に。車の
入らなかつた事を申しましただけで」
と申上げて、局へ下つた。
やたらに眠たいから、一しよに居る若
い人達と寝て了つた。東の對の、西か
ら北に取まはして、たてゝある障子に
は鈎もなかつたのを、調べもしず
寢込んだらば、家主だけに道をよく知
つて居て、そこをあけた。變にしやが
れた聲で、生「参つてもよろしう御座り
ますか」と幾度も言ふので、眼を覺し

る。後に笑ふ事甚じ。開ぬとならば唯先づ入ねかし。消息をする
に、好んなりとは誰かは言んと實に可笑きに、翌早旦御前に参りて
啓すれば、宮「然る事も聞きつるを、昨夜の事に愛て入にたりけ
るなんめり。哀、彼を可耻く言けんこそ最惜けれ」と笑せ給ふ。
姫宮(内親王)の御方の童女の装束せさすき由仰らるゝに、生「童女
の袖の上襲は、何色に仕う奉るべき」と申すを、又笑も道理な
り。生「姫宮の御前の具は、例の如にては憎氣に候ん。小い折敷
小い高杯にてこそ好く候め」と申すを、清「然てこそは、上履着
たる童女も食り好らめ」と言を、宮「仍、例の人の如に、斯な言ひ
笑そ。甚様直なるものを、最惜氣に」と制し給も可笑し。
中間なる時に、「大進、物聞んとあり」と人の告るを聞召て、宮「又
何條事言て、笑れんとならん」と仰らるゝも甚可笑し。宮「往て聽
け」と宣すれば、特と出たれば、生「一夜の事を中納言(惟)に語
り侍しかば、甚う感じ申れて、如何で然べからん折に對面して、

て見ると、几帳の後ろに立て、ある燈臺の光もあかるいのに、障子を五寸ばかりあけて、言つて居るのだから、可笑くて／＼。今まで、ついぞ、斯ういふ好色がましい噂のなかつた人が、自分の家にお出でになつたのを、よいしほに私達にふざけた事をするのだらうと思ふと、堪らなく可笑い。傍の人を起して、清「ちよいと御覽なさい。あんな變な者が」といふと、頭をもたげて見て、きやつ／＼と笑ふ。女房「誰なんぞでせう。こんなに明るいの」と言ふと、生「いゝ家主が、お局主に、一寸お咄が御座りまして」といふ。清「門の事を申しただけで、障子をおあけなさいとは申しませんよ」と言つてやる」と。生「いえ、やはり其の門の事で

申し承らんとなん申れつる」とて、又事もなし。一夜の事や言んと心動きしつれど、生「今徐に御局に侍はん」と辭して去れば、歸り参りたるに、宮「然て何事ぞ」と宣すれば、申つる事を然なんと眞似び啓して清「特と消息し呼び出べき事にもあらぬを、自然徐に局などに在んにも言かし」とて笑ば、宮「己が心地に偉しと思ふ人の譽たるを、嬉しと思ふとて告げ知するならん」と宣する御氣色も、甚可笑し。

大進 皇后宮職に、大夫一人(位下)亮一人(位下)大進二人(位下)以下あり
○生昌 贈從三位平珍材の二男、中納言維仲の弟、文章生より但馬守となり中宮大進となりたり○宮の、この書にたゞ「宮」とあるは、いつも中宮定子(後)皇后をいへり、藤原道隆の第一女、長保元年八月九日の事なり御年廿四歳○四足 扉のつきたる親柱の前後に、二本づ、添へ柱を立てたる門なり、大臣以上ならでは造られざる制規なれども、中宮の御成により特に設けたるなり。(はしがき參照)○北の門裏門○障屋の居ねば 内裏の如く武人の詰ためる障屋なければなり○入りなんや車のまゝにて「入り得んよ」なり○びらう毛のくるま 一名糸毛の車ともいふ、牛車の屏形の轡に蒲葵の葉を裂きて垂る、(びらうは熱地に産する樹にて、しゆるに似たり)清少等の乗りたる車○簾道 簾を敷きて往來の路とするもの、そのへり

御座ります。そこに参つてよろしう御座いますか、宜しう御座いますか」と言ふ。(着い女房が)女房「あらいやだ。いけませんよ、そんな事」と笑ふのをきいて、生「若いお人がお出でだつたのですか」と、障子を引き閉て往て了つた。あとで皆なが笑ふ事、笑ふ事。開た位なら、だまつて入れればよいのに往つてもよいかと聞かれて、よいと返事をするものがあらうかと可笑くて、翌る朝御前へ出て申上げると、宮「そんな事をする男とも聞かなかつたが、昨夜の門の事で感心して、入つて來たのだらう。可哀想に、あんな人の好い男を、そんなに嘲弄て」とお笑ひになる。姫宮(内親王)附きの童女の装束を、お命じになると、生「童の袖の上襲は、

に絹を付け、上に又錦、白布等を布く○いとにく、車より、すぐ家の入口に下るるものと思ひて髪なども、つくろはざりしを下りて歩むなれば案外にて腹立たしきなり○殿上人 五位以上○地下 五位以下○侍らんにし「し」は強めの助辭なれば、侍らんに「それ、それ」位の意なり○門やは 反語なり○いて 言ひ出しの詞にて「まあ」位の意、「あなたはまあ」なり○于定國 前漢の子公の子、定國、獄を治むるに公平なり、門の破れたるを、その國の父老治むる時、我れ不素、獄を斷ずるに徳を以てす、子孫必ず興るものありて馴馬(四頭立の車)高蓋(屋根高き車)の入る事あるべければとて、高大に作らせしをいふ○進士 以前は諸國より出で、式部省の試験に及第したる者をいひしが、後には大學の文章生をいひたり(大學寮は式部省の被官、學生を養成する處にして神泉苑の西にありたり)古き進士とあるは大學寮の古き卒業生の意なるべし○この道 學問の道をいふ、生昌は大學を出でたるなるべし○その御道も 翻弄せるさま見るやうなり「道」といひし詞をとりて「その道もおえらくはない、進道などおしきになつたから皆な落つちて大さわぎをした」といふなり○西のひさしかけてある北の障子 西の廂から北にかけての障子、(障子とは「障子」の義にて、襖、板戸、格子の類をすべていへり、こは襖なるべし)○かれはみたる「しわがれたる聲」にて憶したるさまなり○あらず 言ひ出しの詞にて今いふ「イヤナニ」○姫宮 一條天皇第一の皇女、脩子内親王、この時四歳、御母は中宮定子、この翌年母后の喪に遭ひ宮中に養はれ一品に累進、後、尼となり五十三歳薨御○あこめのおそひ あこめは間籠にて上衣の下に着る衣なり、綿入、袴、單衣あり、極暑の時用ぬす、その上に着るを汗衫といふ、色は紅、蘇芳、萌黄、薄色などあれど童女のは紅なり、地は綾にて裏は平絹、生昌は儒者上りにて衣の名も知らず、かざみといふ名あるに「袖の上襲ひ」などいひて清少たち

何色に致しませう」といふのを、皆なが又笑ふのも道理だ。生姫宮の御膳具は、普通では憎らしう御座いませう。小さい折敷、小さい高杯がよろしう御座りませう」と言ふのを清「それこそ上製着た童女も、頂き好からう」と言ふと、

に笑はるゝまなり〇ちうせい 生昌の田舎訛なり〇折敷 かりしきをつめてをしきといへり上古、木の葉などを折りしきて食物をのせしに基きたり、片木作りの角盆にて食物をのす、足のあるを、「足打をしき」といふ〇高つき 食物を盛る器、土器の下に椀物の輪を添へたり、後には全體を木にて作り漆を塗る、一本足の圓、又は角の臺なり〇きすぐ 生直なるべし愚直、横直などの意〇中間 俗に「つけもなき時」なり〇ひと夜 「あの晩の」なり〇中納言 平惟仲、生昌の兄なり、贈從三位平珍材の長男。

宮「他の人々のやうに、そんなに嘲弄しないがよい。正直者を可哀想に」とお制しになるのも可笑い。

何でもない時に、「大進がお咄があるさうです」と人が取次いだのを、お聞きになつて、宮「又笑はれやうと思つて」と被仰るのも可笑い。宮「往つて聞け」と被仰るから、出かけて會つたらば、生「先夜の門の事を、中納言(惟)に咄しましたら、非常に感服いたしましたして、その中よい折にお眼にかゝつて、お咄が致したいと申しました」とそれつきり。先夜の事でも何か言ふのかと氣味が悪かつたのに、生「又ゆつくり、おへやに参ります」と往つて了つたから、御前へ歸つたら宮「何であつた」と被仰るので、言た通りを斯様々々と申上げて、清「わざ／＼呼び出す程の事でも御座いませぬのに、其中、局にでも、閑で居る時に申せばよい事を」と笑つたら 宮「自分が偉いと思ふ人が褒めたので、喜ばさうと大いそぎで知らせたのだらう」と被仰る御様子も誠によい。

主上の御傍に居る御猫は、五位に叙せられて命婦さんと言て、非常に愛らし

帝に侍ふ御猫は、叙爵給りて命婦の御許とて甚可愛ければ冊せ給が、端に出たるを、乳母の馬命婦「噫正なや。入り給へ」と

いので、御寵愛なさるのが、端に出かけたのを、お傳の馬の命婦が「あらいけません、お入りなさい」と呼ぶのに、きかないで、日によく當つて居る所に居眠つてしまつたのを、威赫さうと思つて、馬「翁丸は何處に居るの、命婦さんを早くお食べ」と言ふと、眞に受けて馬鹿(翁)が馳け寄つて飛びついたので、おびえて夢中で御簾の中に入つた。上様は朝餉の間にお出でになる時で御覽に成て、大へんお驚きになり、猫は御懷中にお入れに成て、男たちをお召しになる。藏人忠隆が参つた。帝「あの翁丸を、ひどい眼に合せて、犬嶋にやつて了へ、今すぐ」と仰せられるので、多勢でつかまへやうとする。馬の命婦も叱られて、帝「傳を代へやう。不安心

呼に、背で日の射し當りたるに打眠りて居たるを、脅すとて、馬「翁丸何處。命婦の御許食へ」と言に、實かとして痴物走り蒐りたれば、怖え惑て、御簾の内に入ぬ。朝餉の間に帝は在す。御覽じて甚う驚せ給ふ。猫は御懷中に入させ給て、男們召ば、藏人忠隆参たるに、帝「此の翁丸打ち調じて犬島に遣せ、即刻」と仰らるれば、集りて狩り騒ぐ。馬命婦も譴責て 帝「乳母代てん、甚不安し」と仰らるれば、恐懼て御前にも出ず。犬は狩り出て瀧口などして追ひ遣しつ。人々「哀れ甚く威ぎ歩きつるものを、三月三日に頭辨(成)柳の鬘を爲させ、桃の花挿頭に挿せ、櫻、腰に挿せなどして歩せ給し折、斯る目見んとは思ひ懸けんや」と悠然がる。人々「御膳の時は必ず對坐侍ふに、淋々しくあれ」など言て三四日になりぬ。晝つ方犬の甚く泣く聲のすれば、何ぞの犬の斯く久く啼にかあらんと聴に、萬の犬ども走り騒ぎ訪ひに往く。御廁人なる者、走り來て、厠人「噫甚し、犬を藏人二人して撲ち給ふ。死べ

だから」と被仰るので、恐れ入つて御前にも出ず謹慎して居る。犬は、とうとう、つかまへて瀧口などに追ひ出させた。可哀想に大層得意然と歩いて居たのに。三月三日に頭辨が、柳の鬘を爲せ、桃の花を簪に挿させ、櫻を腰に挿させなどして歩かせなかつた時、こんな眼に遭はうとは、思ひもかけなかつたらうと皆なして、ふびんがる。女房(上様の)御膳の時は、きつと、御前にお對ひ申て居たのに、寂しい」など言ひ合て、三四日たつた。晝頃、犬が大へんに啼くから、何の犬が、あんなに長く啼くのだらうと聞いて居ると、たくさんの犬が、あちこちから馳け集まる。御廁人が走つて来て、厩大へんで御座います。犬を藏人お二人で

し。流させ給けるが歸り参りたるとて調じ給ふ」と言ふ。心憂の事や、翁丸なり。忠隆、實房なん撲つと言は、制しに遣る程に、辛じて啼き止めぬ。「死ければ、門の外に牽き捨つ」と言は、哀がりなどする。夕つ方甚し氣に腫れ、穢し氣なる犬の窮狀なるが、戦慄き歩は、女房「あはれ丸か。」女房斯る犬やは此の頃は見る」など云に、女房「翁丸」と呼ぶ耳にも聞き入す。其ぞと言ひ、否すと云ひ口々申は、宮「右近ぞ見知たる。呼べ」とて、局なるを、先づ頓の事とて召ば参たり。宮「是は翁丸か」と見せ給に、石「似て侍ども是は忌々し氣にこそ侍めれ、又翁丸と呼ば、悦んで参て来るものを、呼ぶ寄り来ず。否ぬなんめり。其は撲殺して棄て侍ぬとこそ申つれ。然る武士等の二人して撲んには生なんや」と申は、心憂がらせ給ふ。暗なりて物食せたれど食ねば、否ぬ者に言ひ做て止ぬる翌朝、御梳櫛に参り、御手水奉りて御鏡持せて御覽すれば侍ふに、犬の、柱の許に突い居たるを、清「あはれ昨日翁丸を甚う撲

お打ちになる。きつと死んでしまひます。お流しになつた犬が歸つて参つたとかで、ひどい眼に合はせてお出でよす」と言ふ。可哀想に、翁丸にちがひない。忠隆と實房が打つて居るといふから、とめにやる間に、やつと啼き止んだ。「死んだから門の外に棄てた」といふ事で、皆なで、ふびんがつて居る。夕方ひどく腫れて氣味の悪い犬が佗しさうに、ぶる／＼ふるえて、さまよふのを、「翁丸ではないか」と一人がいふ。「でも、こんな犬、ついで、見かけた事がない。」など言つて、「翁丸」と呼んで見ても感じない様子なので、「それだ」といふ人もあり「ちがふ」といふ人もあり、いろ／＼だ。宮様が、「右近が見知つて居るから、呼べ」と被

しかな。死けんこそ悲しけれ。何の身にか此度は生ぬらん。如何に窮しき心地しけん」と打言ふ程に、此の寝たる犬、戦ひ慄きて、涙を只落しに落す。甚駭し。然は、これ翁丸にこそありけれ。昨夜は隠れ忍てあるなりけりと哀にて、可憐き事限なし。御鏡をも打措て、清「然は翁丸」と言に、平伏て甚く啼く。御前にも打笑せ給ふ。人々参り集りて、右近内侍召て、斯など仰せらるれば、笑ひ騒るを、帝にも聞召て渡せ在して、帝「驚嘆う、犬なども、斯る心あるものなりけり」と笑せ給ふ。帝の女房達なども、聞に参り集りて、呼にも、今ぞ立ち動く。仍顔など腫たんめり。清「食物調ぜさせばや」と言は、宮「終に言ひ顯しつる」など笑せ給に、忠隆聞て、臺盤所の方より、忠「實にやあらん、彼見侍ん」と言たれば、清、噫忌々し、然る者なし」と言すれば、忠「然とも終に見付る折も侍ん、然のみも得隠せ給じ」といふなり。然て後、禮勘事宥されて舊の如に成にき。仍悠然がらせ給て。顔ひ啼き出たりし程

仰つて、局に下つて居たけれども、急場の事とお召しになると、参つた。宮「これは翁丸か」とお見せになる。右「似ては居りませんが、少し變で御座います。そして翁丸と呼ばば悦んで参りますのですが、知らん顔をして居ります。別の犬で御座いませう。あれは打ち殺して棄てたと申しました。あんな小さな者を、男が二人がかりで打つて、生きて居るわけは御座いません」と申すので、情なく思召て居らつしやる。暗くなつてから、食べ物をつたけれども、食べないので、違ふのだらうと極めてしまつた。翌る朝、御ぐしそろへに参り御手水をさし上げてから、御鏡を私に持たせて御覽になるので、お傍に居ると、柱の處に犬が居

こそ世に知す愛く哀なりしか。人々にも言れて啼などす。

猫は寝高麗の義のよし、韓國より渡りしものか、性溫柔にして鼠を捉ふる故、人家に畜ふ、禁中にも早くより畜はれしと見え、宇多帝の寛平御記に父帝より猫を譲られ給へる事見えたり、但し一條帝が殊に猫を愛されしよしは當時の人藤原實資の小右記に「長保元年九月十九日内裡御猫産子、女院左大臣有産養事一有衝重、梳飯、納宮之衣等、猫乳母馬命婦、時人、啖之、奇怪事」とあり○命婦五位叙爵の官女の稱、位なき者は主上に侍する事能はれば、猫をも叙爵されて命婦と呼ばれたるなり○馬ノ命婦 右馬ノ頭か、右馬ノ丞などの娘か妹にて命婦となり居る婦人なるべし、少納言清原元輔の女を清少納言と呼ぶに同じ○おもと 高貴の御許に侍る意にて、上の女房をいひしが轉じて何「さん」ほどの時に用う○朝餉の間 清涼殿の内にあり、天皇朝食を食す處「餉」は「乾飯」にて行くに携ふる食なれども轉じて食の事に用うるやうなりたり○犬島 備前にあれど、そこにはあらず、「鴨流しにせよ」の意にて「追放せよ」なり○瀧口 禁中御湯殿の瀧の下に勤番すればいふ、藏人所に屬して禁中を護る武士、武勇の士を擇んで候せしむ、六位の侍なり○頭辨 藏人頭にて辨官(太政官に屬す左右に分れて各大中少あり、左大辨右中辨等の如し、宮中の庶政を執り行ふ)を兼ねたる人、當時は藤原行成(書法の名手にて、その流を世尊寺様といふ)なり、この下に「が」の意味あり○かづら 髪鬘の約、古へは蔓草を髪に添毛、かもしとせしより起る、こは柳を猫の頭にかもじの如くつけたるなるべし○みかはや人 宮中の御厨を掃除する下賤の女なり○藏人 藏人所の官人、殿上の事をすべて奉行す○忠隆 經基王の孫、源滿政の子、この時藏人なり、實房も同じく藏人なるべし○右近 下文にある右近内侍

る、清昨日はまあ、翁丸をひどく打つて、とう／＼死なせて了ひまして。可哀想に、今度は何に生れ代つて参りませう。殺される時、さぞ悲しう御座いましたらう」と言つたら、その寝て居た犬が、ぶる／＼と身をふるはせて、ばら／＼と涙を落す。清「あ、きつとこれが翁丸で御座います、昨夜は隠れて居たので御座いますわ」と堪らなくあ

なるべし○御かゞみ 鏡は「赫見」の義、人の顔など映し見るに用う、古へは青銅と錫にて作り水銀をぬりて光りを出したり、裏に紐つき居て、人に持たせて見るなり蓋をつけて立たせおくもあり○あるなりけり「ありしなりけり」と正しくはあるべきなり、寫し誤れるか○右近内侍 右近衛府に勤仕する官人の親戚なる内侍なるべし、御子内親王、敦康親王御産の時、いつも御湯殿に仕まつりたり○かゝる心 勅を蒙りたればと遠慮する心なり、帝の此の御詞は、たゞ無心に軽く仰せられたるべし、中宮の御兄伊周が先年勅を蒙り流罪に處せられしが、半歳ならずして任意に歸京したるを、下に思はれてとの説は穿ち過ぎたるべし○臺盤所 臺盤を置く所、即ち御膳を調ふる所、○あはれなりしか「しか」は過去をいふ助辭○沈きなどす 清少といふ説あれど犬なり、「あの時はほんとに可哀想だつた」などいはれて有心に、あはれげに啼く犬のさまなり。

はれにいちらしい。御鏡も下に置いて 清「ぢやあ、やつぱり、お前は翁丸かえ」といふと這ひつくばつてやたらと啼く。宮様もお笑ひになる。皆なが寄つて來た。右近内侍をお召になつて、かう／＼だと被仰ると、皆なが大騒ぎをして笑ふ。上様もお聞きになつて此方へお渡りになり、帝「犬でも、これほど魂があるものか」とお笑ひになる。上の女房たちも、仔細を聞きに寄つて來て、「翁丸」と呼ぶと今度は立つて動く。まだ顔などは腫れて居るらしい。清「たべ物でもこしらへさせませう」と言へば、宮「とう／＼言ひ中てたね」とお笑ひになる。忠隆がきいて、臺盤所の方から、忠實殿で御座いますか。見せて下さいまし」といふので、清「縁忌の悪い、死んだものなんか居ない」と言はせると、忠「よろしう御座います、その中見かけませう。さうお隠し切れにはなるまい」と言ふ。犬は、やつと御勘氣が許りて、もとのやうになり、余計に御不便を加へられた。身をふるはせて、啼き出した時の堪らなくあはれだつた事など皆なに言はれ

と言つたら、成「覚えがよい」とお笑ひになつた。

草創せしを、元明帝の時不比等、大和の奈良に移して後、なほもとのまゝにいふなり○榊原 天狗の持つ羽扇の如きものが、木の枝の股になりし處に紙を張り、もしくは竹の枝をそのまゝつけたる扇なるべし○近衛づかさ 近衛府の役人なれば儀衛に出でたるなるべし○高き腰子をさへはき 定證がなり、展子は和名抄に「久都々計乃阿之太一云展子」とあり嬉遊笑覧には「くつ々の足駄なれば今の草履下駄なり」とあり又展子のつや、かなるが、革に土多くついたるを、はきて」などもあり、とにかく足駄なり○出ぬる後に 定證がなり。

山(の名で、おもしろいのは、

小倉山。三笠山。このくれ山。わすれ山。いりたち山。鹿背山。ひばり山。かたさり山。(ほんにこれは)誰に遠慮するのかと、をかしい。(又おもしろいのは)五幡山。後瀬山。笠取山。ひらの山。鳥籠の山。(これは)わが名もらすなと帝がおよみになつたのが、まことにおもしろい。(又おもしろいのは)伊吹山だ。朝倉山(は)よそに見るのがお

山は、

小倉山。三笠山。このくれ山。わすれずの山。いりたち山。鹿背山。ひばり山。かたさり山こそ誰に謙讓けるにかと興しけれ。五幡山。後瀬山。笠取山。比良の山。鳥籠山は我が名洩すなと帝の詠せ給けん甚興し。伊吹山。朝倉山。他に見るこそ興しき。石田山。大比禮山も興し、臨時祭の使など思ひ出らるべし。手向山。三輪山。甚興し、音羽山。待難山。玉坂山。耳無山。末松山。葛城山。美濃御山。柞山。位山。吉備中山。嵐山。更科山。姥捨

もしろい。岩田山。大比禮山も、おも

しろい。大比禮ときくと、何だか、臨時の祭の使などが思ひ出される。手向山。三輪の山もまことにおもしろい。音羽山。待かね山。玉坂山。耳無山。末の松山。葛城山。美濃の御山。柞山。位山。吉備の中山。嵐山。更級山。姥捨山。小鹽山。淺間山。かたさめ山。かへる山。妹背山。(どれもおもしろい)。

山は

山は 大方は名を面白く思ひ、もしくは古歌にて知りたるを挙げたり○小倉山 山城の嵐山に對せる山、拾遺集に藤原忠平「小倉山米のみち葉心あらば、今一度のみゆき待たなむ」小園の名も面白く思ひたるなるべし○三笠山 大和春日山の一部、藤原氏の祖先天ノ兒屋根命を祀りたる春日神社のある處なり、萬葉集に「春日なる三笠の山に月の舟出づ、みやびをの、む盃に影の見えつ、」などもあり、三笠の名もおもしろく思ひしなるべし○このくれ山 「木の間に」にて木のしげりてくらき意の古歌「木のくれしげみ」など多くあり、山の名と誤りしが○わすれずの山 陸前にあり六帖に、「みちのくの阿武隈川のあなたにや、人忘れずの山はさかしき(喜撰法師)○いりたち山 俗に突き込みて人の世話をやく事を「いりたち」といふ、山の名に負へるがおもしろきなるべし所在不明○かせ山 衣かせ山などよめるがおもしろきなるべし、古今集に「都出て、今日みかの原いつみ川、川風寒し衣かせ山」山城にあり○ひは山 備といふ鳥などあれば、おもしろきなるべし、比叡の誤りかといふ説あり、

一本又ひえともあれど、その頃いひて今聞えぬ山もあるべし○かたさり 「かたさり」所おく「すべて人に遠慮する事、恐れ多くて近よらず又坐をゆるする事なれば山の名にしてはおもしろきなるべし、所在不明○いつはた山 「何時將た」の意にとりておもしろきなるべし越前にあり、新古今集に伊勢「忘れなむ世にも越路のかへる山、いつはた人にあはむとすらむ」○後瀬山 またの逢ふ瀬の意のおもしろきなるべし、若狭にあり、萬葉集に「かにかくに人はいへども若狭路の、後瀬の山の後も逢はむ君」○笠とり山 山城にあり、古今集に「雨ふれど露も、らじを笠取の、山はいかでか紅葉そめけむ」笠とるは笠を着、又はさすの意なれば、おもしろきなるべし○比良の山 近江にあり、萬葉集に「さよなみの比良山風海ふけば、釣するあまの袖かへる見ゆ」○この山 近江にあり、古今集に「天上(地名)のと、この山なるいさや川、否と答へて我が名もらすな」あめの帝(聖武帝)の御製との言ひつたへあるによりて「帝の」云々といへるなるべし、萬葉には詠み人しらすにて下の句「いさとを聞かせ我が名告らすな」とあり○伊吹山 近江にあ

リ、日本武尊の登られし史蹟なり、息吹の名ももしろきなるべし○朝倉山 筑前にあり、天智天皇御製「朝倉や木の丸殿に我が居れば、名のりをしつ、ゆくは誰が子ぞ」誰が子ぞと、よそに見てよまれしがおもしろしとなるべし、昔は、貴人もしくは夫とする人には、女が名のる風習なりしなり○いはた山 山城醍醐いはたの小野のあたりか、六帖「いづくにぞありとは聞きしいはた山、君が心のなれるなりけり」○大ひれ山 石清水の臨時祭の大比禮樂を思ひ、その時の勅使なども思ひ出されて、おもしろしといへるなるべし、祭の時、東遊びの歌に「大ひれ小ひれの山、そはや、よりにてこそ、よりにてこそ山はよらなれや」云々とあり、(臨時祭は石清水(山城男山の八幡宮)の八月十五日の祭に對して三月、二の午の日の祭をいふ)○手向山 大和の奈良にあり、菅原道真の詠に「この度はぬさもとりあへず手向山、紅葉の錦神のまに／＼」○三輪の山 大和磯城郡。萬葉集に「三輪山をしかもかくすか雲だにも、心あならむ隠さうべしや」○番羽山 山城の山科。古今集に「山科の番羽の山の音にだに、人の知るべく我がこひめやも」○まぢかね山 六帖に「津の國の待ちかれ山のよぶこ鳥、なげと今來といふ人もなし」待ちかねるといふ名のおもしろきなるべし○たまさか山 攝津豊島郡。「元良親王(陽成天皇の皇子)通はれずなりける時、女「てしまなるなほ玉坂のたまさかに、思ひ出づればあはれといはなん」○耳なし山 大和國木原村にあり、山中に「樹多きにより、くちなし山ともいふ、古今集「耳なしの山のくちなし得てしがな、思ひの色の下染にせん」耳なしといふ名のおもしろきなるべし○末の松山 陸前。古今集「君をおきてあだし心なわがもたば、末の松山浪も越えなむ」○葛城山 大和河内の國境の山。古今集「しもとゆふかづらき山にふる雪の、間なく時なくおもほゆるかな」○みの御山 美濃の南宮山をいふ、「思ひ出づ美濃のお山のつ松、契りしことは今も忘れず」これも名のおもしろきなるべし○柞山 山城にあり、母の名に通へばおもしろきなるべし、貫之「は、そ山峯の紅葉の風をいたみ、ふる言の葉を書きぞ集むる」柞は漆の類なり○位山 飛騨。拾遺集「くらぬ山峯までつける杖なれば、今万代の坂のためなり」これも位といふ名のおもしろきなるべし○吉備中山 古今集「まがねふくきびの中山帯にせる、細谷川の音のさやけさ」これも名のおもしろきなるべし○嵐山 山城にあり、拾遺集「朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦着ぬ人ぞなき」嵐といふ名も面白く、景勝の地なればなるべし○更しな山 信濃にあり、拾遺集に「月影はあかす見るとも更科の、山の麓に長居すな君」○姥捨山 信濃にあり、古今集「わが心なぐさめかれつ更科や、姥捨山に照る月を見て」月の名所なる上、名の感傷なればなるべし○小しほ山 山城にあり、藤原氏の祖先を祀りたる大原野神社あるをゆかしみてなるべし、古今集「大原や小しほの山も今日こそは、神代の事も思ひ出づらめ」○淺間山 信濃にある噴火山。伊勢物語「しなのなる淺間の山に立つ煙り、なちこち人の見やはとがめぬ」かた、め山「敷」の草體「爲」に似た

るよりの誤りなるべし、六帖に「夏ごろも片敷山の時鳥、なく聲しげくなりまさるなり」○かへる山 越前、五幡山のあたりなり、(五幡山の處、參照)古今集「かへる山何ぞはありてあるかひは、來てもとまらぬ名にこそありけれ」○姪背山 大和上市村の東、吉野川の岸にむかへる山、古今集に「ながれては妹背の山の中におつる、吉野の川のよしや世の中」夫婦を妹背といへば、その名のつきたるがおもしろしとなるべし。

峯は、

峯は、
ゆづるはの峯。阿彌陀の峯。彌高の峯。
(などおもしろし)。

ゆづるはの峯 攝津武庫山の山にゆづり葉ノ嶽あり、山中にゆづり葉の樹多く、年の暮に葉をとりて市に出し、元旦の飾りに賣るといふ、嶽を峯と、ふといひしなるべし○あみだの峰 山城東山の一峯。あみだといふ名の長きなるべし、公任「今よりはあみだの峰の月かげを、千代の後まで頼むべきかな」○彌高の峰 彌高といふ名のおもしろきなるべし、近江にあり、拾遺集に「近江なる彌高山の嶽にて、君が千代をば祈りかさむ」。

原は、

竹原。みかの原。朝の原。高原。萩原。
あは津の原。奈志原。うなみこが原。
安倍の原。篠原(などおもしろし)。

原は、
竹原。斐原。朝原。その原。萩原。粟津原。奈志原。垂髻原。
安倍原。篠原。
たか原 大和にあり、名所圖會に「たか原の水やあまるらん、龍田の山の五月雨の頃」○みかの原 山城。元明帝以來の離宮あり、萬葉集「みかの原ふたき

峯は 原は

市は

の野邊を清みこそ、大宮どころ定めけらしも「變の名おもしろきなるべし、景勝の地にもあり○あしたの原 大和。古今集「霧立ちて雁ぞなくなる片岡の、あしたの原は紅葉しぬらし」○その原 信濃。新古今集「その原やふせ屋に生ふる筈木の、ありとは見えてあはぬ君かな」遠く見る時は筈の如く近づけば見えすといふがおもしろきなるべし○萩原 紀伊にあり、大和のは眞野、萩原なり、いづれにても萩といふ名をおもしろく思ひたるなるべし○粟津原 近江にあり、後撰に「關越えて粟津のもりのあはすと、清水に見えし影を忘るな」逢はすの名をおもしろく思ひしなるべし○なし原 大和。夫木集に「時鳥開ゆる事もなし原の、うまやくと待ち明しつる」後、誤りて内侍原といふといふ○うなぬこが原 六帖に、山上憶良、「名にしおへば何れもかなし朝な朝な、撫で、生ふし、うなぬこが原」髻髪兒といふ名の可憐なるなるべし、所在不明○安倍の原 攝津天王寺より住吉に到る道、後に北島顯家の戦死せし安倍野なり○篠原 近江にあり、小竹原の名を優に思ふなるべし、「野路の篠原」など普通名詞にもいへり。

市は、

辰の市(がおもしろい)。椿市は、大和に市が澤山ある中に、長谷寺に参詣の人が、きつとそこに宿るから、観音の御縁があるのかと、格別おもしろく思はれる。おふさの市。飾摩の市。飛鳥の市(もおもしろい)。

三〇

市は、

辰市 椿市は大和に數多ある中に、長谷寺に詣る人の、必ず其處に宿りければ、観音の御縁あるにやと特殊なるなり。おふさの市。飾摩市。飛鳥市。

辰の市 大和奈良。拾遺集「無き名のみたつの市とは騒げども、否また人をうるよしもなし」○つば市 大和にあり、初瀬寺に詣る人、こゝにて御明、燈心、土器など調へ往く、萬葉集「つば市の八十のちまたに立ちならし、結びし紐をとかまくなしも」○おふさの市 三河にあふさのうまやの名見えたればそのあたりにありしか「往き來るさ」などの意に面白く思ひしなるべし(假字は、たがへども)○飛鳥市 大和。飛鳥の宮居ありし處なれば、昔傳はれておもしろしとなるべし、以上

淵は、

かしこ淵といふのは、どんな深い心を人に見られて、さういふ名がついたかと、ほんとうにおもしろい。勿入その淵、決して入るなゝんて誰にどんな人が教へ戒めたのだらう。青色の淵が又おもしろい、藏人などの衣裳にしさうで。いな淵。かくれの淵。のぞきの淵。玉淵。(みんなおもしろい)。

海は、

(近江の)水うみ。與さの海。かはぐちの海。伊勢の海。(がおもしろい)。

淵は 海は

淵は、

の中、つば市の外は、この頃すでに廢市となりたりしを、歌枕を見て名のおもしろきを擧げたものと見ゆ。

かしこ淵。如何なる底の心を見て、然る名を付けんと甚興し。勿入淵。誰に如何なる人の教しならん。青色淵。観淵。玉淵。

かしこ淵 所不明、「賢」の名をおもしろしとなるべし○見えて 人に見られてなり○ なりその淵 河内にあり、「勿入りそ」にて、入るなかれの意がおもしろしとなり○青色の淵 これも所は不明○藏人などの具 具は用お料なり、藏人は淺緑の衣なれど、天皇の御近侍なれば、麴塵(たて黄、よこ黄にて織りたる浮線綾(浮織の綾)の御袍を拜領して着する故にいふ、麴塵を青色の御袍といふによるなり)○いな淵 否といふ名をおもしろしとなるべし、大和にあり、かくれの淵、のぞきの淵、玉淵いづれも所を採むるによしなし、隠れ、のぞき、の意味と玉の美しさを思ひしなるなるべし。

海は、

湖。與謝海。川口海。伊勢海。

水うみ 平安京の人の、たゞ、みづ海といひしは琵琶湖なり○與さの海 天橋立のある絶景の地なり、赤染衛門の歌「おもふ事なくてぞ見ましよさの海の、天橋立都

三一

渡は みさゞきは

渡は、

しかすがの渡。みつはしの渡。こりす
まの渡(といふ名がおもしろい)。

みさゞきは、

うぐひすの陵。柏原の陵。あめの陵。
(の名がおもしろい)。

なりせば」○かはぐちの海 安治川、木津川の如く諸國の廻船集ひて、出帆あり着
船ある河海の喉口をいへるか○伊勢のうみ 伊勢灣なり、備馬樂に「伊勢の海の清
き渚の沙がひに、なのりそ(藻)や摘まむ、貝や拾はむ、玉や拾はむ」。

渡は、

しかすがの渡。みつはしの渡。こりすまの渡。

わたり「わたし」なり、此方の岸より彼方の岸へ、舟もてわたす處○しかすがのわ
たり 三河國飽海川のわたりなり、「しかすが」は「さすが」なり、その名のおも
しろしとなるべし、赤染衛門「をしもともなきものゆゑに、しかすがの、わたりを
きけば、たゞならぬかな」○みづはしの渡 越中常願寺川の右岸に水橋といふ處あ
り、その渡なるべし、春曙抄にひける古歌「いたづらに人だのめなる水橋や、船
より外にゆく方もなし」○こりすまの渡 攝津の須磨より淡路へ通ふ渡、古今集「こ
りすまに又もなき名は立ちぬべし、人にくからぬ世にすまへば」の歌の如く「懸
りすま」といふ名のおもしろきなるべし。

山陵は、

鶯の陵。柏原陵。あめの陵。

みさゞき 御狹々城の義にて山より小さく築ける意か、帝王后妃の御墓所の稱。
高く築きて陵をなす○うぐひすの陵 大和奈良若草山の頂きにあり、そのあたりに
鶯淵といふもありしと見ゆ、夫木集に西行「三笠山春を音にて知らせけり、氷を叩

く鶯の淵」徳川時代の人、自然石に「清少納言が枕草紙に書きたる鶯陵は、これなり」
と刻みたるもの今も山上に建ちてあり○かしはゞらの陵 山城紀伊郡なる桓武帝の
陵なり○あめの陵 聖武帝を「あめの帝」といへば、その陵なるべし、さらば大和
の佐保山にあり。

家は、

近衛御門。二條。一條も好し。染殿宮。清和院。菅原院。冷泉
院。朱雀院。洞院。小野宮。紅梅。縣井戸。東三條。小六條。小
一條。

近衛の御門 大内裏外郭十二門の一なる陽明門をいふ、門内に左近衛府あるにより
ていふ、(嵯峨帝敕筆の額あり)式日には攝政以下諸臣の車立の儀ありて、綱代車な

どは、こゝよりは入れず、(家にはあられど建築物なれば同じ處にいひしなるべし)○二條 二條の北、堀川の東にある二條院なり、村
上帝の母后藤子の御領○一條 一條の南、大宮の東二町にある一條院なり、藤原伊尹の家○染殿の宮 忠仁公良房の家、後に文徳
帝の後藤原明子(染殿后)の御所となれり、正親町の北、京橋の西○せかみ 清和帝の母后(染殿后)の御所なり正親町の南、京橋の
西○菅原ノ院 菅原道真の家、勘解由小路の南、烏丸の西、勸喜光寺といふ○冷泉院 嵯峨帝以來、累代の後院(天皇讓位後の御座
所)たり大炊御門の南、堀川の西○朱雀院 これも累代の後院なり、三條の北、朱雀の西○洞院 仙洞御所をいふ、左京西ノ洞院な
る宇多法皇の御所亭子院を指せるか○小野宮 比叡山の東麓小野に遁世されし惟喬親王(文徳帝の長子)の家○紅梅 紅梅殿の略、
道真の家とも、子息の家ともいふ、道真の配流せらる、時「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花。あるじなしとて春な忘れそ」と詠みし
處なり、五條坊門の北○あがたの井戸 井戸殿といふ、後撰集に橋公平女、この家に住みて詠みけるとて、「都人來ても居らなむ蛙

家は

なく、あがたの井戸の山吹の花」一條ノ北、東洞院ノ西ノ角〇東三條 東三條院なり、忠仁公藤原良房の家、二條南町ノ西〇小六條
小六條院なり、楊桃ノ北、烏丸ノ西〇小一條 小一條院なり、左大臣藤原師尹の家、近衛ノ南、洞院ノ西。

清涼殿の良の隅の北を仕切つた御障子には、荒海の繪の上に氣味の悪い生き者の手長や足長が書かれてある。上の御局の戸をあけると、すぐに見えるのを、厭がつては笑つて居ると、勾欄の處に、青い瓶の大きなのを据えて、櫻の大層美しい枝の五尺位なのを一杯さしたから、勾欄の處まで咲き溢れて居るのに、晝頃、大納言殿(周伊)が、櫻の直衣の余り硬ばらないのに、濃い(紫)指貫に、白い御めしを澤山の上に、濃い(紫)綾の大層あさやかなのを襲ねて、お出でになつた。上様が、こちらにお出ましの時なので戸口の前の細い

清涼殿の良の隅の北の隔なる御障子には、荒海の繪、生たる者們的、恐し氣なる手長足長をぞ書れたる、上御局の戸押し開たれば、常に目に見るを、憎みなどして笑ふ程に、勾欄の許に、青き瓶の大なる据て櫻の甚く面白き枝の五尺許なるを甚多く挿たれば、勾欄の許まで溢れ咲たるに、晝つ方大納言殿(周伊)櫻の直衣の少し柔軟なるに、濃き紫の指貫、白き御衣ども、上に濃き綾の甚鮮麗なるを出して参り給り。帝(一條)の此方に在せば、戸口の前なる細き板敷に居給て、物など奏し給ふ。御簾の中に、女房櫻の唐衣ども寛かに脱ぎ垂つ、藤、山吹など色々好しく、數多小半菰の御簾より押し出たるほど、晝御座の方に御膳奉る足音高し。氣息など、をし／＼といふ聲聞ゆ。快晴と長閑なる日の氣色甚美しきに、終の御盤持る藏人参りて御膳奏すれば、中の戸より

板敷にお座りになつて、何かお申上げになる。御簾の中には、女房が、櫻色の唐衣などを、ゆつたりと肩すべりに着て、藤だの、山吹だの、いろ／＼の好ましい色彩で、多勢小半菰の御簾から押し出して居る時分に、晝御座の方に、御膳をさし上げる足音が高く聞える。衣の音や、足音などが聞えて、をし／＼と人ばらひの聲がする。うらうらと長閑な日の氣色がまことに美しい。一番しまひの御盤を持った藏人が参つてから、御膳をおしらせ申上げたので、(上様は)中の戸から、あちらへお渡りになる。大納言(周伊)がお供申上げて、すぐ花の處にお歸りになつた。宮様(中宮)が、御几帳をどけて、長押し(定子)の處にお立出でになつた御様子は、た

渡せ給ふ、御供に大納言(周伊)参せ給て、ありつる花の許に歸り給り。宮(中)の御前の、御几帳押し遣て長押の許に出させ給るなど、唯何事もなく萬に愛たきを、侍ふ人も思ふ事なご心地するに、伊「月も日も更りゆけども久に經る、三室の山の」といふ故事を緩かに打ち詠み出して居給る、甚興しと覺る。實にぞ千歳も有まほしげなる御有様なりや。
陪膳仕う奉る人の、男どもなど召す程もなく渡せ給ぬ。御硯の墨摺れと仰らるゝに、目は空にのみにて唯在すをのみ見奉れば、程遠き目も放ちつべし。白き色紙押し疊て帝「是に只今憶ん故事、ひづつ、書け」と仰せらるゝ。外に居給るに、清「是は如何に」と申ば、大納言「疾く書て参せ給へ。男は言加へ侍ふべきにもあらず」とて御硯取下して、伊「疾く／＼只思ひ廻さで、難波津も何も、偶と覺ん事を」と責させ給に、何故然は臆せしにか、惣て面さへ赤みてぞ思ひ亂るや。春の歌、花の心など然言ふ言ふも上臈二つ三



だもう何處から何處までお立派で、自分達までが屈托がなくなるのに、(大納言様が)「月も日もかはりゆけどもひさにふる、三室の山の」といふ古い歌を、ゆつくりと朗詠なさるのを、ほんとうに、おもしろく承はる。(宮様は)全く千年もあゝしてお置き申上げたい(お美しい)御様子だ。陪膳の女官が、藏人達を呼び上げると、間もなく、(又上様が此方に)お出でになつた。御視の墨を摺れと仰せつかる。眼はまるでお二方(兩階)の方ばかり見て居るので、手元はおるすになる。白い色紙を押したくんで、帝「これに、今思ひ出す故事を一つづゝ書け」と仰せられる。外に居られる大納言様に、清「どういたしませう」といふと、伊「疾く書いてお

つ書て、「是に」とあるに、
「年経れば齡は老ぬ然はあれど、花をし見れば憂悶もなし」といふ事を、「君をし見れば」と書き做たるを御覽じて、帝「唯此の意匠どもの欲見かりつるぞ」と仰らるゝ序に、帝「圓融院の御時、御前にて草紙に『歌一つ書け』と殿上人に仰られけるを、甚う書き難く、角力ひ申す人々ありける。更に手の拙き巧き、歌の折に合ざらんをも知じと仰られければ、困惑て皆書ける中に、只今の關白殿(道)の三位中将と聞ける時、
潮の満つ出雲の浦の何時もく、君をば深く思ふはや我が。といふ歌の末を『頼むはや我が』と書き給りけるをなん、甚く賞させ給ける」と仰らるゝも漫に汗あゆる心地ぞしける。若からん人は、然も得書まじき事のさまにやとぞ覺る。例其巧く書く人も何なく皆憚れて書き汚しなどしたるもあり。古今の冊紙を御前に置せ給て、歌どもの本を仰られて、帝「是が末は如何に」と仰らる

さし出しなさい。男が口を入れるべきではない」と御視を下げて、伊「早く早く、何でもよいから考へてなど居ないで、難波津でも何でも、ひよいと思ひ出す事」と催促なさると、不思議なほど皆な臆して、顔を赤めて當惑して居る。春の歌だの、花の事だの、それでも上臈は二つ三つ書いて、「こゝへ」と言はれたから、「年経れば齡は老いぬ、しかはあれど花をし見れば物思ひもなし」の「花をし」を「君をし」と直したのを出したらば、帝「この思ひつきが見たかつたのだ」と被仰るついでに、帝「圓融院の御代に、御前で、草紙に歌を一つ書けと、殿上人に敕詔があつた時、大へんに難かしく考へて、御辭退申す人たちがあつたので、圓「手蹟が拙からうと

るに、常住夜責心に懸りて覺るもあり。實に熟く憶す申し出られぬ事は、如何なる事ぞ。宰相の君ぞ、十ばかり。其も憶るかは。況て五つ六つなどは唯憶ぬ由をぞ啓すべけれど、女房然やは氣憎く、偷言をもてなすべき」と言ひ、口惜がるも興し。知ると申す人なきをば、即て詠み續けさせ給を、女房然て、是は皆知たる事ぞかし。何故斯く拙くはあるぞ」と言ひ嘆く中にも、宮「古今數多書き寫しなどする人は、皆憶ぬべき事ぞかし。村上の御時、宣耀殿女御(子)と聞けるは、小一條左大臣殿(師)の御女に在しければ、誰かは知り聞ざらん。未だ姫君に在しける時、父大臣(師)の教へ聞させ給けるは、師「第一には御手を習ひ給へ。次には琴の御琴を如何で人に弾き勝らんと思せ。然て古今の歌二十卷を、皆暗誦させ給んを、御學問には爲させ給へ」となん聞させ給けると聞召し置せ給て、御物忌なりける日、古今を隠て持て渡せ給て、例ならず御几帳を引き塞させ給ければ、女御奇しと思しけるに、御

歌が時節外れだらうと構はないから」と仰せになつたので、仕方なしに、皆な書いた中に、今の關白殿(隆)が三位中將で、古歌の「しほの満つ、いづもの浦のいづもく、君をば深く思ふはや我が「いづもの浦にいづもく」汐が一ばい満ちるやうに、私はいづもく、あなたを思ひます」の「思ふはや我が」を「頼むはや我が」と書いたのを、非常に御感(おぼ)になつた」とお咄しになるのも、何だか氣まわりが悪くて、汗が出るやうだ。ふだんは手のよい人まで、何となく應じて、書き損じたものもある。古今の草紙を御前(ごまへ)にお置きに成て、歌の上の句などを被仰つては、帝、下の句は何と」とお尋ねになつたりすると、夜靈氣に成つて、よく覺えるのもある

草紙を披(ひら)き給て、村上某の年、某の月、何の折、其の人の詠たる歌は如何に」と問ひ聞え給に、斯なりと心得させ給も興しきもの、僻記憶(ひがおぼ)し、忘たるなどもあらば、甚じかるべき事と理なく思し亂ぬべし。其の方不審(かたがは)からぬ人二三(にん)人ばかり召し出で、碁石して數を置せ給んとて、聞させ給けん程、如何に愛たく興しかりけん。御前に侍けん人さへこそ羨しけれ、促て申せ給ければ、賢う即て末までなどにはあらねど、惣て露違ふ事なかりけり。如何で猶少し不審して僻事見付てを止んと、憾きまで思しける。十卷にもなりぬ。更に不用なりけりとて、御草紙に夾算して、御殿籠りぬるも甚愛しかし。甚久うありて起させ給るに、村上「仍此の事左右なくて止ん、甚憾かるべし」とて、下の十卷を明日にもならば異書をもぞ見給ひ合するとて、今宵定んと、大殿油近く奉りて、夜更るまでなん讀せ給ける。然ど終に負け聞させ給す成にけり。帝(上村)渡せ給て後、斯る事なんと、女房、殿(尹師)

が、覺えないで言へないのもあるのは、何たる事だらう。宰相さんは十首ばかり。覺えたとは、威張れない數だ。まして五首や六首では、いつそ覺えませんと申上げるべきだけれども、そんなに、ひねくれて、折角の仰せを無にするやうでも、と言ひながら、なぜかう覺えられないだらうと)くやしがるも可笑い。誰も御返事の出來ないのは、下の句もおよみつゞけになると、(皆なが)「分り切つた歌を、どうして思ひ出せなかつたらう」など、歎息して居る。(宮様が)古今集を幾度も書寫などした人は、すつかり覺えさうなわけだ。村上の御時代に、宣耀殿の女御(芳)と申したのは、小一條左大臣殿(尹師)の御女だつたから、誰も承知だらう。

に申し奉りければ、甚う思し騒で、御誦經など數多爲させ給て、其方に向てなん念じ暮させ給けるも、好事しく哀なる事なり」など語り出させ給ふ。帝も聞し召て感賞させ給ひ、帝如何で然多く詠せ給けん。我は三卷四卷だにも得讀み果じ」と仰らる。女房昔は卑賤者も皆好き風情うこそありけれ。此の頃斯様なる事は聞る」など御前に侍ふ女房、上の女房の此方許されたるなど参りて、口々言ひ出などしたる程は、實に思ふ事なくこそ覺れ。生先なく、一向に、僥倖など見て居たらん女は、いぶせく侮しく思ひやられて、仍然ぬべからん人の女などは、差交せ、世間の有様も見せ慣さま欲う、内侍などにも暫時有せばやとこそ覺れ。宮仕する人をば、輕浮しう醜き事に思ひ居たる男こそ、甚憎けれ。實に其も亦然る事ぞかし。掛まくも畏き御前を初め奉り、上達部、殿上人、四位、五位、六位、女房は更にも言はず、見ぬ人は少くこそはあらめ。女房の従者ども、其の里より來る者ども、

まだ姫君でお出での時分、父大臣がお教へなされたのに、第一はお手習を遊ばせ。その次は琴の御琴を、どうかして人よりは上手にとませ。それから、古今の歌二十巻を、すつかり御暗誦なさるのを、御學問に遊ばせと申上げなかつたといふ事を帝がおきき置きに成て、御物忌の日に、古今を隠してお持ちになつて、いつもとちがひ(女御の)御几帳をおしめになるので、女御が不思議に思召すと、御草紙をおひろげに成て、村「何の年のいく月、どういふ時に、何といふ人の詠んだ歌は何と」とお尋ねになると、御合點がいつて、おもしろくはお思ひになりながら、思ひちがへたり、ひよつと忘れたのなどあつたらと御心配だつたらう。帝はその

方にくはしい女房を、二三人ほどお召しになり、碁石で數をとれとお命じになつたのは、まあどんなにおもしろい事だつたらうと、傍に居た女房さへ美しい。追かけお尋ねになるのを、えらがつて下の句まで、すつかりとではなけれど、一つも間ちがへずお答が出来た。どうかして少し思ひ出し憎く、きいて、間ちがはしてみたいと、帝は小憎らしい位にお思ひに成た。(廿巻の中とら)十巻まですんだ。村「もうやめやう」と、草紙に夾算をして、お寝みになつたのもおもしろい。大分御ゆつくりの後、お起きになつて、帝「やつぱり全部きかう」と、下の十巻を村「明日にすると、別の本でも御覽になるといけない。今夜試してしまはう」と、お

長女、御廁人、たびしかはらといふまで、何時かは其を耻ぢ隠たりし。殿們などは、甚然しもあらずやあらん。其もある限は然ぞあらん。上など言て冊き据たるに奥床からず覺ん道理なれど、典侍など言て折々内裏へ参り、祭の使などに出たるも面目しからずやはある。然て籠り居たる人は甚好し、受領の五節など出す折、然とも甚う鄙び、見知ぬ他人に問ひ聞きなどはせじと、奥床きものなり。

清涼殿 天皇の常の御殿(小六條、小一條といひ來りて清涼殿をいひ、そこにて見し物、そこにてありし事を叙せるなり)○うしとら 十二支(えと)を方角の稱とし、北を子、東を卯その間を三分して其の界を丑寅とす(これに準じて辰巳を歴て南を午とし、未申を歴て酉を酉とし戌亥にて終る)○障子 障子の義にてすべて間にたつる戸をいふ、襖をも衝立をも。今は紙を張りたる明り障子のみいへり○荒うみのかた 布障子に手足長をかきたるなり○上の御局 これに二つあり、一は藤壺上、御局(夜の御殿の北、女御更衣室上の所)、一は弘徽殿上、御局(天皇出御あり女御更衣室上の處)いづれも清涼殿の一間にて廣き二間に一間、萩ノ戸を隔て、東西に相對す、(東、弘徽殿上御局、西、藤壺上御局)こゝは弘徽殿上御局をいふ○こう欄 「勾」は「マガル」なり欄干の折れ曲れるもの○大納言 藤原伊

周なり關白道隆の長子、中宮定子の兄○櫻の直衣 表白、裏濃き蘇芳色(紅染に似て少し暗し)の直衣(貴人の着する略服)○こなた 弘徽殿上、御局に中宮上り居給へるに陛下の渡らせ給へるなり○戸口 北側の戸口の前は狭き板敷なり○唐衣 女房の禮服にて上着の上に着る。唐制を模したるものなれば、いふ。丈甚だ短く、袖は半巾、後はことに短し。赤色、青色及び織物は禁色にて、許されれば用ゐられず(禁色に三種あり、一は位階によりて定められたる色以外を服するを禁ぜらる、事、二は特種の色を限りて着用を禁ぜらる、事、三は有文(模様ある)の織物を着するを禁ぜらる、事)○藤 表濃紫、裏青○山吹 表薄朽葉、裏黄。藤と共に春の服色なり○小はじとみ 半菫の小さきをいふ(「しとみ」は風雨及び日除の戸、細き木を縦横に組み、その裏に板を張りたるもの。一間を上下二枚に分ち、下部は取り外しにし、上部は蝶番ひにて釣り上げ、下して下までなく半ばなるを「半菫」といひ、更に小なるを、小半菫といふ)○押し出でたるほど 簾の下より女房たちの袖口の押し出されたる頃、即ち皆坐に即きたる頃なり(簾の下より衣の袖を出して座するは形容的儀式なり)○ひのおまし 清涼殿の母屋にある主上の御座所、東西二間、南北五間、北より玉座の帳臺あり、晝は大床子の御座にて陪膳には三位以上の上達部、公卿、四五位の殿上人も奉仕し、典侍采女など髪上して奉仕す、(朝餉の時はお房陪膳)○足音 供膳の藏人のなり○けはひなど この下に「著し」の意あり○おしおし「お」と高く聲を上げて「し」といふをつめて「おし」といふ。神前にてもいふ。尊き御前なる事をしらしむるなり「し」とは「叱々」の意にて「警蹕」といふ、警めて人の歩を蹕る意なるべし○藏人参りて この下に「後」の意あり、御盤を据ゑたる藏人が御膳と奏するにはあらず○中の戸 清涼殿の北廂にあり○なげし鴨居の上、又敷居の下に別に横に木を長く置くをいふ、こゝは下の長押なり○たゞ

あかりを近く持つて来させて、深更までお詠ませになつた。けれども、とうとう女御は及第なされた。(最初に帝が、女御の處へ)お渡りになつた時、斯様斯様と、女房達から御父君に申し上げたので、大層御心配なされ、御誦經など方へお頼みになり、御所の方を向いて、(無事にお済みになるやうと)一日拜み暮しなされたのも、風流で哀れな事ね! など、お物語りになる。上様(帝)もお聞きになつて、帝「どうして、そんなに澤山言へなされたらう。私などは、三巻か四巻でも、とても覚え切れない」と被仰る。昔はつまらない者までが、皆な風流にしやれて居た。此の頃はもうとてもそんな事はない」となどと宮様の御前の女房や、上様づきの女

何事もなく 解しにくき不用意の詞なり、「何の欠點もなく」の意が、「何となく」の意が、あらずもがな詞なり、例の寫し誤りか○月も日も云々 萬葉集「月日はかはりゆけども久に経る、三もろの山のとつ宮とこる」三もろは大和高市郡の神岳、とつ宮は外つ宮にて難宮の事○千歳もあらまほしげなる「あらまほしき」にてよろし「あらまほしげ」にては「千年もありたさうな」にて、宮の御心持となる○陪隨 供御を奉る時に伺候する官人○そのことも召す 御膳部を下ぐる爲に行事の藏人を呼ぶなり○ほど遠き眼 主上をのみ拜し居る故、遠き方(手もとならぬ)のみ見居るとなり、こゝも上文に「目はそらにのみにて」とあれば、この句なくしてよろし、すべて初めの「春は曙」の章の如くありたらば貴かるべきを、冗漫の筆づかひある爲、解し難くなり、この「程遠き眼」を「千万年の未來にまで眼をつけらるゝ」など解せる説もあるやうなり○外に 簀子(もと竹を編みたるをいひしなれども板縁となりてもかくいひし如し)になり○たゞ思ひめぐらして「そんなに考へないで」なり、「たゞ」は「難波津」の上につく句のこゝろなり、「思ひめぐらさで、ただ難波津も何も」の意(何も)は「何にても」なり)○難波津 仁徳帝の時、王仁といふ歸化人の博士が詠みて奉れる歌といふ、「難波津に咲くや此の花冬籠り、今春邊と咲くやこの花」この歌を手習の初めに習ふ事、此の頃のならばしなりし故、こゝにては、俗に「何でもよいから」の意○上らふ 「萬(ば)もと何家の語、十二月を臘月といふ臘と同じ義にて、僧徒の位次に、功を積みたる年を數ふる語、移して男女の官人にも用う、こゝは清少より身分高き女房をいふ○年ふれば 古今集に「榮殿后(文徳帝の皇后明子)の御前に、花瓶に櫻の花をさゝせ給へるを見てよめる、前のおほいまうち君(藤原良房)」とありて、この歌あり、四句「花をし見れば」なるを清少の頼才にて「君をし見れば」と「花」の一字を「君」にかへて奉りしなり

房で、此方へ来るのを許された人たちが、口々に咄し合つて居る様子などが、ほんに屈託がなさうだ。何の願ひ望みもなく、くすばつて、夫の少しばかりの立身ぐらゐを見て居る人は、ぢぢむさく馬鹿らしく見えて、やつぱり身分のある人の娘などは、宮中に出して、世の中の有様も見習はせたいものだ。内侍などでも一寸させた方がよいと思はれる。(それなのに)宮仕した女は、はねかへりでいけないなどと思つて居る男は、ほんとうに憎らしい。が、それも無理はない。申すも恐れ多い上様(帝)をはじめ奉り、上達部や殿上人、四位、五位、六位、女房は又無論、誰とでもつき合つて、その上その女房達の従者や、里から来る人たち、又ずつ

○草紙 冊紙の音便(音便は語を發する時、音の便りよきに隨ひて、その音を變へていふこと、例へば「思ひはかる」を「おもんばかる」「格子」を「かうし」の類)○關白 諸政を「關り白す」にて天子の御相談相手なり、天皇の御幼時に、政を攝るは「攝政」、御成人の後には關白となる、藤原良房、初めは清和帝の攝政、後、關白となりしが如し、關白の名は、前漢の霍光に初まる○いづもの浦 固有名詞にはあらず、いつもくと言ひ出でん爲に出雲の浦といひたるなり、歌の意は「いづもの浦にいつもく沙が一ぱい満ちるやうに私はいつもくあなたを思ひます」なり○深く 海(浦)の縁語○たのむはやわが 「頼りにするわまあ」の意なり「はや」は感嘆詞、これによりて「わ、まあ」の語勢出づるなり○あゆる 流るゝなり○若からむ人は 清少この時三十余歳なり、若き人ならば「年ふれば船は老いぬ」の歌の作りかへも不似合なるべしとなり○古今のさうし 古今集なり、醍醐天皇の延喜五年紀實之等敕を奉じて、萬葉集に入らぬ古き歌、及び現時の歌を撰して奉りたるもい。とちたるを冊紙(さうし)といふなれば古今集といふに同じ、冊紙の音便の「さう」に「草」の字をあつ○本 上の句なり○末 下の句○宰相の君 清少の同僚の女官なり、宰相なる人を、父か兄にもてる故の呼名○さやは 「やは」は反語○宣えう殿女御 左大臣師尹の女、藤原芳子、大鏡に「かたち愛しげに美しうおはしけり、内裏へ参り給ふとて御車に 上りければ、我が御身は乗り給ひけれど、御髮の揺は、母屋の柱の許にぞおはしける」云々、宣耀殿は後宮の一殿。女御は天皇の侍妾にし、皇后、中宮に次ぐ、なほその下に更衣あり○小一條 師尹の第あり、故にいふ○誰かは知り聞えざらん 「存じ申上げない人はあるまい」○琴の御琴 七絃のをいふ、四絃の琵琶、六絃の和琴、十三絃の箏の琴と合せて四種なり○二十卷 古今集は千首、二十卷なり○聞し召し置かせ 村上帝のなり○その年云々、何の年何の月いかなる

と下の長女、御厨人、たびしかはらま
で見知り人なのだもの。男の方は、か
へつて禁中と言ても、そんなに廣く誰
をでも見るといふ事はないかもしれな
い。でも大分、限界は廣からうと思ふ。
(宮仕して居た女を)奥方など、言はせ
て、大切にしまひ込んで置くには、奥
床し味が少いかもしれないけれども、
典侍など、言つて、時々は参内した
り、祭の御使などに出るのも、面目で
はあるまいか。そして、ふだんは、家
の中に引込んで居るのも随分よい。國
司が、五節の舞姫など出す時に、(妻君
が)何といつても、(昔馴染れた處の事だ
から)、分らずやで田舎者臭く、人にい
ろ／＼きくやうな、とんまな事は、す
まいと、一寸美しい位のものだ。

折に誰のよみしと、歌のほしがきを仰せて問はる、なり○葦石して 黒白の石にて、
覺えたると忘れたるとの數を置きて後に數へさせらる、なり○しひ聞えさせ 女御
に強要さる、なり○見つけてを「な、は余情をこむる助辭、こゝにては「見付けて、
さうして」ほどの意○けふ算 讀みさしの處に入れおくるしなり、長さ三寸、竹を
以て作り糸を以て結ぶとも、紙を捻りて結ぶともあり○御殿籠り 大殿籠る事、御寢
の事なり、清涼殿の夜の御殿(晝御座の北の間に御帳臺あり)に入らる、なり○い
とめてたし 村上帝が、女御芳子の古今集の口頭試問に合格されしを愛でられしと
まを中宮の御批評の詞なり○左右なくて すつかり覺え居るか、いかゞか、どちらに
か片付けではなり○ことをもぞ 他の古今集を見んかとなり○さだめん 全部覺え
居るか否かを檢定し了らんとなり○おほとなぶら おほとのおぶらの「の」と「あ」と
つまりて「な」となりたるなり、燈臺をいふ、これには高燈臺と切燈臺(臺の短きも
の)とあり、こゝは切燈臺なるべし○よませ給ひけん 女御の事を仰せらる、なり、
この頃は自身の子に向ひても、貴人は敬語を用ゐしが常のやうなり○上の女房の此
方許されたる 帝付きにて、中宮の方に出入を許されたる女房○まめやかに云々、一
向に夫の立身にふりての、こぼれ幸ひを待ち居るなり(内侍、内侍、司(後宮の雜
事、奏請、傳宣の事を司る)の女官、専らには典侍、掌侍、侍をいふ、(尙侍
の次なり)○かけまくもかしこき 「口にかけむも」の「む」を「まく」と延音にせらる
り、口にかけて申すも畏れ多きの意○おまへ 天皇、皇后をいふ○上臈部 位三位
以上、官參議以上の公卿をいふ○臈上人 昇殿を許されたる人、五位以上の人なり、
(六位も臈人は昇殿す)この下に「の」の字を入れて見るべし○從者 女房の召使、
陪人なり○長女 下司の老女の稱○みかはやうと 御厨人にて禁中の厨を掃除
する卑き女○たびしかはら 「飛磔」をつめて「たびし」、それと瓦にて、瓦磔なり、

數にも足らぬ者の稱○いつかは云々 どういふ時でも、自分の身分を恥ぢて隠るゝやうの事はせぬなり、いかなる卑き役をなし居て
も、禁中に仕ふるといふ事を榮とせるをいふ、「かは」は反語なれば「恥ぢ隠れたるはない」の意となる○殿ばら 男達はなり、こゝ
のみ敬語なるが解しにくきなり、「男は」ほどにてよろしかるべし○上 妻となりたる婦人の敬稱、葵上、紫上の類○ないしのすけ
平城帝以來は、尙侍は天皇侍妾の一人となり、内侍司の事は、おもに典侍承りてなす○祭の使 賀茂祭の御使に立ちて、車にて大路
を練りゆくをいふ○すりやうの五節 大嘗會、新嘗會に行はるゝ童女の舞の名を五節といふ、公卿より二人、殿上人、受領より三人
出す(五節の舞の始めは、天武帝吉野宮に琴丸彈せられし時、前の米に天女天降りて羽衣の袖を五度ひるがへし舞ひしかば、帝「少
女子がなとめさびすもから玉を、たもとに巻きてなとめさびすも」と詠せられしに起る「少女さびすも」は、「少女のすさびをする、
まあ」なり)。この章は正暦三年の春、中宮の御父道隆關白、御兄伊周大納言の盛時なり天皇御十五歳、中宮十九歳

つまらないもの(は)

日中、吠える犬。春の網代。三四月頃
に紅梅の着物を着たの。赤兒の亡つた
産屋。火のきえた火鉢や爐。牛の死ん
でしまつた牛飼。博士が續けざまに女
の子ばかり産ませたの。方違に往つた
のに、御馳走をしない家。まして節分
の時は余りだと思ふ。地方からよこし
た手紙に、何にもつけてないの。此方
からの先方でさう思ふだらうけれど

すさまじきもの

荒涼きもの、

晝吠る犬。春の網代。三四月の紅梅の衣。乳兒の亡りたる産屋。
火熾さぬ火桶。炭櫃。牛死たる牛飼。博士の打續きに女子生せた
る。方違に往たるに響應せぬ所。況て節分は不興じ。他の國より
越せたる文の、物なき。京のをも然こそは思らめども、然ど其は
懐き事をも書き集め、世に有る事を聞けば好し。人の許に特と清げ
に書き立て遣つる文の、返事見ん、今は來ぬらんかすと奇く遅き
と待つ程に、往つる文の結たるも堅文も甚汚氣に扱し膨めて、表

も、けれども、それはおもしろい出来事も書き集め、世間咄が澤山に書いてあるから、それだけでもよい。人の處に、格別氣をつけて美しく書いてやつた文の、返事を見たい、もう來さうなものなのに、どうして遅いのだらうと待つて居ると、やつた手紙の、結んだのでも、豎文でも、くちやく／＼にぶくつかせて、上封じの墨も消えてしまつたのを渡して、おるすだつたとか、又は、御物忌だからおとりにならなかつたとか言つて、そのまゝ渡すのは、ほんとうにつまらなくて、いやに成てしまふ。

又きつと來る筈の人に、車を迎へにやつて待つと、來た様子だから、皆なして出て見ると、車を車屋に入れて、轎

に引たりつる墨さへ消たるを遣せたりけり。在さざりけりとも、若は物忌とて取り入すなど言て、持て歸りたる、甚忙しく不興じ。又必ず來べき人の許に、車を遣て待に、入り來る音すれば、然なりと人々出て見るに、車屋に入て轎ほうと打下すを、如何なるぞと問ば、「今日は在さず」「渡り給す」とて牛の限牽き出で去る。又家動て取たる聲の來すなりぬる、甚本意なし。兒の乳母の唯假初とて往るを探れば、兎角遊し慰めて疾く來と言ひ遣たるに、今宵は得參るまじとて返事越せたる、不興きのみにもあらず憎き理なし。女など迎る男、況て如何ならん。待つ人ある所に、夜少し更て、忍やかに門を叩ば、胸少し潰れて人出して問するに、否ぬよしなき者の名告して來たるこそ、不興といふ中にも返す返す不興けれ。

験者の靈氣調すとて、甚う得意顔に、獨鈷や珠數など持せて、蟬聲に絞り出し誦み居たれど、聊去り氣もなく護法も付ねば、集

を、がなんとおろすから、どうしたのかときくと、「今日はおるすで、此方へはお出でになりません」と言つて牛だけを引き出して、(牛小屋の方へ)往つてしまつたり。又家中大さわぎで取つた鞆さんが、來なくなつたのは、實につまらない。子供の乳母が、一寸と言て出たあとで、乳母をたづねる子供を、いろ／＼に慰め遊ばせながら、疾く歸るやうに乳母の方へ言てやると、今夜は參れませんかと返事をよこしたのは、つまらない處でなく、憎らしくて堪らない。女を迎へにやつた男が、そんな返事をされたら、ましてどんなにつまらなく思ふだらう。人を待つ時分に、夜が少しふけてから、こつそりと門を叩くから、胸がどき／＼しながら、人を

て念じ居たるに、男も女も奇しと思に、時の代るまで讀み困じて、更に付す。立ねとて、珠數取返して、噫、甚驗なしやと打ち言て、額より上方に、頭探り上て、欠伸を自身打爲て、寄り臥ぬる。除目に官得ぬ人の家、今年は必然と聞て、往時在し者們的、他所なりつる片田舎に住む者どもなど、皆集り來て、出で入る車の轎も間斷なく見え、物詣する供にも、我も／＼と參り仕う奉り、物食ひ、酒飲み、騒り合るに、終る曉まで門叩く音もせず。奇しなど耳立て聞ば、前追ふ聲して、上達部など皆出で給ふ。様子問に宵より寒がり戦き居つる下賤男など、甚物憂氣に歩み來るを、「何にか成せ給る」など問ふ。答には、「何の前司にこそは」と必ず答る。切に頼ける者は、甚う嘆しと思たり。翌朝になりて、空間なく居つる者も漸う一人二人づゝ迂り出ぬ。舊き者の然も得往き離るまじきは、來年の國々を手を折て數へなどして搖ぎ歩きたるも、甚う最惜う荒涼氣なり。

出してきくと、ちがつた、つまらない者が名告をして来たのだつたりするのは、全く、つく／＼、いやになつてしまふ。

験者が靈氣を調伏するのに、大層得意然と、獨鈷や珠數など(よりましに)持たせて、蟬聲を出して經を誦むけれども、ねつから(怨靈が)退きさうもなく、護法もつかないから、呼び集められて一緒に拜んで居る親類の人たちもふしぎに思つて居ると、一時が二時になるまで、きう／＼言つて誦んでも、一向護法がつかない。「よいわ、もう立て」と、よりましから珠數を取り上げてしまつて、「あーあ験がない」と頼みから、頂へ手を探り上げて、欠伸をして、(病人の傍の何かへ)倚りかゝつ

て、睡つてしまつたの。前の除目に官位を得なかつた人が、今年こそ、きつと、聞いて、田舎などに引込んで居た昔の家來たちが皆な寄つて來、出入る車の轆も一杯立ち込み、參詣に往く供にも、我も／＼と競争してついでゆき、(前祝ひの)御馳走を食べたり、酒を飲んで騒ぎながら待つて居るのに、明け方まで門を叩く音もしない。變だと耳を引つ立て、聞くと、前驅追ふ聲がして、上達部などが皆な退出するのだ。様子見に、宵から、寒さに顫へて(御所の門のあたりに)立つて居た下部の男などが、ひどく、がっかりした様子で歩いて來るのを、家の者は尋ねる元氣もない。わきから來て居る客などだけが、客殿は何におなりになりまし

巧う詠たりと思ふ歌を、人の許に遣たるに、返歌せぬ。懸想文は如何せん。其だに、機興しうなどある返事せぬは、心劣す。又騒しう榮達しき處に、打古めきたる人の、己が徒然と暇ある隨に、昔憶て、異なる事なき詠歌して越せたる。物の折の扇、大事と思つて、趣致ありと知たる人に吩咐たるに、其の日になりて意外なる繪など書て得たる。産養、餞別などの使に祿など與せぬ。些き薬玉、卵槌など持て歩く者などにも仍與すべし。思も掛ぬ事に得たるをば甚興ありと思べし。是は然べき使ぞと、雀躍して來たるに、徒なるは、まことに荒涼きぞかし。

智取て四五年まで、産屋の騒せぬ所。成人なる子ども數多ありて、好せずば、孫なども這ひ歩きぬべき人の、親同志の晝寝したる。傍なる子どもの心にも、親の晝寝したるは據處なく荒涼くぞあるべき。寝起て浴る湯は腹立しくさへ覺れ。師走の晦日の霖雨、一日ばかりの精進の懈怠とやいふべからん。葉月の白襲、乳

合す成ぬる乳母。

晝ほゆる 夜の守りのものにて、晝はゆるは興ざめなり○あじろ アミシロの略。川瀬に數多の竹木を編み列れ、網に代へて魚を捕ふるもの。山城の宇治川、近江の田上川にて、冬日氷魚をとり(九月より十二月まで)十二月三十日朝廷に貢するを例としたり○紅梅のきぬ 表紅、裏紫の袴にて、十一月より二月までの衣、三四月は櫻、山吹などの衣を着る故、時候外れなるなり○牛死にたる牛飼 流布本「牛にくみたる牛飼」とあれど乳子のなくなりたる産屋と同じく、淋く無興なる例なるべしと一本の方をとる○博士 大學寮(式部省に屬し紀傳道、明經道、明法道、算道の四道を掌る)の各道の博士なり、(他に音博士、書博士あり)いづれも漢學にて男子のみの修學を許すなれば、女子にては親の學をつぐ事能はず、無興なるなり○方たがへ 陰陽家の方にて、他出の方角に吉凶をいふ、(天一神を避くるなり)往くべき方の凶なる時は前後他の家に宿し方角をたがへて往く、(天一神は陰陽家の祭る神にて、是なるが如し、この神、遊行の方角をふたがりといひ、その日に他出する時は方違をなす)○あるじせぬ 主人設といひて饗應の事あるじといふ、方たがへの爲、一泊したる家にて一向もてなさぬ事○節分 氣候の、立春、立夏、立秋、立冬に移る時をいふ、(後には専ら立春の前夜のみいふ事となりたり)主上を始め上皇、女院、大臣以下すべて方たがへをなす風習なりしなり○ものなき 何の土産も添へてなきなり、遠方よりはる／＼おこす文ならば土産もつけよかしといふなり、(今の如く郵便にはあらで、人に持たせよこすなれば)○京のまも云々、京より地方にやる文をも、受くる方にては、同じ事思ふべけれども、京よりは、品物は送らすとも、おもしろき咄を多く書きてやれば、それにてよし、地方よりは何のゆかしき咄もなき

た」など、きくと、返事には、下「何の前司で居らつしやる」と、きまつて言ふ。一生懸命あてにして居た者は、すつかり、がつかりしてしまふ。夜が明け切ると、一杯居た者も一人へり二人へり段々に出て往く。年來の家來で、往き處もない者は、來年明く國々を(あそこと此處など)指を折つて數へたりして、元氣をつけて歩いて居るのも、随分氣の毒にも淋しげなものだ。上手に詠んだと思ふ歌を、人の處にやつたのに、返歌をしない(のもつまらない)。懸想文は、(先に氣がなければ)しかたがない。それすら、時候とか場合とかど、おもしろい位の返事もしない人間は、愛想がつきる。又(人の出入りが多く)賑やかに時めいて居る人

なれば、せめて物にても添へよといふなり○引きたる墨 封じ目に引きたる墨なり、文は紙一枚にて上を巻き、こよりにて真中を結び、その上に墨を引きたるなり○物いみ 神佛を祭る時などに若干の時日沐浴し、飲食を慎みなどして身心を淨くし、穢れにふるゝを忌む事なり、そのしるしに物忌とかきたるものを簾、冠などにかく、途にて穢らひにふれ、又は夢見のよからぬなどにもなす○牛のかぎり 車を車やどり(車を入る、所)に入れ、轆(車の牛をかくる所)をかたんとおろし、牛だけを引き出すなり○とりたるむこ この頃は初めは、すべて夫の方より妻の家に通ふなり○來ず成ぬる 心に染まれば通はずなるなり、一本この下に「いとすさまじ、さるべき人の宮仕するがりやりて、いつしかと思ふいとほいなし」とあり、さらば「來すなりぬる聲を、然るべき宮仕人(なじめる女)の許にやりて、その中には歸り來むと待つもいと本意なし」となり、寫す人の加へたるならん、拙き書きざまなり○めのと「妻の妹」にて、神代に豐玉姫、兒を産みて瀛郷に歸り、妹玉依姫留りて侍養することあり、後世この語を約めて「めのと」といひ、且つその事を移して専ら乳母の稱とせり○胸少しつぶれて つぶれは大方驚く時に用う、こゝはときめく意に用ゐたり○獨結 眞言宗に用ゐる金剛杵の事、もと印度の武器、この杵を持たざれば佛道成就し難しといふ、長さ通例七八寸、銅鐵などにて作り、兩尖の獨頭なるをいふ、三股なるは三結、五股なるは五結といひ、修法の具なり○珠數 珠糸に貫きつられて環としたるもの、僧の念佛するに爪にて珠を繰りその通數を計るに用う、これを爪繰るといふ、珠は菩提珠、水晶等にて作る、宗旨によりや、たがへども常に百八箇とす○せみ聲 高く迫りたる聲、蟬に似たればなるべし、追聲との説はいかゞ、さばかり考へて付けしにはあらざるべし○護法 護法童子の約、佛法守護の爲に險者に使役せらるゝ童形の鬼神なり、この頃の病者の傍に「よ

の處へ、時世後れの人が、自分が、ひまで退屈の余り、昔を憶ひ出して、格別おもしろくもない歌を詠んで、よこしたりする(のもつまらない)。何かの儀式の時に立派な扇を持たうと、巧者な人に頼むと、その日になつて、思外の繪などを書いてよこしたの(もつまらない)。産養ひとか、馬のはなむけの使に、(先方で)祿をくれない(のも無興なものである)。一寸した薬玉とか、卵榎位を持參する使にも、きつとやると極つて居るのだから。一寸したお使に往て、思ひもかけ無い祿をもらつたら、さぞ悦ぶだらう(けれども反對に)立派な祿の出さうなお使だとあてにして往て、なかつた時は、どんなにかつまらなからう。聲をとつて、四

りまし」とて鬼神の、のり移る者を置き、護法(童子)、よりましにのりうつれば、ふるひ出し正氣を失ひて、病者につきたるもの、けは退散すると信じたるなり、いのり立てられ打ち調ぜられなどして、あらぬ事を口ばしり狂ふなれば、逆上せやすき者などを、よりましには供へたるべし○とり返してあれと こゝも紛らはしき書き方の爲、昔よりさまざまの説あるやうなり、「とり返してあれと」を解すれば「とり返してしまひたれど、なほ未練らしく、驗のない事はないといひて」と見え、一説の「あれど」は濁らす「我れと」にて「珠數を、よりましより取り上げて、自分で「あ、あ、驗がないやと嘆息して」と見れば、「あれ」といふ古言、前後につりあはず、されども下文に、「よりふしぬる」とあるを見れば「嘆息しあきらめたる方」なるべく思はる、要するに、諸所にかやうなる紛はしき書き方あるは、清少の性質、極めて奔放にて、文をやるにも細心の用意なく、いはゆる一氣呵成の、なほざりなるによるか、又は、人に見せむの小説にはあらで、隨筆の故の粗漏かと思ひたりしが一本を見るに及びて寫し誤りの多き事を知りたり(はしがき参照)こゝも一本に「あい」とあり、さらば「噫、甚」にて險者の嘆息の辭となる、この方解しよし○顔よりかみさまに 寫し誤り等の爲か、文章としては飽かぬふしあれども、才のひらめきは何方にも見え、このあたりも險者のあり様見るやうなり、髪を額より上の方になで上げて、當惑したるさまなり○あくびをおのれ打して この「おのれ」はよく用ゐられたり、傍の人こそ長時間祈禱の効なきを見居て、あくびも出づべきを、險者自らなす、いはゆる、人を、のみたるさまにて、非難されぬ先に自ら非難するさまなり○さきおふ 前驅の警蹕の聲○問ひだにも 様子を見て、駄目だつたと悟り、問ひもせぬなり○何の前司 此の度は任官なきなれば以前の任國をいひて、どこその前司だと答ふるなり○ゆるぎありき 勢ひをつけて歩き居るなり(清少の家は、祖父春

五年(たつのに)、産屋さわぎのない所(もつまらない)。成人した子供が多勢居て、わるくすると、孫でも這ひ歩きさうな人の両親が、(一緒に)晝寢をして居るのは、そばに居る子供の身になると、頼りなく、つまらなからう。寢て起きて、すぐに湯に入るのは(氣持がわるくて)、腹が立つ位だ。十二月の晦日のびしよ〜雨は、もう一日でおしまひといふ精進日に、不精進をしてしまふやうなものだ。八月になつての白襲ねの衣裳(も)、乳が出なくなつた乳母(も)つまらないものだ。

万事爲果の轉か、十二月をいふ〇一日ばかりの精進の云々、年の終りの日に降り暮すは、幾日かの精進をつとめて、終りの日に懈ると同じく、興なしとなり〇葦月 八月をいふ、稻穂の發月の意といふ〇白がさね 陰曆四月朔日よりの更衣に用う。單衣を襲ぬるなり「夏衣たち切る今日の白がさね、知らじな人にうらもなしとは」七月八月は秋なるに、八月になりても夏のかされなるは興ざめなるべし。

光(或は顯忠)は下總守にて終り、父元輔は周防、肥後守を歴任したれば、司召の消息に委しきも、ことわりなり苦き經驗を幾度か嘗めたるべし、元輔の歌に「司賜はらで又の目、左近藏人の許に遣しける」として、「年ごとにたえぬ涙やつもりつ、いと深くは身を沈むらむ」〇懸想文はいかゞせむ 懸想文などは、先方で好ければ返事のなきも、よん處なしとなり〇うぶやしなひ 出産後三日目、五日目、七日目にその親類眷族より産婦の衣裳、嬰兒のむつき、井に屯食(又どんじきといふ、下膳に給ふ握り飯(強飯)を握り固めて鳥の子の形に丸く少しくしたるもの) 梳飯(盃酒といふが如し、徳川時代にも梳飯振舞とて、親族朋友に酒食を饗する事ありたり)か贈るをいふ〇うまのはなむけ 支那にて、昔、旅に立つ人の馬に草を興へて、行く方向へ馬の顔を向かせしに始まる、後には物品を贈る事となりたれども、なほ馬の鼻向けといへり〇ろく 被物といふ。遊宴佛事その他臨時の用などに當座の報酬に與ふる貨財物品をいふ、もとは衣服を肩に被かせ興へしによりて名づく〇薬玉 麝香、沈香等の薬を玉にし、錦の袋に入れ、糸にて飾り、膏油、艾などを結び、五色の糸の長さ八尺又は一丈を結び下げたるもの、五月五日禁中絲處より二流を牽り、藏人之を晝御座の母屋の南北の柱に結びつく、陛下にても柱、簾等にかくれば、邪氣を去り不淨を拂ふとて用ゐたり〇卯づゑ 正月上の卯の日に、兵衛府より、五尺三寸の杖を切り、五色の絲にて巻きて奉る、邪氣を避くといふ〇うまご「生世子」の意か〇しはす 歳果の畧轉か(とを省き、つは同段のすに轉じて)又は「生世子」の意か〇しはす 歳果の畧轉か(とを省き、つは同段のすに轉じて)又は

倦怠るもの、

精進の日の勤行。日遠き準備。寺に久く籠りたる。

精進の日の 一心に勤行せむと思ふより、かへりて倦怠の心生するなり〇日遠きいそぎ 日数の大分ある準備、まだ〜と油断すること〇寺に久く 祈願、物忌などの爲、數十日も寺にこもる事あるなり。

人に侮らるるもの、

家の北面。余り好人と人に知れたる人。年老たる翁。又輕率しき女。築土の缺壞。

北面 南を表とし、北を裏とする例なれば、向きによらず裏の事を北面といふ、表側は注意して洒掃すれども裏の方は、なほざりにする故なり〇年おいたる翁 翁だけにて老いたるなれば、非常に老いたるをいふなるべし〇ついち 築土の約、土塀なり〇くづれ 缺け損じたるは、家の質しさも、家内のだらしなさも推し測られ、侮らはしとなり。

憎きもの、

急ぐ事ある折に長言する客人。侮はしき人ならば、後になど言ても追ひ遣つべけれども、有繫に 憚しき人、甚憎し。硯に、

退屈で怠けつたいもの(は)、

精進日のお經。當日までには、まだ大分日數のある支度。長い間の寺ごもり。

人に侮られるもの(は)、

家の裏側。余りお人好しと、誰にも知られて居る人。ひどく年とつた男。又浮ついた女。破れた築土。

憎いもの(は)、

急用のある時に、長々としゃべつて居る客、目下の者ならば又あとでと言って、

たゆまるもの 人に侮らるるもの

憎きもの

追ひ歸す事も出来るけれども、多少遠慮のある人で(さうも言ひ得ない)、余計に腹が立つ。

硯の中に髪の毛が入つて、ぎし／＼と音がするの。又墨の中に石が交つて、しつとりと、よく磨れないの。急病人があるので驗者を探しても、いつもの所に居ないで、何處かへ出かけたといふのを、方々尋ねあるく間、永く待ち遠かつたのを、やつと來たと思つて、よろこんで加持をさせると、此の頃靈氣抜ひで草臥れたと見え、坐るとすぐに、お経が居睡り聲なのは、堪らなく憎らしい。くだらない人が、やたらに知つたふりして、しゃべつて居る(のも憎い)。火鉢や爐などに、手を裏返したり、皺を延したりして、あたつて居る(のも

髪の入て摺れたる。又、墨の中に、石混入て、きし／＼と軌みたる。

俄に煩ふ人のあるに、驗者探るに、例ある所には在で他にある。尋ね歩く間に、待遠に久きを、辛じて待つて、悦びながら加持せさするに、此の頃靈氣に困じけるにや、坐る隨に即眠り聲になりたる甚憎し。何條事なき人の、漫に得勝に、物甚う言たる。火桶、炭櫃などに、手の裏打ち返し、皺押し延などして烙り居るもの。何時かは、若やかなる人などの、然は爲たりし。老ばみ厭であるものこそ、火桶の傍に足をさへ擡て、物言ふ隨に押し摺などもすらめ。然様の者は、人の許に來て、坐んとする所を、先づ扇して塵拂ひ捨て、坐も定らず廣めきて、狩衣の前、下方に捲り入ても居るか。斯る事は、言ひ効なき者の際にやと思と、少し貴き者の、式部太夫、駿河前司などいひしが、然爲しなり。又酒飲て赤き口を探り、鬚ある者は其を撫て盃人に取する程の氣色

憎らしい。若い者は決して、そんな事はしない、汚い年寄に限つて、火鉢のはたに足まで持ち上げて、しゃべりながら、兩足をこし／＼摺つたりする。さういふ者は、人の前に來て、自分の坐らうと思ふ所を、先づ扇で(ばつばと)ごみをはたいて、居すまいわるく場をとつて、狩衣の前を膝の下に捲き込んで居る。そんな事をするのは下賤の者だけかと思ふと、可なりの身分の、式部太夫だの、駿河前司などが爲た。又酒をのんで(酔つて)、赤い口の傍を撫で廻したり、鬚のある者は、それを撫でながら、盃を人に獻したりする様子つたら、堪らなく憎らしい。そして「もつと飲め」などと、強ひて居るらしい。ぶる／＼と身ぶるひをし、

甚く憎しと見ゆ。又飲めなどいふなるべし。身顛をし、頭振り、口邊をさへ引き垂て童の「守殿に參りて」など謠ふ如にする、其はしも、正に、貴き人の然爲給しかば、厭しと思なり。美望し、身の上歎き、人の上言ひ、露ばかりの事も、欲見しがり、聞まほしがりて、言ひ、知ぬをば怨じ誹り、又僅に聞き渡る事をば、我元來知たる事の如に、他人にも語りしらへ言も、甚憎し。物聞んと思ふ間に、泣く兒。鳥の集りて飛び交ひ鳴たる。忍て來る人見知て吠る犬は、打も殺つべし。然まじう強ちなる所に隠し臥たる人の、駢したる。又密に忍て來る所に、長島帽子して、有繫に人に見じと惑ひ出る程に、物に突き障りて、そよると言せたる、甚う憎し。伊豫簾など懸たるを打被きて、さら／＼と鳴したるも甚憎し。帽額の簾は況て、強き物の打置る、甚著し。其も徐引き上て出入するは、更に鳴らす。又遣戸など、荒く開るも甚憎し。少し擡るやうにて開るは、鳴やはする。拙う開れば障

首を振り鰐口をして、童の(譚ふ身ぶり)で「國府殿に参りて」など、譚ひかける。それが實際、高位の人がなさつたので、いやに成てしまつた。(又)人を羨しがつたり、愚痴を並べたり、人の蔭口を言つたり、一寸した事もほちくつて聞きたがり、人が知らないといへば、怒つて悪口を言つたり、又少しばかり聞いた事を、自分が前から知つてる事のやうに、しやべり散すのも憎らしい。何か聞かうとする時に、啼く子供も、鳥がかたまつて入り亂れ、やかましく啼くのも(にくらしい)。こつそり来る人を見知つて吠える犬も、撲ち殺してやりたい。無理な處に隠して置いた男が、寢込んで斬をした(のも憎い)。又こつそり来る處に、長鳥帽

子なども撻めかし、ごぼめくこそ著けれ。眠たしと思て臥たるに、蚊の細聲に名告て、顔の許に飛び歩く、羽風さへ身の邊に在こそ甚憎けれ。軌く車に乗て歩くもの、耳も聞ぬにやあらんと甚憎し。我が乗たるは其の車の主さへ憎し。物語などするに、差出で、我獨り才まくる者。惣て差出は、童も、大人も、甚憎し。昔物語などするに、我が知たりけるは、直と出で言ひ腐しなどする甚憎し。鼠の走り歩く甚憎し。仮初に來たる、子ども、童を可愛がりて興しき物など取るに慣て、常に來て居人て、調度や打散しぬる憎し。家にも、宮仕所にも、逢でありなんと思ふ人の來るに、空寢をしたるを、我が許に在る者們的、起し寄り來ては、寢穢しと思ひ顔に引き揺したる、甚憎し。新參の、差越て物知顔に、教へやうなる事言ひ、後見たる甚憎し。我が知る男にてある間、以前見し女の事、譽め言ひ出しなどするも、過て程經にけれど仍憎

子をして、その癖、人に見られまいとあわて、出したに何かにつかへて、ごそりと音を立てたのも、ひどく忌々しい。伊豫簾など懸けてあるのを(うまく上げずに)、肩にかついで、さらさらとならしたのも、まことに憎い。帽額つきの簾は、まして硬いから、(持ち上げて)おとした時に、余計音が高い。そろ／＼と引き上げて出入れば、そんなに音はしないのに。又遣戸などを荒々しくあけるのも、まことに憎らしい。少し持ち上げる位にしてあげれば、鳴はしない。へたにあげれば、障子などでも、曲がつてごぼ／＼と音がする。(又)眠たくて臥て居ると、蚊が細聲に名のつて、顔のはたを飛びあるく羽風まで、直接感じられるのが、まことに

し。況て當面たらんこそ思ひ遣るれ。然ど其は然もあらぬやうもありかし。噓で、誦文する人。大方家の男主人らでは、高く噓たる者甚憎し。蚤も甚憎し。衣の下に躍り歩いて、擦る如にする。又犬の衆聲に長々と啼き上たる、禍々しく憎し。乳母の夫こそあれ。女は、然ど近くも寄ねば好し。男子をば、唯我が物にして、立ち添ひ領じて後見、些も此の御事に違ふ者をば讒し、人をば人とも思たらず。不良けれど是が罪を心に任て言ふ人もなければ、處得、甚き面持して事を行ひなどするよ。

加持 眞言宗にて佛力護念を祈る咒法、即身成佛義に、「加治者表如来大悲與衆生信心一佛日之影現」衆生之心水一曰加、行者心水能感佛日名持」とあり○いつかは「かは」は反語○狩ぎぬもと鷹狩の時に用ゐし衣、後、官服となる。單の絹にて作る。五位以上は織物にて六位は無文(布衣といふ)盤領にて袖括あり、裾を袴の外に出して着る、帯にて腰をしめ、袴は指貫を用う○式部大夫式部省は「のりのつかさ」とも讀む、禮儀作法を司る故に名づく、なほ他に論功行賞、學政をも司る。卿(長官)には親王を以て任じ、大輔一人(正五位下)少輔一人(從五位下)大丞二人(正六位上)少丞二人(從六位下)その下にあり、大丞を五位に陞叙する事あれば大夫といふなり、大夫は五位の稱、「タヌー」とすみてよむなり、無

憎い。(それと又)がた／＼する車に乗つて歩く者は、つんぼかしらんと憎らしい。自分が(そんな車に)乗つた時は、貸し主まで憎らしい。物語などするのに、出しやばつて自分一人えらさうにする者(も憎い)。一たいさし出るのは、子供でも大人でも憎らしい。昔物語などするのに、自分の知つた事は、横合から「ちがふ」など、口出しをするのが誠に憎らしい。鼠の走り歩くのも憎らしい。一寸来た子供などを可愛がつて、おもしろい器でもやると辭になつて、しよつちう入り浸つて(ちやんと片付けてある)道具など引き散すのは、憎らしい。家でも、御所でも、逢ひたくない人の来た時、虚寝をして居るのを、召使の者などが、起しに傍に来て、寝坊だとも思ふやうに、終ひにはゆすり起したりするのは、實に腹が立つ。新参のくせに、さし出て物しりぶつて、教へるやうな口吻で、何か言て世話をやく

官(大夫(敦盛)の如きは、官はなくて五位に叙せられしをいふ、東宮大夫、左京大夫の時「ダイア」と濁りてよむ、長官の義なり○駿河前司 前に駿河守なりしが、今は非役なる時にいふ○童の守殿に 童の諱ふ「國府殿に参りて」なり、その頃ありし童諱なるべし、國府殿は國司○語りしらへ 言ひ合ふ、引ぢらふの如く、「しらへ」「しらふ」と働詞にて、互ひになす事。こゝは同氣相求めて語り合ふなり○長鳥帽子 立鳥帽子の長きをいふ、鳥帽子は、もと禮冠の下の頭巾なりしを延喜の頃より冠は正服に、鳥帽子は平服に用ゐる事となり、位官ある者は家にて昇服の時もかぶり、無位無官の庶民は朝夕常に被る、初めは黒き絹にて袋の如く縫ひたる柔かきものなりしを、後には漆をぬり固くして用うるやうになりたり(鳥の如く黒き巾を被りしにより鳥帽子といふべきを、同行の「王」に轉じていへるなるべし)○そよ風などの「そよ」にて小さき音、それに「ろ」をそへたるなり「ろ」は意味なく語尾に添ゆる音、「家ろ」嶺ろの如し○伊豫す 伊豫國浮穴郡父之川村の産、露の峯の山中の篠、極めて細く六七尺にも延ぶ、その莖にて編むといふ○もかう 朝 朝の音の約轉、御簾の上邊に添へて串を横に長く引き延ぶるものにして後世にいふ水引幕の如きもの、綠色に窠の紋を黒く散して染む○やりど 引戸に同じ、敷居、鴨柄の溝にはめて、左右へ引き交へて開閉する戸○鳴りやはする 「やは」は反語なり「鳴らうか、否、鳴りはせぬ」なり○調文 くさめすれば災禍あるとて呪に「休息万命 急急如律令」と唱ふる迷信なり○するよ よは嘆息の助辭。

のも、まことに憎らしい。自分が親しくして居る男が、以前馴染んだ女の事を譽めて咄し出すのも、今の事ではなくても、やはり憎らしい。まして、現在關係して居る女の事でもあつたら、どんなだらうと思はれる。けれども、それは(又、却つて罪がなくて)それほどには腹が立たないかもしれない。くしやみをして誦文する人(も憎らしい)。大てい家の男主人でもなければ、大聲でくしやみをするのは、非常に憎らしい。蚤もまことに憎い。衣裳の下を躍り歩いて、(衣裳を)持上げるやうにする(のだもの)。又犬が、何びきもで長々と啼き上げたのは、氣味がわるくて憎らしい。乳母の夫といふものは、憎らしい。(主人の子が)女ならば、傍へ立ちよらないからよいけれど、男子でもあると、やたらに自分の物類して、傍につき切つて世話をし、少しでも、その子の氣に逆らふものを、親(主)に讒訴し、人を人臭いとも思はず(威張り散らす)。悪い奴とは思ひながら、それをいふ人もないので、よい氣になつて、偉さうな顔つきをして、勝手に指圖などして居る。

手紙の文句の失敬な人は堪らなく憎らしい。世間の中の人を見下して書いてある詞の、失敬な(のが)。(けれど、又)それ程でもない人の處へ、余り恐れ入て書いてあるのも、たしかによくはない。が、(無禮な文は)自分が受けとつたのは勿論、人の處へ来たのを見るの

文詞無禮き人こそ、甚ど憎けれ。世を蔑に書き做たる詞の憎きこそ。然まじき人の許に余に畏敬たるも實に劣き事ぞ。然ど、我が得たらんは勿論、人の許なるさへ憎くこそあれ。大方、對坐ても無禮きは、何故斯く言らんと、片腹痛し。況て貴き人などを然申す者は、然は恐にて甚憎し。男主など悪く言ふ、甚醜し。我が使ふ者などの、「在る」「宣ふ」など言たる甚憎し。爰許に、「侍

も、腹が立つ。一たい、さし向つて咄すにしても、詞の失敬なのは、何だつてこんな言ひ方をするのだらうと、癢に障る。まして、高貴の御方に對して詞つきが悪かつたりすると、それは、馬鹿なので、實に憎らしい。家の男主人などに、失敬な詞をつかふのは、まことにわるい。又、自分の召使(が、自分の主人の事を、他に向つて)、「居らつしやいます」、「被仰います」など、言つて居るのは、憎らしい。そこへ「侍り」といふ詞を置かせたいと聞いて居る事がよくある。(又)無愛嬌でもと、余り上品ぶつて氣取つて言つたりすれば、先の人も傍で聞いて居る人も、をかしくなつて笑ふ。して見ると、嘲弄でもするかと思ふやうな、余り馬鹿

る」といふ文字を在せばやと聞く事こそ多かんめれ。愛敬なくと、詞品めきなど言は、言るゝ人も聞く人も笑ふ。斯く覺ればにや、余り嘲哂するなど言るゝまである人も、拙きなるべし。殿上人、宰相などを、唯名告る名を、聊憚し氣ならず言は、甚醜なるを、實に能く然は言はず、女房の局なる人をさへ、彼の「御許」「君」など言は、珍かに嬉しと思て、譽る事ぞ甚き。殿上人、公達を、御前より外にては官を言ふ。又御前にて物を言とも、聞き召んには、何てかは應がなど言ん。然言ん憎し。斯く言ざらんに惡かるべき事は。

殊なる事なき男の、引き入れ聲して艶立たる。墨付ぬ硯。女房の物懐うする。只なるだに、甚しも思しからぬ人の憎げ事したる。一人、車に乗て物見る男、如何なるものにかあらん、尊貴からずとも、若き男どもの物懐う思たるなど、引き乗ても見よかし。透影に唯一人赫奕ひて、心一つに目成り居たらんよ。曉に歸る男

町摩なもの、いけないやうだ。殿上人や、宰相などの實名を無遠慮に言ふのは、(ぶしつけで)よくないけれども、さうかと言て、女房の召使までを、「あのお許だの、あの君だのと言ふと、たまに敬はれた嬉しさに、大よろこびで、(あの方は、ていねいだなど)褒めちぎる。殿上人や公達(の事を、兩陛下の御前以外では、官名をいふ。又、御前で他と咄す時も、陛下がお聞きになる場合には、「鷹が」など、言ふべきではない。そんな事を言ふのはいけない。ちやんと實名をいふのに、差支へはない筈だ。格別でもない男が聲を細めて、氣取た(のは憎らしい)。墨のなじまない硯(も憎らしい)。女が、やたらに、物を見た

の、昨夜置し扇、懐紙探むとて、暗ければ探り當んくと叩きも渡し、「奇し」など打言ひ、探め出で、そよくと懐に差し入て、扇引展で、磁々と打用ひて罷り申たる、憎しとは通常、甚愛嬌なし。

同じ事、夜深く出る人の、烏帽子の緒強く結たる然も結束すともありぬべし。徐ら然ながち差し入たりとも、人の咎べき事は。甚う亂次う頑に、直衣狩衣など曲みたりとも、誰かは見知て笑ひ誹りしもせん。とする人は、仍曉の有様こそ興趣くもあるべけれ。理なく溢々に起き難氣なるを、強て峻し、「明け過ぬ。噫見苦し」など言れて、打長息く氣色も、實に、飽す物憂きにしもあらんかしと覺ゆ。指貫なども居ながら着も爲す、先づ差し寄て、夜一夜言つる事の残余を、女の耳に言ひ入れ、何事すとなけれど帯などをば結ふ如なるかし。格子啓け、妻戸ある所は、即て諸共に出で往き、晝の間の待遠からん事なども、言ひ出に送り出

がつたり聞きたがる(も憎らしい)。た
ださへ氣にはない人が、憎らしい仕
打をしたのも堪らなく憎い。たつた一
人、車に乗つて、物見に往く男(も憎
らしい)。どんなのもよい、大した身
分でなくとも、若い男が美しがるや
うに、女を乗せて出るがよい。簾の透
影にも、たつた一人ちらつて、相手
もなしに一つ處を見つめて居る。(何と
いふ、つまらない事なんだらう。又)あ
け方歸る男が、昨夜置いた扇や、懐紙
を探すのに、暗いものだから、あつち
こつち叩きまはり、「變だ」などと言ひ
ながら、やつと見つけて、「これだ」と
と懐中にしまひこみ、扇をばつとひろげて、
して、愛想がつきる。又同じやうな場合に、
なに嚴重にしくとも、よささうなものだ。
そろりと、そのまんま、髪をさし入れても、
咎め人はあるまい。(又)どん

なんは、見送られて、名残も興しかりぬべし。名残も出所あり。
甚早速に起て廣めき立て、指貫の腰強く引き結び、直衣、袍
狩衣も袖掻い捲り、万差し入れ、帶強く結ふ憎し。啓て出ぬる所
閉ぬ人、甚憎し。

なめ 斜なりよい加減に見る、つまり見くびるなり○わが使ふ者などの 流布
本「の」字なし、一本に従ふ○侍るといふ文字「在する」を「居り侍り」「宣ふ」
を「申し侍り」の如くに言はせたとなり○あいぎやうなくと「なくと」は「なく
とも」の意と解せる説もあれども、それにては意通ぜず、「なし」とありしが寫し
誤れるなるべし○居たらんよ 又は嘆息の助辭○とする「そんな事をする」の意、
「女の許に通ひなどする位の人ば」なり○指貫 袴の一種にて、委しくは指貫の袴な
り、衣冠、直衣、狩衣の時に用う、帯を糸にて指し貫きて足にくり付く、平絹又
は織物なり○つま戸 端戸か偶戸か、舞戸にて兩方に開くもの、寢殿作りの家にて
は、ぐるりを都とし、四隅だけに開き戸をつく、されば端戸といふ、兩方に開くよ
りいへば偶戸なり○あけて出てぬる 前の續きにはあらず、別の事なり。

なに、だらしく、變てこに、直衣や、狩衣をゆがめて着やうとも、夜半に見つけて嗤ふものもあるまい。女の處に通
つたりする位の人ば、やつぱり曉の様子可愛らしくあるべき事だ。開分けなく、しぶくして容易に起きないのを、
むりに起して、「明け過ぎてしまふ、見ともないではありませんか」など(女に)言はれて、溜息する様子も、ほんとう
に、飽かぬ別れが、つらいのかと、嬉しい。指貫なども、すぐにもつけず、きものだけ着て、先づ傍に寄り、夜中語つた
事の残りを、女の耳に言ひ入れ、何だか、のそくと手間をとつて、帯でも結んで居るらしい。
やつと格子をあけ、妻戸のある處は、女と一緒に出て、晝の間の待遠さなども言ひながら出て往くのは、(女も)見送ら
れて、名残も風情があらう。(全く)名残も出所がある。てきばきと勢ひよく起きて、ばつくと支度をし、指貫の紐を
しつかりと結び、直衣でも、うへのきぬでも、狩衣でも、袖をたくし上げ、何一つ忘れずに、ふところにしまひ込み、
帯をきゆうと結んで出かけるのは憎らしい。(又)明けた戸を閉めずにゆく人もほんとうに憎い。

小一條院を今内裏といふ。(上の)おは
します御殿は清涼殿で、その北の御殿
に、(宮様は)お出になる。西と東は渡
殿で、いつもそこから(帝の方へ)お上
りになる。(清涼殿の)御前は、壺にな
つて居るから、前栽など植ゑ、籬を結
て大層しやれて居る。二月十日の頃の

小一條院をば、今内裏とぞいふ。在す殿は清涼殿にて、其の北
なる殿に在す。西東は渡殿にて、常に參上せ給ふ御前は壺なれ
ば、前栽植ゑ、籬結て、甚興趣し。二月十日の日のうらくと長
閑に照たるに、渡殿の西の廂にて、帝の、御笛吹せ給ふ。高遠の
大貳、御笛の師にて在し給を、他笛二して、高砂を折返し吹せ
給ば、仍甚う愛たしといふも尋常なり。御笛の師にて、其の事ど

(日が)、うらゝかに長閑に照り渡つて居るのに、渡殿の(とりつき)の寢殿の西の廂で、上様(帝)が御笛をお吹きになる。高遠の大貳が、御笛の師で、(御前に)出仕して居るので、その人の笛とお合せになつて、高砂を幾度も遊ばすのが、例の事ながら、まことに結構、と申上げる位では足りない。御師範だから、いろ／＼御笛の事を御講じ申上げて居るのが、又よい。御簾の處に寄り集つて、拜見して居ると、自分が芹摘んだ事なんか忘れてしまふ。輔尹は木工允で、(この頃)藏人になつて居る。ひどく荒つぽい男だから、殿上人や女房は、荒鰯とあだなして居るのを歌にして、「左右なしの主、尾張人の種にぞありける」と歌ふのは、尾張の衆

もなど申し給ふ。甚愛たし。御簾の許に集り出て見奉る折などは、我身に芹摘しなど覺る事こそなけれ。輔尹は木工允にて、藏人には成にたる。甚う荒々しうあれば、殿上人、女房は、荒鰯とぞ命名たるを、歌に作りて「左右なしの主、尾張人の種にぞありける」と歌ふは、尾張兼時が女の腹なりけり。是を笛に吹せ給を添ひ侍ひて、高遠仍高う吹せ在せ。得聞き侍じ」と申ば帝「如何でか然とも聞き知なん」とて密にのみ吹せ給を、彼方より渡せ在して帝「彼の者なかりけり。只今こそ吹め」と仰られて吹せ給ふ。甚う興し。

小一條院 京都、近衛の南、東洞院の西、藤原師尹の家、長保元年内裏焼亡により、こゝに遷御ありしなり○清涼殿 かりに禁中の清涼殿に摸したるなるべし、主上の御住居なり○渡殿の 殿舎と殿舎との間に橋が、りとせるもの○壺 殿中の庭、或は垣の中など、一區の空、りたる地をいふ○ませ 間塞の義といふ、柴、竹にて粗く作れる垣、但し低きをいふ如し○前栽 庭前に植ふたる草木。後園に對していふ○わたどの、西のひさし 渡殿のとり付きの寢殿の、西の廂なるべし、廂とは、身舎の外、簀子(縁)の内なる細長き處(大櫛一間)をいふ○御簾 禁秘抄に

時の娘の腹に生れたからだ。それを御笛でお吹きになるのを、大貳(高)が、お傍で、大貳もつと高くお吹きになりませ、承りは致しますまい」と申すと、帝「でも、どうして聞えるか知れないから」と、そうつとばつかりお吹きになつたが、宮様の方へお出でになつて帝「ほんに彼は居ない。安心して吹かう」と、高くお吹きになるのが、ほんとうにおもしろい。

は熱地の産なれば我が國の、その頃の人は見し事あらざるべし、(神代記などには)鮫の一種の大きな「ふか」の類を「わに」といへるやうなり、他本には「あらはに」とあり、さらば露骨に氣どり氣のなき粗糲さを「露はに」といひしが、されども一本の、「あらはぎ」とある方、枝の突張りたる萩に無骨なる人なたとへし宮女の悪口らし、いづれにても硬ばり荒々しきを形容せるあだ名なり○さうなしのぬし 並びなき無類の人の意○尾張人の 俗に「道理で」の詞を、この上に附きて見るべし、父興方が尾張守在任中に尾張の人兼時の娘に生ませたるにて、後、中納言懐忠の養子となる、参河尾張邊りの人は京の人に比べて勇猛なりしなるべし○兼時續古事談に「神樂の人長は近衛舍人のする事なり、昔尾張の安居兼時、むね(喜)と、この事に堪へたり」云々、とあり、人長は神樂の人の長の意にて、神樂の舞人の稱、巻纒、老懸、摺衣にて柳を持ち舞ふ(「すりころも」は山藍、月草(露草ともいふ俗に盤草)その他のものにて種々の象を摺りつけ染め出したる衣)○この者「この」「彼の」すべて通じて用ゐたり○只今こそ この下に「高う」の意こもりたり。

胸がときめきするもの(は)。

雀の兒飼(は、是でも育つかと胸がときめく)する。幼い子供を遊ばせて居る所の前を通つた時、(おもしろく可愛らしさうで、一寸胸が躍る)。よい薫物を焚いて、一人で寝て居る時、(待つ人が早く来ればよいと胸が躍る)。唐の鏡に曇りが一寸見えた時、(はつと胸が、ときつく)。よい男が車を停めて、何か言つて、門の中に使を遣つたの(は、中に、どんな人が居るのかと羨しさに胸がときめく)。髪を洗ひ、化粧して、香をよく、たきしめた衣ものを着て居ると、格別、見る人が居ない所でも、自分で、やつぱり氣持がよい。待つ人などのある夜(だの)、雨のふり出した音(だの)、風が吹いて家をゆるすもの、ひよいと胸が、ときつく。

心動きするもの、

雀の兒飼。兒遊する所の前渡りたる。好き薫物燻て一人臥たる。唐鏡の少し曇き見出たる。貴き男の車停て物言ひ、案内せさせたる。頭洗ひ、化粧じて、香に染たる衣着たる、殊に見る人なき所にて心の中は仍興し。待つ人などある夜。雨のあし音。風の吹き動すも、偶ぞ驚る。

たきもの 煉香をいふ、沈香、檀香、麝香、龍腦、薰陸の類の細末に甲香(長螺のふたを製したるもの)を和し、蜜にて煉り合せたるもの。炷きたる上に伏龍をし、衣をかけて薫き染め、文などにもたきしむ○からの鏡 今ならば舶來の鏡といふが如し、唐土より來るは和製より質よかりしなるべし「かゞみ」は「赫見」の義、人の顔などうつし見るに用う、青銅と、しろめとを和し板に張りて面を滑かにし水銀をぬりて光りをおこす、後ろにつまみありて持つ、後には柄をつけたり。

昔の戀しいもの、

枯れた葵(を見ると、賀茂の祭の時を思ひ出して戀しい)。雛遊びの道具(を見ると、幼い時の事を思ひ出して戀しい)。二藍だの、葡萄染などの絹のきれはしが、草紙の間におしつけられてあつたのを見つけた時(は、そのきれのきものを着た時分の事を思ひ出して、戀しい)。又、昔、好きだつた人の手紙を、雨などが降つて淋い日に、探し出したの(も)。去年の扇(は、それを持つた時分の、いろ／＼の事が思ひ出されて、戀しい)。月の明るい晩(は故郷や、友達などを思ひ出して戀しい)。

心もちのよいもの(は)。

上手にかいてある女繪に、面白い文句が澤山ついて居るの(や)、祭などを見物に出たかへりに、車に一杯男が乗り合つたのを、上手な牛使ひが、車をさ

過ぎにし方の戀しきもの

こころゆくもの

過ぎにし方の戀しきもの、

枯れたる葵 雛遊の調度。二藍、葡萄染などの裁出の押し壓れて、草紙の中に入りけるを見付たる。又折から好なりし人の文、雨などの降て徒然なる日、搜し出たる。去年の扇。月の明き夜。

枯れたる葵 四月の賀茂祭を葵祭りといふ、上賀茂の神山より、とり來りて二葉葵を祭の當日種々の調度につく、柱簾などにかけたるは枯ればつるまで、そのまゝになしおく○二藍 紅藍と青藍との間色○えび染 織物は經紅に緋紫にて織りたるもの。裏は表、蘇芳(紅染に似て少し暗し)裏、花田(藍色の薄きもの、花色)○あはれ 「あ、はれ」にて感嘆詞なれば何にも通じいふなり、可笑きにも、哀れなるにも、おもしろきにも、こゝのは、好もしかりし人をいふ。

快適もの、

巧く描たる女繪の、詞興しう續て多る。物見の歸途に乗り溢れて男ども甚多く、牛巧く遣る者の車走せたる。白く清げなる檀紙に、甚細う書べくはあらぬ筆して、文書たる。川舟の下りさま。

つさと走らせてゆく(や)、きれいな
眞白い檀紙に、太い筆で、細くきれいに、
手紙が書いてあるの(や)、川舟の下つてゆく様子(や)、
鐵漿がよくついた時(や)、調食(の遊び)に、丁が澤山
出たの(や)、美しい糸を二本一緒にして、
練り練りし(て縫つ)たの(や)、辯舌の爽かな陰陽師を頼んで、河原に出て、
呪咀の穢をしたの(や)、夜、眼がさめて、
飲む水(だ)。又退屈な時に、さほど親しくもなく、疎遠でもない、よいかげんの客が来て、世間囁に、此の頃の出来事の、おもしろい事でも、憎らしい事でも、變な事でも、あれこれ、表向の事でも、自分の一身上の事でも、よく分つて上手に咄をするのは、まことによい心持だ。社や寺などに参詣

齒黒のよく染たる。てうばみに調多く打たる。美しき糸の、練り合せ練したる。物巧く言ふ陰陽師して、河原に出て呪咀の穢したる。夜寝起て飲む水。徒然なる折に、甚余り親昵くはあらず、疎くもあらぬ客人の來て、世間の物語、此の頃ある事の、興しきも、憎きも、奇きも、是に關り、彼に係り、公、私、不明からず、聞き好き程に語りたる、甚快適く心地す。社寺などに詣て、物申するに、寺には法師、社にては彌宜など如の者の、思ふ程よりも過て、滞なく、聞き好く申たる。

女繪 女の姿を描けるもの○物見のかへさ 往きには行粧をつくるひ練りゆきしもの、かへりにはその必要なければ走らすなり、紫野あたりを、く、りの緒の地につくほど指貫を前板にふみ出し、若公達の走らせゆくさまなり○みちのくがみ 檀紙なり檀の皮にて造る(後に格)。陸奥國より出せしにより、この名あり、紙の質白くて厚し、織文あるを高檀紙といひ、しばの細かきと粗きによりて大高、小高の別あり○川舟 川にのみ用うる舟、薄き板にて造り、早く走るなり○てうばみ 双六の賽二つあるが、二箇同じ目に揃ひて出づるを「調目」「揃目」などいひ、揃はぬを「半」といふ、調多く出づれば勝つ故、調取りの意にて、「調食」といふか。調に丁の字をあて、後世にも博奕を丁半といふ○齒黒め 鏡を酒に浸して作れる液

して、自分の念ずる事を、神や佛に取次いでもらふのに、寺ならば法師、社ならば彌宜などが、此方の思ふより余計に、すらすらと、上手に願つてくれるの(など、どれもまことに、心持がよ

檀榔毛(の車)は、ゆつくりと進ませるのがよい。急ぐのは軽々しい。綱代(車)は走らせた方が(見た眼が)よい。よその門から出てゆくのを、ひよいと見る間もなく往つてしまつて、供ばかりが、あとから飛んでゆくのを、(車の中は)誰だつたらうと思ふのが風情

檀榔毛は

にて齒を染むるなり、女子は古くより染め、男子は後三條天皇の御孫、有仁親王より用ゐられ、武家時代にも京家の武士は用ゐたり、公家は明治元年まで○陰陽師 陰陽寮の官。占、筮、相地、祈禱等の事を掌る(占は「うら」にて事の裏を察するの意、龜の甲を灼き、その縦横に裂くるを見て考ふ、トともいふ、筮は「めどぎ」を用ゐる易の法によりて、うらなふ)○河原 河原に出て、穢れを被ふなり、伊弉諾尊、日向の阿波岐原にて、身につけたる杖、衣服、手經等を投げ捨て、穢れを被はれしに初まる○呪咀の穢 人に呪はれたるを被ひ去るなり、迷信の盛なる時代なれば内事あれば呪咀と思ひ、又、ともすれば人を呪咀するなり○寢起きて飲む水 寢起きたる時、胃熱にてもあらば冷水甘がるべし、道隆公(大酒家)記に、清少大酒といふ事あれば、大酒ならずとも、よひざめの水の味を知りて言へるか○いと余り酔しくはあらず 余り親しきは累ひ多く、疎きは氣づまりなるべし、その中間の人の、徒然なる折に訪ひ來んは、清少ならでも好もしき事なり。

檀榔毛は緩かに遣たる。急たるは軽々しく見ゆ。綱代は走せたる。人の門より渡りたるを偶と見る程もなく過て、供の人ばかり走るを、誰ならんと思こそ興しけれ。徐々と久く行は甚厭し。牛は、額甚小く白きが、腹の下、足の下、尾の裾などは白き。馬は、紫の班容たる蘆毛。甚う黒きが、足肩の邊などに白き處あり。薄紅梅の毛にて髪尾なども、甚白き、實に木綿髪とも言つべ

がある。のろ／＼と手間をとつて往くのは、いけない。

牛は、額が小さく、その毛が白つぼくて腹の下と足の下の方と、尾の先の方が白いのがよく、馬は、紫の斑があるやうに見える葦毛と、眞黒で足と肩のあたりに白い毛があるのと、薄紅梅の毛で、頭やしつぽの眞白な、成程木綿髪とも呼びさうなのがよい。

牛飼は大柄な男で、髪の毛が赤ぼく、顔色も赤くて、氣の利いたらしいのがよい。雑色や隨身は、細そりしたのがよい。身分のよい男でも、若い中はさうした形ちの方がよい。余まり肥つて居ると、薄鈍に見える。小舎人は、小男で、髪の毛のきれいなを、ばらりと後ろに垂れて、畏つて何か言つて居

き。牛飼は、大にて髪、赤、白髪にて、顔の赤みて才覺し氣なる。雑色隨身は細やかなる。貴き男も、仍、若き程は、然る方なるぞ好き。甚く肥たるは、眠たからん人と思ふ。小舎人は小く、髪かみの美うつくしきが、裾すそ爽さわかに、聲こゑ美うつくうて畏おそりて物ものなど言いたるぞ、らうらうじき。

猫は頭部の限黒くて、他所は皆白からむ。

網代「あじろ」は「編席」の約。竹、葦、などを薄く細くしたるものを縦横に斜に編みたるをいふ、奥は青竹のあじろにて外を張り、黒塗りの押縁を打ちたるもの。板奥に次ぎて暗の時に用う○あし毛 白毛に黒き差毛あるものをいへど、こは白毛に紫のまだらあるをいへるなるべし○ゆふかみ 八雲御抄に「馬の髪白きなり」とあり、木綿は楮にて製せる布にて、その色白く、織につけて幣はにとし神に上りなるとすれば、馬の髪かみの白きを稱美して言へるなり○雑色 無位にて袍の色さまざまなるよりの名なり、公卿の召使へる車副くるまのへの侍○隨身 朝廷より賜はる護衛兵にて、左右近衛府の舎人、弓箭帶劍して供奉するをいふ、上皇に十四人、(御隨身)、攝政關白に十人、大臣大將に八人、納言、參議に六人、(隨身)中將に四人、少將に二人、衛門、兵衛督に四人、佐に二人(小隨身)○さる方「然やうの方」にて前の細やかないふ○眠たからん 敏捷の反對にて鈍重に見ゆるなり、一本「眠たからん」と見ゆ○小舎人 藏人所に屬して、公卿の使用に服す(小舎人兼は別)○らうらう

るのが、氣が利いて見える。猫は、頭全體が黒くて、他はすつかり白いの(がよ)。

説教師がきれいな顔で、凝と聴衆の方を見つめて咄すと、説教まで、貴く思はれる。傍見をして居ると、(何をきいたか)一寸忘れてしまふから、見ともない顔の説教師は、(聴衆を不信心にする)罪を作ると思ふ。(が)、かういふ事は止めませう、若い時なら、平氣だけれど、年をとると、後世の罪が心配になるから。(又、あの法師は)、尊い人だ道心が多いと言つて、(その人の)説教する所に、一番がけに聞きにゆく人があるが、かういふ罪を得さうな心から見ると、そんなにしないでもと思はれる。藏人を罷めると、昔は、御前驅な

じき「らうたき」(勞甚き)と同じ○白からん この下に「ぞ、よき」の意含まれたり、一本、「らうへの限り黒うて、皆白き」とあり。

説教師は、顔妍かほよき。直と目成たるこそ、其の説く事の貴たかさも覺れ。傍視はかりしつれば直と忘るに、憎氣にくけなるは罪や得らんと覺ゆ。此の詞は止むべし。少し年などの好き程こそ、斯様の、罪は得難の詞書き出けぬ、今は罪甚恐し。又貴き事、道心多りとて、説經すといふ所に、最初に往ぬる人こそ、仍、此の罪の心地には、然もあらで見れ。藏人下りたる人、昔は御前などいふ事もせず、その年ばかり、内裏邊には、況て影も見えざりける。今は然しもあらざめる。藏人の五位とて、其をしもぞ忙いそう仕へど、仍名殘徒然にて、心一つは暇ある心地ぞ爲べかんめれば、然様の處に急ぎ行くを、一度二度聞き初つれば、常に詣でま欲くなりて、夏などの甚著いさあつきにも帷子甚鮮麗に、薄二藍、青鈍の指貫など、踏み散して居たんめり。烏帽子に物忌附たるは、今日然べき日なれど、功

ども勤めず、その年内位は、禁中へは、
 てんで影も見せなかつた。今はさうで
 もないらしい。藏人の五位といつて、
 (馴れて調法な爲に)余計に用をいひつ
 けるけれども、それでも、やはり、六
 位で在職して居た時分の忙しかつた癖
 がついて、自分だけはまだ／＼ひまな
 氣がするらしく、さういふ處(説教)で、
 一二度聞き初めると、いつも往きたく
 なつて、夏など、ひどく暑い時でも、
 帷子の新しいのに、薄二藍か青鈍の指貫
 などを、踏み散かして(得意然として)
 居るらしい。(又、時には)烏帽子に、物
 忌の札をつけて居るのは、(あゝあの
 人は)今日は物忌なのだけれど、功德の
 事だから、休まずに出て来たのだと、
 見せる爲だらう。定刻より前に来て、

徳の方には障すと見んとにや、急ぎ来て、其の事爲る僧と物語し
 て、車立るさへぞ、見入殊に着たる氣色なる。久く逢ざりける人
 などの詣で會たる、珍しがりて、近く居寄り、頷き、興しき事な
 ど語り出て、扇廣う展て、口に當て笑ひ、装束したる珠數搔い弄
 り手弄にし、此方彼方打ち見遣などして、車の美醜褒め誹り、某寺
 にて某の人の爲し八講、經供養など言ひ比べ居たる間に、此の説
 教の事も聴き入す。何かは常に聴く事なれば、耳馴て珍う覺ぬに
 こそはあらめ。然はあらで講師居て暫時ある程に、前少し追する
 車止て下る人、蟬の羽よりも軽げなる直衣、指貫、生絹の單衣な
 ど着たるも、狩衣姿にても、然様にては若く細やかなる三四人ば
 かり、侍の者、又、然ばかりして入ば、前刻居たりつる人も少
 し身動き寛ぎて、高座の許近き柱の許などに据たれば、有繋に珠
 數押し揉などして、伏し拜み居たるを、講師も映々しく思なるべ
 し。如何で語り傳ばかりと説き出たる、聴聞すなど立ち騒ぎ、額

説教する僧と物語し、車の置き場所さ
 へ、外から見つきのよい處にと氣をつ
 けたらしい。久しぶりで出逢た人を、
 珍しがつて、傍に寄つて咄をしたり、
 うなづいたり、可笑い事など咄し出し
 て、扇をばつとひろげて、口にあて、
 笑ひ、(美しく)装束した珠數を、ひろ
 ちやくしながら、(きよろ／＼と)彼方
 此方見廻して、(人の)車の、よい、わ
 るいをほめたり、けなしたり、どこそ
 こで、誰それがした八講、その時々
 經供養などを比べて批評して居る間、
 此處の説教などは耳にも入れない。余
 まり聞き馴れて、珍しくもないのらし
 い。(又)それとはちがつて、講師が着
 席して、やゝしばらくしてから、さき
 を少し追はせて来て、車をとめて下り

突く程にもなくて、好き程にて立ち出とて、車どもの方など見越
 せて、我同志言ふ事も、何事ならんと覺ゆ。見知たる人をば、興
 しと思ひ、見知ぬは、誰ならん、其にや、彼にやと、眼を注て思
 ひ遣るゝこそ、興しけれ、其處に説教しつ、八講しけりなど人言
 ひ傳るに、「其の人は在つや。」「如何は」など定りて言れたる、余
 なり。何かは無下に差し覗ではあらん。賤き女だに、甚く聞くめ
 るものをば、然ばとて初つ方は、徒歩する人はなかりき。稀に
 は、壺装束などばかりして、艶容き化粧じてこそありしか。其も
 物語をぞ爲し。説經などは、殊に多くも聞きき。此の頃、其の
 折差し出たる人の、命長くて見ましかば、如何ばかり誹り誹謗せ
 まし。

道心 佛道に歸依する心なり○藏人の五位とて 六位の藏人、六箇年勤務の後、五
 位藏人となるなれども、それは定員あるにより多くは退職して藏人の五位となる
 (現任なるは五位の藏人、非役は逆に藏人の五位といふ)○それをしもぞ「し」は強
 めの助辭○かたがら 裏なき單をすべていふ「一片」の意○裝束したる珠數 飾

る人が、蟬せみの羽はねより軽さうな、直衣や、指貫や、生絹なまきぬの單衣ひとへなど着たのと、狩衣姿などの若い、きやしやな三四人ばかりと、侍の者も同じ位の人數で入つて來ると、前から居た人も一寸からだを、ひさらせて、その人たちを高座のそばの柱の處などにすはらせる。場所がらとて、殊勝に、珠數をもんで拜むのを、講師も面目に思ふらしい。(で)、どうか人が語り傳へるほど立派にと、(力を入れて)説教するのに、その人

ちは、聴聞の(初めの作法に)、立たり頼づいたりした(だけで)、間もなく、よいほどにして立ち出るとて、車の並んで居る方を見やりながら、つれと咄して居るのも、何の咄だらうと思はれる。見知り越この人ならば、おもしろくも見、見知らぬ人ならば、彼の人だらうか、此の人だらうかと、注意深く想像するのも、おもしろい。「どこそこで説經があつた」とか、「八講をした」など、人が言ふので、「だれそれは往つて居ましたか」(ときくと)、「あの人往かずに居るのですか」などと札付ちだすになつて居るのも余りだ。(けれども)、さういふ場所を、まるきり覗いて見ないといふ法もない。下賤げせんの女ですら、熱心に聴いて歩くらしいものを。でも初めの中は、女が歩いてゆくのは、なかつた。たまには壺裝束

り珠など入りたるなり、今も水晶に珊瑚の飾り珠をし、菩提樹に水晶の飾り珠などさまざまであり○かいまざぐり「かい」は「掻き」の音便、まさぐるは、もてあそぶなり○八講 法華八講の略、天台の學匠が法華經の法問、八座の論議をなす、一日に朝座と夕座との二度あり、一度に一卷づつ、終し四日に全部八卷を終ふ、五卷の日(三日目)は中日とて特に法要あり○經供養 經を書寫したる功德を諸願に廻向せしめん爲に、佛法僧の三寶に供養するなり(供養とは堂舎を壯嚴にし讀經禮讃をなし飲食衣服を供すること)○すまし「清し」の義にて、練り絹に對して練らぬ生絹の稱、軽く薄くして紗の如きもの○さばかり やはり三四人の意なり○くつろぎで「くつろげて」とあるべきなり、あとより來る人の場をつくり與ふるなり○さすがに「人も坐を避くるほどの身分の人ながら」なり○八講 「はかう」とも「はつかう」ともいへるやうなれば、その口調によりて假字をあてたり○いかゞは この下に「彼の人の在らざらん」の意含まれたる反語なり○壺裝束 衣をつぼめ折る意といふ、練などの單衣を頭より被り、その上に市女笠を被り、かづきたる單衣の左右の襟をとり、引上げて、折りて前腰に挿みおくなり。



などだけで、色つぼく、しやれて往くのもあつたが、それもお詣りだけで、説教は格別澤山聴くのもなかつた。その時分、歩いた人たちが長生きして今の風を見たらば、どんなに悪く言ふか知れない。

菩提といふ寺に結縁八講した時、聴きに參詣したらば、友達から「早くおかけりなさい。淋しくて堪らない」と言てよこしたから、蓮の花びらに、

「もとてもかゝる蓮の露をおきて、浮世にまたは歸るものかは」。

(かういふ蓮の露には、探しても出會ひにくい)のだから、たま／＼出會つたのを捨て、浮世には歸りたくない)

と書いてやつた。實際、堪らなく尊くおもしろいので、もうそのまゝ、そこに居たいと思つた。湘中の老人が、家の人の待遠しがるのも忘れたといふ咄のやうだ。

菩提といふ寺に、結縁の八講せしが、聴に詣たるに、人の許より「疾く歸り給へ、甚淋々し」と言たれば、蓮の花びらに、
「清探てもかゝる蓮の露を措て、うき世に再は歸るものかは。」
と書て遣つ。實に甚尊く、あはれなれば即て宿りぬべくぞ覺る。
湘中が家の人のもどかしさも忘ぬべし。

ほだいといふ寺 早くに絶えたる寺なるべし、阿彌陀ヶ峯の南方にありしともいふ○結縁 佛の道に縁を結ぶ事。誰にもあれ、ひろく聴聞するを結縁と講といふ○もとても 「かゝる」「おく」は露の縁語。浮葉などいへば、うき世の「うき」も蓮の縁語なり○さう中が家 列仙傳に、「唐、呂雲卿嘗寓君山(山の名)側、遇一老人、索酒數行(盃を數杯重ぬること)老人歌曰『湘中老人讀黃老(書の名)手授紫藥(紫のかづら)坐碧草(みどりの草)春至、不知湘水深、日暮忘却巴陵道』とあり、湘水溢れて、君山は湘中の嶋となり了れるも知らず、老人は黃老の書に讀み耽りて家路の巴陵の道を忘れたる故事をひきて「人の待久しからん」といふ處に、湘中が家の人の待久しきをも忘れたりと、例の清少の辭にて故事を言へるなり、「さう中」は「しやう中」を柔かくいへる音便、「しやうび(蓄養)」を「さう

北白川といふ處は、小一條の大將(濟時)さんのお家だ。そこで、上達部が結縁の八講をなさつた處が、非常に結構なので、世間中の人が出かけて聴聞する。遅く往くと車の上せ場所もないといふので、露と一しよに早起して(往つた處が)、咄の通り一杯の人だつた。轅の上に又車を重ねて、三側め位までは少しは聞きとれる。六月十幾日、堪らなく暑い。池の運を見るだけが、少し涼氣がする。左右の大臣を除けては、どの上達部も皆往きなかつた。二藍の直衣や、指貫に、(下にお着になつた)淺黄の帷子が透けて見える。少し年とつたお人は、青鈍の指貫や、白い袴が

び」と柔かくいへるの類なり〇もどかしさ 正しくは講しきにて、その人をもどきたきの意なり、こゝは待遣しき意に用ゐたり。

北白川といふ處は、小一條大將殿(藤原濟時)の御家ぞかし。其處にて上達部、結縁の八講し給に、甚く愛たき事にて、世間の人の集り往て聴く。遅からん車は寄べきやうもなしと言はば、露と共に急ぎ起て、實にぞ空間なかりける。轅の上に又差し重て、三ばかりまでは少し物も聞べし。六月十餘日にて、暑き事世に知ぬ程なり。池の運を見遣るのみぞ、少し涼き心地する。左右の大臣運を措き奉りては、在せぬ上達部なし。二藍の直衣、指貫、淺黄の帷子をぞ透し給る。少し成人び給るは、青鈍の指貫、白き袴も涼げなり。安親の宰相なども若やぎ立て、惣て貴き事の限にもあらず興しき見物なり。廂の御籠高く捲き上て、長押の上に、上達部、奥に向て長々と居給り。其の下には殿上人、若き君達、狩装束、直衣なども甚美しく、居も定らず、此處彼處に立ち彷徨ひ遊びた

涼しさうだ。安親の宰相なども、若やいで、元氣に、一たい尊いだけでなく、おもしろい見物だ。廂の御籠を高く捲き上げて、長押の上に、上達部が奥の方に向いて、すらつと列んで居なさる。長押の下の處には、殿上人や、若い公達が、狩衣姿や、直衣など、どれも優美に着粧つて、席も極めずに、あちこちぶらついて、遊んで居るのもおもしろい。實方兵衛佐、長命侍従などは(大將の)御家の子で、他の人よりは、出入りなれて居る。まだ童の君たちなどは、まことに可愛らしい。少し日が開けた時分に、今の關白様が、まだ三位中將で、香の羅に、二藍の直衣、同じ色の指貫、濃い蘇枋の御袴に、張つた白い單衣の、ばきくしたのをお召にな

るも興し。實方兵衛佐、長命侍従など家の子にて今少し出で入り馴たり。未だ童なる君達など、甚美しうて在す。少し日開たる程に、三位中將とは、關白殿(隆盛)をぞ聞し。香の羅、二藍の、直衣、同じ指貫、濃き蘇枋の御袴に、張たる白き單衣の甚鮮麗なるを着給て、歩み入り給る。然ばかり輕び涼氣なる中に、暑かはし氣なるべけれど、甚う愛たしとぞ見え給ふ。朴、塗骨など、骨は異れど、只赤き紙を同じ列に打ち用ひ給るは、瞿麥の甚う咲たるにぞ甚好く似たる。未だ講師も上ぬ程に、懸盤どもして、何かはあらん物食るべし。義懐中納言の御有様、常よりも勝りて美げに在する様ぞ限なきや。上達部の御名など書べきにもあらぬを、誰なりけん少し程経れば、配色華々と甚く艶鮮かに、孰ともなき中の帷子を、是は正に只直衣一枚を着たるやうにて、常に車の方を見越せつゝ物など言ひ越せ給ふ。情趣しと見ぬ人なかりけんを。後に來たる車の隙もなかりければ、池に引き寄て立たる

つて、入つて居らしつた。皆さんがあんなに軽く涼しさうなお支度の中に、こつ／＼と暑苦しさうなものだけれど、大層お立派だつた。朴だの、塗骨だの、骨はいろ／＼にちがつて居るけれども、眞紅な地紙を張つた扇を一樣に用つてお出でになるのは(とんと)、瞿麥が、澤山咲いたやうだ。まだ、講師が壇に上らない中に、懸盤などで、何だか召上る。義懐中納言の御様子か、ふだんより又余計に、きりもなくお美しい。上達部の御名など、かういふ時の書くべきではないが、あとになると、どなたであつたか分らなくなるから、書いておく。(列坐の人の衣裳の)、色彩が、花々と美しく、艶麗で、どなたも中の帷子が美しいのに、(この中納言さ

を見給て、實方の君に、義人の消息相應しく言つべからん者一人」と召ば、如何なる人にかあらん撰て奉て在したるに、如何言ひ遣べきと近く居給るばかり言ひ合せて、遣り給ん事は聞ず。甚く行儀して車の許に歩み寄を、半は笑ひ給ふ。後の方に寄て言めり。久く立れば、人々「歌など詠にやあらん、兵衛佐(實)返事思ひ設けよ」など笑て、疾返事聞んと、首老上達部まで皆其方々に見遣り給り。實に、顯證の人々まで見遣しも、興しうありしを、返事聽たるにや少し歩み來る程に、扇を差し出て呼び返せば、歌などの文字を言ひ過ちてばかりこそ呼び返さめ。久しかりつる程に、あるべき事は、正すべきにもあらしものを、とぞ覺たる。近く参りつゝも不安く、「如何に」「如何に」と誰も問ひ給とも言ず。權中納言(懷)見給ば、其處に寄て氣色ばみ申す。三位中將「疾く言へ、余り有心過て爲損ふな」と宣ふに、使「是も唯、同じ事になん侍る」と言は聞ゆ。藤大納言(爲)は人よりも勝に覗て、爲「如

んは)たゞ一寸、直衣一枚着たやう(に、じみななり)で、しどろ私たちの車の方を見ては、何か言ておよこしになるのを、ほんに風情があると思はない人はなかつたらう。後から來た女車が、もう立て所もなさに、池の傍に立てたのを、御覽なさつて、實方さんに、義懐「口上をうまく取次げるもの一人よこして」と被仰つたので、實方さんが、どんな人か(知らぬが)、撰り出して連れてお出でになると、義「何と言つてやらう」と、傍の人と相談なさつて、おいひつけになつた詞は聞えず、(お使が)儀式張つて、女車の傍に歩きつくの、笑ひながら御覽なさる。後の方の車の處へ往て、言ふらしい。長い間、立つて居るから、皆なが「歌でも詠む

何言つる」と宣ふめれば、三位中將「道甚直き木をなん押し折らんめる」と聞え給に、打笑ひ給ば、皆何となく颯と笑ふ聲聞やすらん。中納言、義然て呼び反されつる前には、如何言つる。是や訂したる事」と問ひ給ば、使「久う立て侍りつれども、兎も角も侍らざりつれば、然は來りなんとて返り侍るを呼て」とぞ申す。義「誰が車ならん、見知りや」など宣ふ程に、講師の上りぬれば、皆居鎮りて其方のみ見る程に、彼の車は、掻い消つ如に失ぬ。下簾など、只今日始たりと見て、濃き單衣襲に二藍の織物、蘇枋の羅の表着などにて、後に摺たる裳、即て展げながら打ち掛などしたるは何人ならん。何かは人の片帆ならん、返事よりは、實にと聞て、却々甚好しとぞ覺る。朝座の講師清範。高座の上も光満たる心地して甚くぞあるや。暑さの困惑きに添て、爲措まじき事の今日過すまじきを、打ち措て、唯少し聽て歸なんとしつるを、頻並に集たる車の奥に居たれば、出べき方もなし。朝の

のだらう、兵衛佐、返歌の用意をして
おけ」など笑つて、早く返事を聞かう
と、年とつた上達部までが、皆なそつ
ちを見てお出でになる。實際（車にの
らない）、歩立の人までが見て居るの
も、可笑かつた。返事をきいたと見え
て、少し歩いて来ると、（その女車か
ら）扇をさし出して呼び返すので、歌
などの字を言ひまちがへたのだらう。
あんなに待たせて、何といふ事だ。よ
しんば間ちがつたにした處で直せる義
理でもないと思つて居る。やつと近く
に来るのも待遠しく、皆なが「どうし
た〜」と、きゝなさつても言はない。
權中納言（懷）が御覽になると、そこへ
往て、氣取て言ふ。三位の中將（隆）さ
んが、道隆「はやく言へ。余り氣取つて

講果なば、如何で出なんとして、前なる車どもに消息すれば、近く
立ん嬉さにや、疾々と引き出で、あけて出すを見給て、甚喧し
きまで人毎言に、老上達部さへ笑ひ憎むを、聴も入ず、答も爲で、
狭がり出れば、權中納言（懷）「や、罷りぬるも好し」とて、打ち
笑ひ給るぞ愛たき。其も耳に留す、暑きに惑ひ出で、人して、遣
五千人の中には、入せ給ぬやうもあらじ」と聞え懸て歸り出に
き。其の初より、即て終る日まで、立る車のありけるが、人寄
り來とも見ず、惣て只驚嘆しう繪などの如にて過しければ、有難
く、愛たく奥床く、如何なる人ならん。如何で知んと問けるを聞
き給て、藤大納言（光）「何か愛たからん、甚憎し。忌々しきもの
にこそ有なれ」と宣けるこそ興しけれ。然て其の月二十日余に、
中納言（懷）の法師に成り給にしこそ哀なりしか。櫻などの散ぬる
も仍尋常なりや。置を待つ間の、とだに言べくもあらぬ御有様に
こそ見え給しか。

言ひ損なふな」と被仰ると、使「どつち
みち、余り大した事では御座いません」
と、いふのは聞える。藤大納言（光）は、
他の人より熱心に覗いて、爲「何と言つ
たと被仰るらしい。三位中將（隆）が、
道隆「直き木を押し折つたのだ」と被
仰るので、大納言（光）がお笑ひなさる
と、何か分らぬながら、皆が、あは〜と
笑ふ聲が、女車の方へ聞えたかもしれ
ない。中納言（懷）さんが、爲「では、呼び
返される前には、何と言たのだ。これ
がなほした方のか」と、お尋ねになる
と、使「いくら待つて居ても、何とも申
しませんから、では歸りますと立ちか
けたら、呼んだので御座います」とい
ふ。爲「誰が乗つてゐたのか。知らない
か」と被仰る處に、講師が壇に上つた

北白川 北白川殿といふを略して言ひたるなり、諸本いづれも小白河となりあり
（はしがき参照）史料綜覽、花山天皇、寛和二年六月の條に、「十八日、右大將藤原
濟時、白河ニ於テ八講ヲ修ス」とある、それなり、小白河といふ處はなし〇小一條
大將 濟時なり、藤原忠平の五男師尹（小一條殿）の長子、右近衛府の大將なり、大
將は近衛府の長官、大臣と匹敵する官）〇露と共に起きて 露の「置く」を朝起きの
「起く」にかけたなり〇いそぎおきて 此の下に「ゆきしに」の意こもりたり〇實にぞ
ひまなかりける 「なるほど評判の通り、ぎつしりであいた場所がなかつた」なり
〇安親宰相 他本佐理、又他本「やすちか」の横に「道方」と記しあり昔より紛はし
くなり居るなるべし、佐理ならば能筆なり行成と並び稱せらる、（宰相は參議の唐
名）安親ならばこの時六十五歳なれば「若やぎ立ちて」の詞にあひたり〇なげし
下長押なり〇實方 濟時の兄なる定時の子にて濟時の養子。この時兵衛佐。一條帝
の朝に左近衛中將となる。藤原行成と争ひ陸奥守になされ任地に卒す、歌人なり、後
拾遺集に「やすらはで思ひ立ちにし東路に、ありけるものをよかりの關任地にて
詠せるなるべし、はゞかりの關は陸奥にあり（この時廿三四歳）〇長命 小一條大
將濟時の三男相任の幼名、寛和二年十六歳にて出家、「侍從入道」と大鑑にあり〇家
の子 實方は濟時の養子、相任は濟時の三男、共に「この家の子」となり〇まだ童
なる君たち 濟時の系圖には通任、爲任、相任、の三人の次は女子三人なり、他本
「又童なる」とあれば、こゝは相任の弟にはあらず、他の童をいふ〇三位中將とは
この詞により、清少がまだ宮仕へに出でた、ぬ寛和二年六月の八講のさまを、後に
思ひ出で、書きつけたる事しるし、清少これを記す時は道隆（定子の父）は、すでに
關白なれども、當時は三位中將なりしとなり（道隆の關白となりしは、それより五年
後の正暦元年五年八月、清少が宮中に奉仕せしは正暦二年十二月なり）〇香の薄も

ので、皆坐に落つて、その方ばかり見て居る中、その女車は、かき消すやうになくなつてしまつた。下簾など、今日初めて、かけたらしく、濃紫の單衣襲ねに、二藍の織物、蘇枋の羅の上着など着て、車の後の方に、地摺の裳を、ばつとひろげて出してあつたのは誰なんだらう。つまらない返歌などするよりは、もつともらしくて、いつそ、よいと思つた。

朝座の講師は清範で、高座の上も光るやうに思はれて尊い。暑くて堪らない上に、今日、してしまはなければならぬ事があるので、一寸聴いて歸らうとする處が、あとから集つた車の前の方なので出られない。朝の講がすんだら、どうかして出たいと、あとに

の香は丁字にて染めたる色、淡紅に黄を帯ぶ、薄物は紗、羅の類○蘇芳 紅の黒が、りたる色、蘇芳の木皮にて染む○張りたる 漆ぬりの板に、絹を糊にて張りて艶を出す○あざやかなるを この下に「下に」の意をこめたり、直衣の下に張りたる白き單衣を着られしとなり○ほうぬり骨など 他本いづれも「ほそぬり骨」とあり、しひて解すれば、ぬらぬ細骨(黒柿など)のや、ぬり骨なども、すべけれど、後の「七月ばかり」の條にも「ほうに紫の紙はりたる扇」といふ事あれば、ほうの方止しきなるべしと一本に隨ひたり、「ほう」が「ほそ」と誤寫されたるなるべし○かけばん 貴人の用とする膳の一種、四本足の臺の上に折敷をのせかけたるよりの名、四方の縁の面に織物を押し、上下横ぶちの四方に牙象(齒)の並べる如く高く低く彫りたるもの○を彫る○義體 一條太政大臣藤原伊尹の第三子、母は代明親王の女皇子女王(同母兄舉周、義孝の二人が、痘瘡にて同日に逝きし事、義孝は、美男にて極めたる道心者なりし事等、大鏡に見えたり)○少し種ふれば この下に脱字ありて「少しほどふればおぼつかなくなるによりて記しおく」の意なるべし、その意味を考へて修正したるものが 一本には「少しほどふれば」の代りに「おぼつかなくなるによりなん」の十二字あり○中のかたびら 直衣の下に着る單衣なり、汗取にて、冬春は白布、夏秋は紅の布、老人は香染を用う。形單に似てすべて小さく短かく作りたりと見ゆ○見ぬ人なかりけむを 「を」は余情を含ます助辭、「よ」と同じ○實方の君に 實方は、義體の祖父にて、師輔の弟なる濟時の養子なれば、師輔の子の義體とは親戚なり○けさうあらははに眼立つ事、車にのらぬ歩立ちの人をいふ○けに 勝りてなり、「げに」と濁らす○いと直き木をなん云々、後撰集に「いたく事好むよしを、時の人のいふとき」と詞書ありて、高津内親王の「直き木に曲れる枝もあるものを、毛を吹き疵をいふがわりなき」とあるを、もとにて言ひし詞なるべし、かまはずおけば何事もなきを、消息してつまらぬ返事に無興となりしに、たとへしなり、女車の返事は「御返事は出来かれます。宜しく」位の詞なりしなるべし○下すだれ 車の簾の中にかくる帷、長さ九尺五寸、二筋ならべ掛○濃き たゞ濃き濃きとあるは皆、紫なり○織物 綾織物の單なり○すりたる裳 地摺の裳といふ、白絹に山藍などにて模様を摺りつけたる裳なり(裳は纏く意か、腰より下に着くるもの○清範 播磨の人にて興福寺(法相宗)の律師、(印度より支那に入り我が國に傳はりたる俱舍、成實、律、法相、三論、天臺、華嚴、眞言を八宗といふ、律師は僧正、僧都の次に位する僧官)にて説教の名人なり、犬の法事を頼まれし時「唯今や過去精靈は九品蓮臺の上にて、ほと吠え給ふらん」といひし事、大鏡に見えたり○光みちたる 説教師は顔よきがよしといふ清少の持論に合ひたる秀麗の僧なりしなるべし、この時廿五歳、三十七歳にして寂す○打おきて この下に「出で来しかば」の意含まれたり○しきなみ あとより車の來て並ぶこと、波のあとよりよせ來るを「類波」といふに同じ○近く立てん 講師の間に車を立て得ること○やとやといふ發語を二つ重ねたるなり○まかりぬるもよし 法華方便品に「爾時世尊告舍利弗、汝已懇懇三請、豈得不説汝今諦聽、善思念之、吾當爲汝分別解説、説此語時、會中有比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷五千人等、即從坐起、禮佛而退、所以者何、此輩罪根深重、及增上慢、未得謂得、未證謂證、有如失、是以不住、世尊默然、而不制止、爾時佛告舍利弗、我今此衆、無復枝葉、純有眞實、舍利弗如是、增上慢人、退亦佳矣、汝今善聽、當爲汝説」とある中の「退くも亦よし」をいへるなり(比丘は僧、比丘尼は尼、優婆塞は戒を受けて僧に近事する男子、優婆夷は女子なり)法華經の中にある故事など此の頃の人は皆暗んじたるなるべし○ありがたく「ありにく」にて珍きなり、

居る車たちに言はせると前へ出られる嬉しさからか、早速に車を引き出して、途をあけてくれる。(こんなありがたのお講義を、もうお歸りなさるかなどと)大勢でがや／＼言ふと、年とつた上達部さん達までが、啞つて憎らしがるのを、耳にも入れず、返事もしないで、狭い處をやつと出ると、權中納言が、義「や、退くも亦よし」と、お笑ひになつて居るのがよい。それも耳にも留らず、暑さに夢中で飛出して、使に、「あなたも五千人のお仲間であらう」と言はせて歸つて來た。最初から終ひの日まで、毎日すうつと來て居た車があつたが、誰も傍へもゆかず、すべての様子が、妙に繪などのやうに珍く立派だつたので奥床しくて、

どういふお人だらう、知りたいものだ
と、人にきいて居たら、藤大納言(光爲)
がおきよになつて、爲何が立派なもの
か、小憎らしい、いやな奴だ」と被仰
つたのが、おもしろい。さて、その月
の二十日過に、中納言が、法師におな
りなさつたのには、驚いた。櫻などが
散つてゆくのも、これに比べれば何で
もない。「置くを待つ間の」など、い
ふ、はかない御様子には、一向お見え
にならなかつたのに。(まあ何といふ事
だつたらう)。

七月頃ひどく暑いから、何處もかも明
つ放しで居ると、月のある時分なら、
眼がさめて顔をさし出して見るのも、
まことにおもしろい。闇でも面白い。
ありあけのおもしろさは、言ふも皆だ。

びか／＼光る縁板の簷端近くに、きれ
いな疊を一枚一寸敷いて、三尺の几帳
は奥の方に押しやつてあるのが、へん
だ。端の方にたてるべきで、なぜ奥の
方が、氣遣ひなんだらう。隠れ人は、
出て往つて了つたらしい、薄色のきも
の、裏は濃くて、表の方は少し色の
褪めたのか、でなければ、ずつと濃い
綾の艶のよいのが、少し、くたく／＼に
なりかけたのを髪の上からかぶつて着
て居るらしい。香染の單衣と、眞紅な
生絹の袴の紐が、(引かぶつた)きもの
の下から出て居るのも、まだ解けたま
んまらしい。寝て居るわきに、髪の毛
がたぐまつてゆらく／＼して居るのは、
よつほど長いのだらうと思はれる處
に、何處からか、明方の露をふんで、

全「ありがたし」と禮に言ふは珍き御志といふ意なり○櫻などの散りぬるも 大鏡に
「花山院の御伯父にて義懐の中納言と聞えし、中略御心だましひかしこく有識にお
はして、花山院の御時の政事は、たゞこの殿と惟成の辨(左中辨)として行ひ給へ
れば、いとみじかりしぞかし、中略帝(花山院)御出家せさせ給ひしかば、やが
てわれも後れ奉らじとて、花山寺まで尋ね参りて、中略法師になり給ひにき」と
あり、八講は六月十八日なり、帝の御出家は同じ廿三日、義懐の出家は翌廿四日
なり、五日前の義懐は花やぎて思ふ事なげなりしを、俄にかゝる事、櫻の散るより
はかなしとなり、(花山帝御出家の次第は、女御祇子の薨去に無常を感ぜられしに
乗じ、藤原兼家、おのれの女超子の出、三條院を迎立する爲、息、道兼に帝を唆か
し、花山寺に伴ひ御髪おろさせまつりしなり)○おくを待つ間の 新救撰集、源宗子
「白露のおくを待つ間の朝顔は、見すぞなかくあるべかりける」(白露の置く間を、
命として咲く朝顔のはかなきは、見ぬ方がよかつた)。

七月ばかり、甚く暑ければ、万の所開ながら夜明すに、月の頃
は寝起て見出すも甚興し。闇も亦興し。有明將た言も恐なり。甚
艶やかなる板の端近う、鮮明なる疊一枚、假初に打ち敷て、三尺
の几帳、奥の方に押し遣たるぞ味氣なき。端にこそ立べけれ、奥の

不安からんよ。人は出にけるなるべし。薄色の裏甚濃て、面は少
し褪色たるならずば、濃き綾の艶やかなるが甚く萎ぬを、頭籠で引
き着てぞ寝ためる。香染の單衣、紅の濃厚なる生絹の袴の腰、
いと長く衣の下より引るゝも、未だ解ながらなんめり。傍の方
に、髪の下より疊りて、緩舒なる邊、長さ推量れたるに、又何處
よりにかあらん、開旦の甚う露満たるに、二藍の指貫、有か無か
の香染の狩衣、白き生絹、紅の甚艶麗なる打衣の、霧に甚く濕
りたるを脱ぎ垂て、髪少し膨みたれば、烏帽子の押し入られた
る氣色も亂次く見ゆ。朝顔の露落ぬ先に、文書んとて、道の程も
不安く、おふの下草など吟みて、我が方へ往に、格子の上り
たれば、御簾の傍を些啓て見るに、起て去らん人も興し。露を
哀と思にや暫時見たれば、枕頭の方に、林の紫の紙張たる扇
擴りながら在り。檀紙の疊紙の細やかなるが、花か、紅か、
少し香ひ移りたるも、几帳の許に散りばひたる。人の氣色あれば、

二藍の指貫に、極薄すりした香染の狩衣、(下に)白い生絹と、つや／＼した紅の打衣の、霧にひどくしめつたのを、だらりと着て、鬢が少し亂れて脹らんで居るので、烏帽子をはめた様子も、しどけない。朝顔の露の落ちない先に、(後朝の)文を書かうと、(歩くにも)氣がせて、「おふの下草」など、口ずさみながら、自分の方へゆく途に、(この)格子があいて居るので、御簾のしを少しあげて見ると、(女が一人で寝て居る)。起き別れていつた人にも興味が出て、一寸立どまつて見ると、枕もとに、朴に紫の紙を張つた扇が、ひろがつたまゝあつて、巾の狭い檀紙の疊紙の、花色だか、紅だかの、少し色のさめたのも、几帳のそばに散ばつて居

衣の中より見るに、打ち笑て長押しに押凭り居たれば、憚などする人にはあらねど打ち解べき意向にもあらぬに、憾うも見ぬるかなと思ふ。男「此上なき名残の御朝寝かな」とて、簾の中に半ばかり入たれば、女「露より先なる人の誹かしさに」と答ふ。興しき事取立て書べきにあらねど、斯く言ひ交す氣色ども憎からず。枕頭なる扇を、我が持たるして、及て掻き寄るが、余り近う寄り来るにやと、悸せられて、今少し引き入らるゝ。取て見などして、疎く思したる事など、打ち震め恨みなどするに、明うなりて人の聲し、日も差し出ぬべし。霧の絶間見ぬ程にと急ぎつる文も、挽みぬるこそ不安けれ。出ぬる人も、何時の程にかと見て、萩の露ながらあるに付てあれど、得差し出す、香の香の甚う染たる薫甚情趣し。余り顯露き程になれば、立ち出て、我が來つる處も、斯やと思ひ遣るゝも、興しかりぬべし。

ありあけ 月のありながら夜のあくるをいふ〇たゞみ この頃のは必要なる所に

る。(女は)人の氣息がするので、衣の中から顔を出して見ると、(男が)ここにこして長押しによりかゝつて居るので、氣が置ける人でもないが、打とける程にも思はない人に、こんな處を見られていやだと思ふ。男「ひどく御ゆつくりですね」と、みすの中に半身を入れるので、女「(私の寝坊よりも)、露より先に起きて来た、あなたの薄情の方が、よつぼどわるい」と返事をする。特別書き立てるほどの事でもないけれども、そんな事を言ひ合つて居る様子がおもしろい。(男が)枕もとの扇を、自分の扇で、及び腰にかきよせると、余り身近に來られるらしいのに、はつとして、(女は)少し引込む。かき寄せた扇を見たりして、「私などには、とんと

持ちゆきて敷く「置き疊」なり、吳産なもいへり、こゝは縁とりたる美吳産なるべし〇すゞし 練らぬ生絹。このあたりの描寫、さながら繪のやうなり、宮廷男女間のみだれたるさまは江戸時代の花柳の卷の如し、かくて政治の大権は武門に移りゆきしなり〇うちぎぬ 砧にて打ちて鬘を出したるよりの名、この頃は板引なれども、なほ、もとのまゝにいへり〇きり 霧る事、空氣中の水蒸氣の密に、しめりて水陸の面に近く漂ふもの、きらん、きり、きり、きりと四段に働く動詞を體言にひ据ゑたるなり、天霧ふなども働く詞〇少し亂れて 寝起きて、他より來しさま〇文かゝんとて、この頃は、女の方に宿りし翌朝、なるべく早く文をやるを愛のある證とせり、おそき時は女の親、侍女等胸つぶれて案するなり〇おふの下草 六帖に、「櫻麻のおふの下草露しあらば、明してゆかむ親はしる」とも「道に余り露しげくば(忍びて通ふなれども)親にしらるゝとも、夜あけて後歸らむとなり、情の濃なる爲、露のしげき道をゆくに、いとゞ、たゆたはるゝさまの歌を、思ひ合はせて女の方に心の残りたるけしきなり〇わが方 禁中の宿直所にかへり來しなり〇露をあはれと「おきてゆく人は露にもあられども、今朝は名残の袖もかはらず」この寝ぬるあしたの原の露けさは、起き別れつる泪なりけり」など後の歌なれどあり、起き別れゆきしをあはれと思ふを「露をあはれ」と、自身に引き比べ見居るさまなり〇ほうに これあるにより、前の「細塗骨など骨はかはれど」は、朴、ぬり骨など骨はかはれど、なる事、明かになりたり〇たう紙 檀紙の大きなるを二つに折りて懐に入れおき、物書くにも他の事にも用う懐紙なり、それを細く切りたるが後世の短冊のもとなり、こゝは細く切りたるなり〇花か 赤花にてそむ、茜色なり(赤花は薬草の名、莖の高さ一尺ばかり、葉は狭く長く鋸齒ありて對生し、夏に至りて色、深紫に變ず、花の大き二分余、四瓣にして色紅なり)〇べに

御疎遠で」など、ちよいと恨みつばく言つて見る中に、夜が明け切つて人の聲がしたり、日も出る頃となる。(折角)霧の絶間の見えない中にと、いそいで歸つて来た効もなく、こんな事で女にやる文が後れるのだらう(と人の事でも氣になる)。こゝから出て往つた人は、もう疾うに、露のまんまの萩に、文をつけて、よこしてあるけれども、(使がこゝに居る男に遠慮して)主人に渡さない。(その文に)香を澤山たきしめてあるのが、誠にしやれて居る。余り明るくなるので、男はそこを出て、自分が別れて来た女の處でも、かうして、自分の文を待つて居やうと、思ひやられるのも、おもしろからう。

紅花にて染めたる色、紅花は古くは「クレノアキ」約めて「クレナキ」。草花にて莖の高き三五尺、莖と葉にとげある事薔のやうなり、葉は互生し、細長くして二寸より四五寸、黄緑色なり、仲夏、枝の末ごとに花をつけ、薔の花に似て紅く黄なり、瓣を摘みて紅に製す、されば末摘花の名あり○長押 こゝも下長押なり(数居の下に、別に横に、長く互せる木)○おしかり 賈子(縁)より長押をかけて寄りか、りたるさまなり○名殘 女の男にあひたる餘波なり○もどかしさに「さ」にある「に」の字の爲に意味解し難くななり「さよ」とあらば前の「れたうも見えぬるかな」の心持に副ひたる返辭となるべし、さらば「私の寢坊よりも、そんなに露のおくより先に起きて来た、あなたの薄情が、人の事でも憎らしい」の意となりて、よく通するなり、例の寫し誤りなるべし○打ちかすめ恨み この詞は恨むべき事を、俗に「こんがり」いふに用うるならば當れり、されども、こゝは恨むべき節はなくて、ただ戯れに恨みほくいふなれば、やゝ當らぬ詞なり、「戯れ恨み」などあるべき處か○きりの絶間見えぬほどに 日出てぬ先をいふ、朝ざり處々されて、やがて日出づるなれば、それより先の早朝なり○うしろめたけれ 後眼痛けれなり○香の香「かう」は名詞、「か」はそのにほひなり○かをり かをらん、かをり、かをる、かをれの四段活用動詞を、名詞にいひすゑたる詞なり、たきらん、たざり、たざる、たざれの四段活用動詞を「濫」といふ名詞に、いひすゑると同じ。この一章濃艶限りなく、爲水の作を讀むやうなり。

木の花は、

濃くも薄くも、梅は紅梅(がよい)。櫻は花瓣が大きくて、葉の色の濃いのが、細い枝に咲いて居る(のがよい)。藤の花(は)、長くしだれて、色が美しく咲いたのは、たまらなくよい。卯の花は品が下つて、格別なものではないが、咲く時節がおもしろく、杜鵑が、(この)かけにかくれるだらうと思ふと、まことによい。祭の歸りに、紫野近所、つまらない家のぼさくした垣根などに、眞白く咲いたのがおもしろい。麴塵の袍の上に、白い單衣を着たやうで、又、青朽葉などにも似て、おもしろい。四月の晦日か五月のついたち頃、橘の葉が眞青で、花が眞白く咲いたのに、雨のふつた朝早くなどは、比

木の花は

木の花は、

梅の、濃くも薄くも紅梅。櫻の花瓣大きに、葉色濃きが、枝細く咲いたる。藤の花、所垂長く、色美しく咲いたる、甚愛たし。卯の花は、品劣りて何となけれど、咲く頃の興しう。杜鵑の蔭に隠るらんと思に、甚興し。祭の歸途に、紫野の邊近き賤の家ども、榛莽なる垣根などに甚白う咲いたるこそ興しけれ。麴塵の袍に、白き單襲ね被きたる、青朽葉などに似て、甚興し。四月の晦日、五月の朔日などの頃、橘の濃く青きに、花の甚白く咲いたるに、雨の降たる早旦などは、世になく風趣ある容に興し。花の中より實の黄金の玉と見て、甚く顯著に見たるなど、朝露に濡たる櫻にも劣す。杜鵑の寄處とさへ思はにや、猶更に言べきにもあらず。梨の花、世に無興く奇き物にして、目に近く、些き文付けなどたに爲す、愛嬌後れたる人の顔など見ては譬に言も、實に其の色よりして、愛なく見るを、唐土に限なき物にて文にも作るなるを、

べるものゝない風致がある。又、その花の中から、黄金の玉のやうな實が、くつきりと眼立つて居るなどは、朝露にぬれた櫻にも負けない處か、杜鵑のたより處と思ふと、又一段、何ともいひやうがない(位、すきだ)。梨の花は無類に無愛嬌な、つまらないものときめて、よくも見ず、一寸した文でも、そんな枝にはつけた事がなく、つんとした女の顔を、この花にたとへるが、實際、色からしてが、張合のないつまらないものだと思はれるのに、唐土では、無上によいものにして、詩などにも作つてあるから、どこかによい所があるかと、よく見たらば、花びらの端の處に、美しい色がちよんびりついて居る。楊貴妃が、帝の御使に逢つて、泣

然とも有る様あらんとて切て見れば、花瓣の端に美き色こそ微く付たためれ、楊貴妃、皇帝の御使に逢て泣ける顔に似せて、梨花一枝春の雨を帶たりなど言たるは、臙氣ならじと思に、仍甚う愛たき事は儻あらじと覺たり。桐の花、紫に咲たるは仍興しきを、葉の擴り、形狀變てあれども、又他木どもと等う言べきにあらず。唐土に事々しき名付たる鳥の、此にしも栖らん、特殊なり。況て琴に作りて、種々なる音の出で來るなど、興しとは通常に言べくやはある。甚うこそは愛たけれ。木の狀ぞ惜げなれど、柗の花甚興し。枯花に特殊に咲て、必ず五月五日に逢も興し。

卯の花 枝、幹の中、空なる故、空木といふ、灌木にて、葉は細く狭く鋸齒あり。夏の初めに五瓣の白花、五六寸の穂をなして開く、この花咲く故、四月を卯月といふ。○まつりのかへさ たゞ祭といふは四月中の酉の日の賀茂祭をいふ、齋院、糺の下の社より上賀茂の上の社に参向、神館に一泊し翌日紫野なる齋院御所に歸る、その時の行粧を見物に出づる人、亦多かりしなり。○紫野 京都一條以北、上賀茂、下賀茂、糺の森、大徳寺などあるほとりの野。○あをいろ 黄の勝たる青色。織物ならば、經青、緯黄。○ひとへがさねかづき 一本、白きひとへ、重ねて着たる。

いた顔にたとへて、「梨花一枝春帯雨」など言つたのも、なるほど、やつぱり美しさは無類なのだと思つた。桐の花の紫色に咲いたのは、やはりよいが、葉のひろがり方が氣に入らない。でも他の木とは、ちがつた風情がある。唐土の、大げさな名のついて居る鳥が、この木にだけとまるのも、格別おもしろい。まして琴に作つていろ／＼の音が出て來るなどは、通り一遍に、おもしろい位では足りない、恐しく結構なものだ。木振は憎らしいけれど、樽の花もまことによい。ひからびたやうな一風變つた花びらで、きつと五月五日の節句に咲いて居るのも、おもしろい。

とあり整ひたる書きざまなれど、この書のにても、「白きひとへ、かされかづきたる」と見ればよかるべしと、さやうになしたり。○青くち葉 落葉の朽ちたるやうの色。かされれば表黄、裏青。おどろなる垣に眞白き卯の花の咲きたるは青朽葉(生垣の黄ばみたる若葉)に白きひとへをかされたるやうなりの意。○橘 第十一代垂仁天皇の時、田道間守、天皇の意を奉じ、常世國(底依の國の轉、海路遙にして容易には往き難きの意)に到り香葉を得て歸りし時は、すでに十年の歳月を経て天皇崩御の後なりしかば、山陵を拜し働哭して絶す、景行天皇その忠誠をあはれみ先帝の伏見陵の墓側に葬らせらる、香葉は橘なり、天平中、葛城王等に橘姓を賜ふ御製(聖武天皇)に、「橘は實さへ花さへその葉さへ、枝に霜ふれど、いや常葉の樹」と詠ませられ、民間にも多く植ふたり、ことに紫宸殿には階の兩側に左近(衛)の櫻と右近(衛)の橘とて一樹づ、植ふられ、香り高き花と實を非常に珍重せられたり、實は金柑よりは大きく、七八分にて蜜柑の如く、蜜柑よりは皮薄くて中の數箇のふくろの分れ目、外より見ゆ、葉の色、深緑にて艶々しく、花は白くて香り高し、田道花の意にて名づけたるなるべし。○濃く青き 此の上に「葉の」の意あり、一本「葉は、いと濃く青きに」とあり、これならばよく聞えたり。○かねの玉と見えて一本「かねの鈴かと、いみじうきはやかに、」鈴の方おもしろし、いづれが清女のまことの筆なるべき、かやうの事多々あるは、この枕草紙なり(はしがき参照)。○にほひ 眼にて見る美しきさまをいふ、「かねり」は鼻にて、かぐ方なり。○楊貴妃 唐の玄宗皇帝、楊家の女を後宮に入れ寵甚しく、春宵短きを苦み、日高く起き、政をかへり見ず、安祿山兵を擧げて叛くに及び、玄宗、貴妃を伴ひ蜀に遷幸す、兵士貴妃を惡み玄宗の令に従はず、貴妃を殺さば命を奉ずべしといふ、玄宗やむを得ず貴妃を出す、兵士之を馬鬼に縊殺す、玄宗、道士に貴妃の魂魄の在る所をもとめしめし

に、道士、貴妃の金のかんざしを持ち歸り、つぶさに貴妃のあり様を報告す、その詞の中に「玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶雨」と貴妃を形容していひあり。眞白に、や、厚みある花瓣の縁に、薄紅の色のつきて、艶あるさまは、まことに近勝りする花なり。事しき名つきたるとり、鳳凰をいふ、支那にて想像の瑞鳥。天下道あれば現はるといふ、龍と同じく不思議なる形を捏造せるものなり、鶏頭、蛇頭、燕領、龜背、魚尾、羽に五彩の色文を具す。〇あふち、一名勝池、南天竺に生ずる香木の名、黒きを紫檀、白きを白檀といふ、高さ丈余、葉は南天に似て鋸齒あり五瓣の淡紫の花朶り開く、大きき錢の如し、五月の服を、この花の色と同じく極めて淡き紫に染め、裏を背にして着用す、又紫の紙に、この花を包む事も下文に見えたり。

池(で、おもしろい)は、

勝間田の池。磐余の池(だ)。にへ野の池(は)、初瀬に参詣した時、水鳥がひつ切なしに立ち騒いで居たのが、たまらなくおもしろかつた。水なしの池(は)、なぜ、そんな變な名をつけたのだらうと言つたらば、五月など、すべて雨が澤山降らうとする年は、此の池に水といふものがなくなつてしまふ。又非常に早魁(かんぱつ)な年だと、春の初めに水が澤山出るといふ事だ。まるでひから

池は、

勝間田池。磐余池。にへの池。初瀬に詣しに、水鳥の間斷なく立ち騒しが、甚興しく見しなり。水なしの池、奇う何て命名けるならんと言しかば、「五月など惣て雨甚く降んとする年は此の池に水といふもの無くなんある。又日の甚く照る年は、春の初に水なん多く出ると言しなり。無下に無く乾きてあらばこそ然も命名め。出る折もあるなるを、一筋に命けるかなと答ま欲かりし。猿澤池。采女の身を投げるを聞き召て、行幸などありけんこそ甚う愛たけれ、寝顔髪をと人丸が詠けんほど言も愚なり。御前池、又

びて居るなら、さうつけてもよいが、出る時もあるのに、なぜそんな名をと言ひたかつた。猿澤の池は、采女が身を投げたとお聞きになつて行幸があつたのは、大層よい事だつた。寝くれたれ髪をと、人丸が詠んだ事も、勿論よい。おまへの池といふのは、又、どういふ氣でつけたのだらうと、おもしろい。鏡の池、狭山の池なども、おもしろい。(狭山の池は)みくりといふ歌がおもしろく思はれるのだらう。こひぬまの池原の池も、(原の池は)玉藻は、なかりそと詠んであるのもおもしろい。ますだの池も(おもしろい)。

云々とあり、東大寺にゆく路にありたりと見ゆ〇むげ 無下の意なり、無上に同じ〇初瀬 大和初瀬にある 長谷寺十一面觀世音をいふ、徳道上人の造立、天平五年五月十八日開帳、導師は行基菩薩なり、登廊あり巾廣く屋根あり金燈籠所々に垂る、古へより諸人参籠して冥助を祈る、源氏物語に夕顔上の侍女右近がこゝに参籠して、夕顔上の娘玉かづらにめぐり會ひし事などあり(長々と

何の意に命けるならんと言し。鏡池。狭山池、みくりといふ歌の興しく覺るにやあらん。こひぬまの池。原の池、玉藻は勿刈そと言けんも興し。ますだの池。

勝間田の池 大和薬師寺のほとりにありしことし「古歌枕」「袖中抄」等にもいろいろの説ありて分明ならず、萬葉に「かつまたの池は我しる 蓮なし、しかいふ君がひげなきがごと」又新拾遺寂然法師の歌に「勝間田の池の心はむなしくて、水も水も名のみなりけり」などいひあり、すべて昔は、初め詠み置きし人の心眞似て、實景を見ず、よむ事多ければ、初めに蓮なしとあるにちなみて「勝間田の池」とよむには、すべて「なし」とのみいひあり、それらの古歌を思ひ、名も「且つ未だ」などの詞をおもひよせて、おもしろさ中に擧げたるべし〇いはれの池 大和香久山の東にありしもの。後拾遺集に素意法師「いはれの萩の朝露わけゆけば、戀せし袖の心地こそすれ」續拾遺集に「萩が花誰にか見せん鶴なく、いはれの野への秋の夕暮」などありて、いはれ野もそのほとりなりしが如し、履仲天皇の御代の築造にて「地安の池」ともいふ萬葉に「はに安の池の堤の隠れ沼(草など茂りて水の見えぬをいふ)の、ゆくへをならす舎人はまどふ」〇にへの池 更科日記(後一條天皇時代、菅原孝標の女の紀行)に「供なる者ども、高名の栗駒山にはあらずや」中略「その山越え果て、贊野の池のほとりへ、いきつきたるほど、日は山の端にかゝりにたり」

書きて「ハセ」とよむ事、初瀬にある長谷寺を單に「ハセ寺」といふに起因せるなるべし。○水なしの池 耳無池ならんといふ説もありげなれど、下文を見れば水なしなる事明けし、その頃ありし池なるべし。○猿さは池 大和奈良の興福寺の南にあり、天然の淵池を移せしよりの名といふ。大和物語に「むかし奈良のみかどに仕うまつる采女ありけり、かほかちいみじう清らにて、人々よばひ、殿上人などもよばひけれども逢はざりけり、そのあはぬ心は、帝を限りなく、めでたきものになん思ひ奉りける、帝召してけり。さて後、又も召さざりければ限なく心うしと思ひけり、中略世に經まじき心地しければ、夜みそかに出で、猿澤の池に身を投げてけり、かく投げつとも帝は得知し召さざりけるを、事のついでありて人の奏しければ聞し召してけり、いといたうあはれがけり給ひて、池のほとりに、おほんみゆきし給ひて、人々に歌よませ給ふ、柿本人麿「わさも子が寝たれ髪を猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しき」とよめる時に帝、「猿澤の池もつらしな、わさもが玉藻かづかば水ぞ干なまし」とよみ給けり。さてこの池に慕せさせ給ひてなん歸らせおはしましけるとなん」とあり、采女の祠と衣掛柳、池の傍にあり、傳説をおもしろく思ひて、帝（持統天皇か）の行幸ありしなるべし、（采女は天皇の御饌を掌る女官、柿本人麿は持統文武の兩朝に仕へたる有名の歌人なり、萬葉集に多く入りたる中に「ほのゝ」とあかしの浦の朝霧に、鳴がくれゆく舟をしぞ思ふ」の歌は人口に膾炙し、明石浦には人丸社あり。○おまへの池 その頃ありしなるべし、所在不明。帝、後の御前などいふに思ひよせておもしろく感ぜしなるべし。○かやみの池 大和法隆寺（用明天皇の皇子、聖徳太子、大和いかるがの地に造立せしめられしもの）にあり、美濃に各務郡といふ處あれば、そこなるべしとの説もあれど、佛法興隆の時代、こゝには清少も折々參詣して池をも知りたるべし。○狭やまの池 武藏にあり、六帖に「むさしなる、さ山の池のみくりこそ、引けば絶えずれ、われやたえする」「みくり」は三稜草の字を當つ、春、水邊に叢り生じ莖の高さ三四尺、端に數葉を生じ穂を成して細かき花をつく、黄紫色なり、莖、葉、花、實ともに三稜ありて櫻欄の葉、莖に同じ。○こひぬまの池 これも「戀沼」「戀ひぬ間」などの名をおもしろく思ふなるべし、いづこにありしか、不明。○はらの池 武藏なる幡羅郡の池か、京都にもありしか。○玉藻はなかりそ 風俗歌に「鶯鶯たかべ（小鴨）鴨さへ來居る、はらの池のや、玉藻は眞根な刈りそや、生ひも續ぐがにや、生ひも續ぐがに」とあり、（いづこ）の鳥の集り來居る、はらの池の藻の根を刈らない方がよい、根さへあれば、あとから／＼又はえらから）「眞」は美稱なり。○ますだの池 大和久米寺のほとりなり弘法大師の碑銘あり、後拾遺集に「我が戀はますだの池の浮き草、くるしくてのみ年をふるかな」（繩といふ故、くるとかけたり）。

節は、

五月が一番よい。菖蒲、蓬などの香り合つたのも、たまらなくおもしろい。宮中は更なり何でもない民の家まで、わきより余計にと競つて、屋根に（菖蒲や、よもぎを）葺き並べたのが、他の節句にはしない事で、どうでも珍しい。入梅の頃とて、空はすつかり曇つて居るのに、後の宮などには、縫殿から、御薬玉に、いろ／＼の美しい糸を組み下げて、さし上げるのを、御帳台をすゑ申す母屋の柱の左右に下げた（のが美しく晴々しい。）（去年の）九月九日の（菊の節供の）菊を、綾と生絹の絹に包んでさし上げた薬玉が、それからすつとその柱に結びつけてあるのを、菖蒲のと、とりかへて捨てるらしい。又この菖

せちは、

五月に如はなし。菖蒲、蓬などの香り合たるも、甚う興し。九重の内を初て、言ひ知ぬ民の住家まで、如何で我が許に繁く葺んと葺き渡したる、仍甚珍く、何時の他折は然は爲たりし。空の氣色の曇り渡りたるに、后宮などには、縫殿より御薬玉とて、色の糸を組み下て參せられたれば、御几帳上る母屋の柱の左右に付たり。九月九日の菊を綾と生絹の絹に包て參せたる。同じ柱に結び付て月頃ある薬玉取り替て捨める。又薬玉は、菊の節まで在べきにやあらん。然ど其は、皆糸を引き取て、物結などして、少時も無し。御節供食り、若き人々は、菖蒲の挿櫛挿し、物忌付けなどして、種々唐衣、汗衫、長き根、興しき折枝ども、村濃の組して結び付などしたる、珍う言べき事ならねど甚興し。さて春毎に咲とて櫻を尋常思ふ人やはある。辻歩く童女の、分際に付ては、甚き事したると常に袂を目成り、人に見比べ得も言ず興あり

蒲の薬玉も、菊の時分まで、かけて置くのがほんとうだらうけれども、これは、皆な、糸を抜き取つて物をしばつたりして、ちぎになくなる。御節供の御膳をさし上げ、若い女房達は、菖蒲を飾つた挿櫛をさし、物忌をつけたりして、いろ／＼の唐衣や、(童女の)汗疹に、(菖蒲の)長い根や、作り花の枝などを、村この組紐で結びつけたりする。毎年の事をいふでもないが、全くおもしろい。それは、毎年咲くからと、いつて、櫻をおろそかに思ふ人のないと同じ事だと思ふ。町を歩く女の子が、それ相應に、きれいな事をした袂を見ては、人のと見比べ、堪らなくうれしうにして居るのを、いたづらな小舎人童などに、むしりとられて、泣くのも

九六
と思つたるを、戯たる小舎人童などに引き奪れて泣も興し。紫の紙に栲の花、青き紙に菖蒲の葉、細う巻で引き結び、又白き紙を根にして結たるも興し。甚長き根など、文の中に入などしたる人どもなども、甚艶なる返事書んと、言ひ合せ語ふ同志は、見せ合せなどする興し。人の女、貴き處々に御文聞え給ふ人も、今日は特殊にぞ優雅しう興しき。夕暮の程に、杜鵑の名告したるも、惣て興しう甚し。

節 節供(住節に供する供御)なり、正月七日(人日)三月三日(上巳)五月五日(端午)七月七日(七夕)九月九日(重陽)をいふ、又一月を七種の節供、三月を桃の節供、五月を菖蒲の節供、七月を七夕の節供、九月を菊の節供ともいふ。さう藤古名あやめ、水澤に生ず、長さ四五尺にして香氣多し。よもぎ 山野に自生する草、葉は分れて五つに尖り面は深みどりにて背に白き毛あり若葉は餅に和して食ふ、葉の背の白毛をとりて、もぐさに製し又印肉を作る料とす。種々の「メヒドノ、ツカサ」古へ中務者に属せる寮、衣服裁縫を司る。おん薬玉 香料を包みたる玉のまはりには造花をつくるなり、端午(五月五日)には菖蒲、よもぎ、重陽(九月九日)には菊をつけて五色の飾り糸を下げ柱簾などに掛け替ゆ。綾と生絹 生絹の上を綾にて包むなり「あやしきすまし」とある本多し、取らず。物いみ 紙又はきれに物忌とかきて、挿櫛烏帽子などにつくるなり。むらごの組 叢々と處々濃く染めあるにて、今

おもしろい。紫の紙には栲の花(をつつみ)、青い紙に菖蒲の葉(を)細く巻いて、上をしばり、又白い紙を、(菖蒲の)根に見せて巻いたのも、おもしろい。恐しく長い根などを、文の中に入れてよこす人なども(ある。それに)しやれた返事をかゝうと、仲のよい友だちなどは、見せ合て相談するのもおもしろい。人の娘の處や、高貴のそこここに、お手紙をお上げになる人も、今日は格別風雅になさつておもしろい。夕方杜鵑が啼いてゆくなども、すべて實におもしろい限りだ。

木は、
かつら。五葉。榊。橘。がおもしろい。そばの木は下品なやうだけれど、木の花が皆な散つてしまつて一たいに真青

のぼかし染なり、叢叢に染めたる組紐。いみじきわざしたると 市井の童女の袂にも、薬玉、又は、棟、橘、つ、ごなどの折枝、もしくは造花をつくるなり。小舎人童藏人所に属して使用に供する者。紫の紙に淡紫の棟の花をつみ、青き紙に菖蒲の葉、その下を白き紙にて根の如くまくなど、まことに我が國は昔より趣味の國なり。いと長き根 菖蒲をもてはやすより、ひきて、その根の長さを競べ合ふ根合せといふ遊びも出て來りたり(根の上に和歌を記し長短を合せ見て勝負を定む)なほ菖蒲の櫛、菖蒲のかづら、菖蒲の輿、菖蒲刀等さまざまつくりて玩賞したり。ほと、ぎすのなりのり、こゝにこれを言ひたるは、美人か畫くに眼晴を點じたるやうなり。

木は、
桂 五葉、柳、橘、榊、卑近き心地すれども、花の木ども散り果て、總て緑になりたる中に、時も分す濃き紅葉の艶めき

な中に、常住真赤な葉がつや／＼と、思ひもかけず青葉の中から眼立つて見えるのが珍しい。檀は言ふまでもなく、(結構な木だ。それから)大したものではないが、やどり木といふ木の名が、まことにおもしろい。榊は、臨時の祭だの、御神樂の時など、まことによい。多くの中で、この木だけを、神の御前のものといひ初めたのも、格別おもしろい。樟は、たくさん木のある處にも、めつたとなく、氣球い深山にだけ立つて居るのも氣味わるいのに、千枝に分れてなど、戀する人の心に比べて詠まれたのは、誰が(千本など、枝の)數を算へて言ひ出したのだらうと、おもしろい。檜は(これも)人眼に遠い山奥の物だけれど、三つ葉四つ葉の殿造

て、思ひかけぬ青葉の中より差し出たる珍し。檀、更にも言はず。其の物ともなけれど、宿木といふ名甚興味なり。榊、臨時祭、御神樂の時など甚興し。世に木どもこそあれ、神の御前の物と言ひ初けんも取分き興し。楠木は木立多る所にも、殊に交ひ立らず、過大しき想像など疎しきを、千枝に分れて戀する人の例に言れたるぞ、誰かは數を知て言ひ初けんと思に興し。檜、人近からぬものなれど、みつば四つばの殿造も興し。五月に雨の聲真似ぶらんも興し。榎の木、細小なるにも萌え出たる梢の赤みて、同じ方に差し擴りたる葉の體、花も甚矮小氣にて、虫などの枯死たる如にて興し。あすはひの木、此の世近くも見え聞ず。御嶽に詣て歸る人など、然持て歩くめる。枝容などの、甚手觸れ難氣に荒々しけれど、何の意ありて、あすはひの木と名け、ん、味氣なき豫言なりや。誰に頼めたるにかあらんと思に、知ま欲う興し。鼠梓木の木、普通なるべき體にもあらねど、葉の甚う細に小さき、興

りもおもしろい。五月雨の時分に(枝葉が繁つて、しづくが、いつまでも垂れて)雨の聲をまねるのも、おもしろい。楓の木は、小さな中から、出かかつた梢が赤るんで、同じ方に、ひろがつた葉の様子(がおもしろく、)花も至つて、はかなげで、虫の死んだのでも、ひからびついたやうで、おもしろい。あすはひの木は、世間離れがして、御嶽に參詣して歸る人などが、それだと言て持ち歩く。どういふ氣がして、あすは、ひの木といふのだらう出来もしまい事を、あてにもならない約束だ。誰にした約束だか、聞きたく、おもしろい。ねずもちの木は、木の仲間数へるものでもないけれど、葉が、やたらと細かく小さいのが

しきなり。栲の木。山梨の木。椎の木は、常盤木は孰もあるを、其しも、葉代せぬ例に言れたるも興し。白樫などいふもの、況て深山木の中にも甚氣遠くて三位二位の袍染る時ばかりぞ葉をだに人の見るめる。愛たき事興しき事に取り出べくもあらねど、何時となく雪の降たるに見紛られて、素盞鳴尊の出雲國に在しける御事を思て、人丸が詠たる歌などを思に、甚う興なり。言ふ事にても、時に就ても、一節恰とも趣致しとも聞き置つる物は、草も木も鳥、虫も、疎にこそ覺ね。樺の甚う房やかに艶めきたるは、甚青う清氣なるに、思ひ懸す似べくもあらず莖の赤う光々しう見たるこそ、賤しけれども興しけれ。並ての月頃は、露も見ぬもの、十二月の晦日にしも時めきて亡き人の食物にも敷くにやと哀なるに、又齡延る齒固の具にも爲て用ひたんめるは、如何なるにか、紅葉せん世やと言たるも頼し。柏木甚興し。葉守の神の在らんも甚畏し。兵衛佐尉などを言らんも興し。姿態なけれど、

よい。樗の木(も)山梨の木(も)おもしろい。椎の木は、たくさん常盤木の中で、それだけが葉代しないもの、例に言はれたのも、おもしろい。白樫など、いふものは、深山木の中でも、一層世間ばなれがして、三位とか二位とかいふ人の、袍を染める時だけ、葉ばかりも人が見るんで、よいとか、おもしろいとか、いふ程のものでもないが、何時頃からか、雪の降つたのを見紛へられて、すさの尊が出雲國に居らつしやつた御事を思つて、人まらがよんだ歌などを考へると、ひどくおもしろい。すべて世に言ひ傳はる事でも、又何かの折にあつた事でも、一節感心したりおもしろいと聞いておいた事は、草でも、木でも、鳥でも、虫で

梭欄の木、唐向て賤き家の植樹とは見す。

かつら 香連の義か、楓の類にして材、用うべし、古名乎加豆良○五葉 葉の形細く短く柔き五つ葉の松○やなぎ 鬮長木の義かといふ、水のほとりに生じて成長し易し、樹高く枝皆垂る、葉は厚く、花黄、實に架ありて風に飛ぶ、柳絮といふ○そばのき 花白く蕎麥に似たればいふか、山に生ずる木の名、葉は櫻の如く、花は白く水仙に似、夏の初めに簇り開きて雪の如し○まゆみ 眞弓の義、弓を作るによき材、灌木にして高さ丈余、春、淡緑色の四瓣の小花を開き、秋、平たく尖りたる二分ほどの實を結ぶ、熟して微紅となり自ら裂けて紅肉を現はす、冬の初めに葉、紅、又は紫に染みて美し、東國にては錦木といふ○やどり木 又「ほや」「ほよ」などいふ、松、柳、梅、桑、樺等の枝節の間に生ずる特種の木。枝葉を生じ實をも結ぶ、自然に生ずるとも、或は鳥、他樹の子を落せるより生ずるといふ○榊 専ら神事に用うるにより神木の合字なり、常盤木にして枝葉繁く、葉は楕に似て小さく深青にして香なし、緑白の花を開き實赤し(今榊として用ゐるは、拾 なり、榊より小さく葉は茶の葉に似て花白く小さく實、赤黒なり)○臨時祭 山城賀茂上下兩社の十一月の祭(四月の恒祭に對していふなり、五十八代光孝天皇御即位前、賀茂明神冬のみじくつれゝなるに祭り給はらむ)と託宣ありしにより、御即位後十一月終の西の日に臨時の祭を奠め給ひたり)と同じく石清水八幡宮三月の祭(六十一代朱雀天皇の時、平將門、藤原純友の亂の平らぎし時、臨時の祭を行はせられしに奠まる)をいふ、共に神樂あり、樂人榊もちて舞ふ○お神樂 内裡、豐樂院の清暑堂にて毎年行はれしを、この(一條天皇の)御代より又内侍所にて隔年十二月に行はる、事となりたり、いづれも榊もちて舞ふ、點燈の時に初まり鶴鳴の頃終る、庭上に庭燎

も、よいかげんには思はれない。樗が、房々と艶よく、眞青で清らかなのに、思ひもよらず莖が赤く光つて居るのは、下品だけれども、おもしろい。外の月には、一向眼立たない木が、十二月の晦日にだけ、時めいて、精靈に供へる食物をのせるものになるかと、あはれだのに、又反對に齡を延べるといふ齒固の時の役にも立つのは、不思議だ。(そして)、又、「紅葉せむ世や」と歌にあるのも頼もしい。柏木は、まことによい。葉守の神がお宿りになつて居るのも、ひどく畏れ多い。兵衛佐や兵衛尉などを、別名に柏木と、いふのもおもしろい。無骨だけれども、櫻の木は唐めいて、下賤の家のものとは見えない。

(かゞり)を焚く○神のおまへのもの 神樂神の曲に「榊の香をかぐはしみ、とめくれば八十氏人ぞ團居せりける」神垣の御室の山の榊葉は、神の御前に茂り合ひにけりなどあるをいふ(榊を持ちて舞ふ事は、神代に天照大神の岩戸にかくれませし時、天の御女命、榊を持ちて舞ひ大神の御心を和らげしに初まる)○くすのき 榊木にて、春、新葉出で、後、古葉落つ、夏小さく白き花開き、秋圓き實を結ぶ、熟すれば黒くなる、それより蠟をとりに幹の心の赤黒き處を煮て樟腦をとる○千枝に分れて 六帖に「和泉なる信田の森の楠の木、千枝にわかれて物をこそ思へ」(信田の森に大楠ありしなるべし、その楠の千枝に分れたる如く、さまざまに物を思ふとなり)○榊 今もよき建築はこれを多く用う、みつばよつばは屋の端の三つま四つまにて棟敷の多きをいふ「この殿は宜も富みけり幸草の、三つば(葉)にかけていふか)四つばに殿造りして」○かへて「かへ(このて相)とある書もあれど、かへてとあるにてよろしかるべし、初めより梢の赤みたるも、一方に枝の伸ぶるさまも、花の、蟲のひからびたるやうなるも、すべて、かへての初生のさまなり○あすはひ 榊葉なり榊に似て葉粗大、冬も萎まず、「明日は榊」の意なり、又、明日は榊にならんの意にて「明日爲らう」の名もあり、誰がつけしか、まことにおもしろき名なり○御繼 大和國吉野の金峯山をいふ、數日前より精進して詣でしなり○たのめ たのまするなり、こなたにてかうするといへば先方の人あてにするなり、あすは榊の木になるなど、誰に咄して、あてにさせたのだからうとなり○ねずもちの木 鼠梓木、女貞など書く、灌木にして庭に植ふ又籬とす、葉は榊に似、厚くして光あり、冬枯れず、夏、枝の先に四五寸の穂を生じ枝を分ちて白き花を開く、大さ三分ばかり、實は鼠糞に似、葉は冬青に似たればいふか○やまなしの木 野生の梨にて枝に刺多し實は大なる棗の如く酸く遠く食ふに堪へず、たゞ聖靈祭りに供ふ、

故に聖靈梨とも、又小林檜ともいふ。○樅の木 喬木にて山中に生ず、葉は櫛に似て狭く長く面は深緑、裏は褐色、花は尾の形して淡黄、實は「しひのみ」、味良し炒りて食ふ(櫛の實はどんぐり)、食ふべからず。○葉代へせぬ 落葉せぬなり、昔より椎を葉代へぬものと歌に詠みならびたり、後拾遺集に「年をへて葉がへぬ山の椎葉や、つれなき人の心なるらむ」の類、(椎葉は椎の木の叢立たるをいふ)○白かし 葉狭く小さくして椎の如く鋸齒なり、喬木にて赤櫛よりも材堅く舟車を造るによし、材の色白く、實は赤櫛のより苦み少くて食ふべし。○三位二位のうへのきぬ 一條天皇の寛弘以來、四位以上は皆黒袍になりて之を櫛の衣といふ、櫛にて染むる故なり(櫛はどんぐりなり、櫛の實)○葉をだに だにとあるを見れば、白櫛の葉のみにて、この頃染めしにか、つるばみに葉の交りたるを見て、木を見れば、いひしか○すざのをの藤云々 萬葉集に「足引の山路もしらす白櫛の、枝もとを、に雪の降り、ば」とありて、左註に「柿本人麿之歌集」出づとあり、拾遺集には「枝にも葉にも」となりて同じく人麿として入りあり、されども、すざのをの尊の出雲に在しける時の事をよめるとは見え、古事記にも日本紀にも、すざのをの尊の條に、白櫛とも雪ともなし、清少が史實の學者といふにあらば、傳説などをきき、ていへるなるべし、一本には、「すざのをのみかどの、いづもの國におはしましける御ともにて、人まろがよみたる歌などを見るに」とあり、これは又甚しく時代を誤れるもの。(はしがき參照)「見まがへられて」の下に、すぐ「人丸がよみたる歌」とありて、よき處なり○ゆづりは 樹の高さ五七尺より一丈余に至るものあり、葉の形長く厚く葉赤し、夏小き白花を開く、實は豆に似て食用とならず、舊葉は春までもあり、新葉生ひて後に落つ、父の後を子の紹ぐに似たり、よりにて新年の儀に此の葉を用ゐて祝す○似るべくもあらず 一本「似るべくもあらず」この方よろし、されども「思ひもかけず」の下にすぐ「葉の赤う」とありてよき處なり○しはす 「歳終」の畧轉が、「爲果ツ」の意が、十二月をいふ○つごもり 月隠りの畧。陰曆にては月の末日に、月全く虧けて影なきに至る故にいふ○しはすの晦日 この頃は十二月晦日にも七月の盆と同じく聖靈を祀りしなり○くひ物にもしくはや 聖靈に供ふる食を、ゆづりには載せしと見ゆ、太古は、すべて食物を木の葉に盛りしにより祭祀にはなほ、もの、葉に盛りて供ふ、魂祭に、蓮の葉に飯を盛る事もその余習なり○齒固めの具にもして 齒を固むる意を齒固めといふ、元三の日に行ふ儀なり、古くは猪、鹿の肉など用ゐたりしを、後には押鮎、野菜、餅などとなり、それらをゆづり葉に盛りしと見ゆ「具」はそれに用ふる具なり○紅葉せむ世や 六帖に「旅人に宿すが野のゆづり葉の、紅葉せむ世や君を忘れむ」とあり、ゆづり葉の紅葉する事なきを言ひて誓へるなり○かしは木 柏なり、喬木にして葉の長さ六七寸、巾三四寸、くぬぎより大きなり、大木なれども材用に堪へず薪とす、古へは、この葉を食器とし葉盤、葉椀に作りたり○葉守の神のますらむ 後撰集に枇杷左大臣(仲

平)「ならの葉の葉守の神のましけるを、知らでぞ折りした、りなさるな」(なさは、あやしけれど集にかくあり)かしは木を一名「は、そ」それを「はうそ」といふ、「小はうそ」は櫛なり○兵衛佐、尉などを 右兵衛、左兵衛は、車駕の出入に、前後を護衛する武官の府、そこに屬する四等の官を督、佐、尉、志、といふ、諸門を守る左右衛門の官人を、歌には柏とよむ、神に供する柏にたとへて畏敬せるか。源氏物語に「柏木衛門督」とあるも、名の一つなも、おろそかにせぬ作者の用意おもしろし○する「しゆる」を音便にて柔かくいへり。

鳥は、

異國のものだけれど、鸚鵡は、まことに可愛い、人の言ふ事をまねをする處が。杜鵑。水鶏。鴨。みこ鳥。火繩などもおもしろい。山鳥は、友だちを戀しがつて鳴くといふから、鏡を見せたら慰みさうなのが誠にあはれた。谷を隔てゝ臥るといふのも氣の毒だ。鶴は様子が仰山で、(可愛いといふものではないが)、鳴く聲が空まで聞えるといふのが大層よい。頭の赤い雀。いかるがの雄。巧鳥(など)おもしろい。鶯は

鳥は

鳥は、

異國の鳥なれど、鸚鵡甚可憐なり。人の言らん事を真似ぶらんよ。杜鵑。水鶏。鴨。みこ鳥。鶉。火燒。山鳥は友を戀て鳴く鏡を見せれば慰むらん甚可憐なり。谷隔たる程など甚心苦し。鶴は誇張き状なれど鳴く聲雲井まで聞らん甚愛たし。頭赤き雀。班鳩の雄鳥。巧鳥。鶯は甚見る眼も醜し。眼皮なども憂て萬に懐しからねど、ゆるぎの森に獨は寝じと争ふらんこそ興しけれ。容鳥。水鳥は鴛鴦甚可憐なり。互に居代りて羽の上の霜を拂らんなど甚興し。都鳥。川千鳥は友纏すらんこそ。雁の聲は遠く聞たる興なり。鴨は、羽の霜、打ち拂らんと思に興し。鶯は詩などにも愛

見かけもいやだ。(きよとくした眼つきなども氣にくはなくて、何處に一つ懐かしげがないが、ゆるぎの森に一人は寝まいと、妻争ひするのおもしろい。はこ鳥もおもしろい。水鳥の中では鶯が、とりわけて可愛い。雄と雌が互に居代つて、羽上の霜を拂ひ合ふらしいのが、たまらなく、おもしろい。都鳥もよい。川千鳥は友を呼び纏はすが、情が深くてもおもしろい。雁の聲は遠くに聞えたのがおもしろい。鴨は、羽の霜を拂ふらしいのがおもしろい。鶯は、詩などにも結構なものとなり、聲は勿論、様子も、あれ位上品で美しいのではないに、なぜか禁中で鳴かないのは、まことにいけない。人がさう言つたのを、さうでもあるまいと

たきものに作り、聲より初て、形状容貌も、然ばかり貴に美き程よりは、九重の内に鳴ぬぞ甚拙き。人の然なんあると言しを然もあらしと思しに、十年ばかり侍ひて聞しに、實に更に音も爲ざりき。然は竹も近く紅梅も甚好く通ぬべき便なりかし。罷出て聞ば、賤き家の見所も無き梅などには花やかにぞ鳴く。夜啼ぬも寝汚き心地すれども今は如何せん。夏秋の末まで老聲に啼て、虫食など好もあらぬ者は名を命け更て言ぞ、口惜く凄き心地する。其も雀などやうに、常に在る鳥ならば、然も覺ゆまじ。春啼く故こそはあらめ、年立ち返るなど興しき事に、歌にも文にも作るなれば、仍春の内ならましかば、如何に興しからまし。人をも人氣なう、世の待遇侮はしうなり初にたる人をば、誇りやはする。鶯、鳥などの上は、見入れ聞き入などする人世に無しかし。然は甚じかるべきものとなりたればと思に、心適ぬ心地するなり。祭の歸路見るとて、雲林院、知足院などの前に車を立たれば、杜鵑

思つたが、上つて十年ほどにもなるが、ほんとうに、きいた事がない。尋ねて来る木がないかといへば、竹も近いし、紅梅も丁度、通つて来るのに都合よく有るのに、(なぜ来ないんだらう)。退出すると、下賤の家の、つまらない梅などには、花やかに鳴いて居る。又、夜、啼かないのは寢坊だと思ふけれども、もち前ならよん所ない。そして、夏どころか、秋の末まで、ぼけ聲でないて、下賤の者は、虫食など、呼びかへたりするのは、残念で無氣味だ。それが、雀などのやうに常住居る鳥だと、何とも思はないのだけれども、春なく鳥と、きまつて居るせいだらう。「年立ちかへる朝より、待たるゝものは」など、風情あるものに、歌にも

も忍ぬにやあらん啼くに、甚巧う真似び似せて、木高き木どもの中に諸聲に啼たるこそ有繋に興しけれ。杜鵑は猶更に言べき方なし。何時しか得意顔にも聞え、歌に卵の花、花橋などに宿をして、端隠れたるも憾氣なる性質なり。五月雨の短夜に寢覺をして、如何で人より先に聞んと待たて、夜深く打ち出たる聲の朧々じう愛敬づきたる、甚う心浮れ爲ん方なし。六月になりぬれば音も爲す成ぬる、惣て言も愚なり。夜啼くもの、惣て孰も孰も愛たし。兒們のみぞ然しも無き。

あふむ 南洋諸島及びオーストリアに産す、上嘴短かく大きく鉤曲し、下嘴短小、羽毛美しく性賢くして、よく人語を真似ぶ〇ほととぎす 山中の樹に棲み、夏の初めより秋の末まで啼く、その聲叫ぶ如し、啼聲を以て名づく、故に「おのが名をなめる」と詠める歌多し、頭、黒褐にうす褐色の斑あり、背は淡青にして黒褐の斑あり、喉は淡青に黄褐の横斑あり、卵を鶯の巢の中に生みて養はす「鶯のかひこの中の時鳥、子で子にあらぬ」などもいへり〇くひな 水禽なり、全身淡黒くして白き斑あり、翼黒く嘴は淡黒く、目の上より頬をめぐりて灰赤にして淡黒き横文あり、脚長く大きなり、夏、秋の頃、田澤に居り、鳴く聲、人の戸を叩くに似たり、故にそのなくを「叩く」といふ〇しき 形くひなに似て小さく胸腹白し、羽音の繁き

文にも作る位だから、やつぱり春の中だけ啼いた方が、どんなにかよからう(と思ふ。けれども、たとへていふと)、人間でも、落ちぶれはて、世間中から馬鹿にされて居るやうな人の事は、誰も齒牙にかけないやうに、鳶や鳥の事には、誰も眼も耳も立てない。非常によいものと極つて居る鳶だから、こんな不足も言ひたくなる。(四月に)祭の歸りを見やうと、雲林院、知足院などの前に、車を停めて居ると、杜鵑も、場合がら、浮かれると見えて、(五月でもないのに)啼くと、(鳶が)、よい聲で高い木の中などで、一緒になつて啼くのが、(期節外れは、いやだけれども)、さすがにおもしろい。杜鵑は無論よい。待ちかねたやうに、少し早め

故の名か、夏秋の候、田澤に居る、「鳴の羽根掻き百羽掻き」などいふ〇みどりミドリ鳥を字義にていへるなるべし、雀に似て黄赤く翅に黒き斑あり、小鳥にて山林に棲む、眼に菊座の如き黒あり〇火たき 大きき雀の如く頭黒くして白き細斑あり背、翅、灰赤にして黒き斑あり、翅の上に白羽黒羽層々し背、脚、蒼黒なり、秋の末来りよく轉る、聲清亮なり〇やまどり 雉子に似て大きく全身黄赤にて赤黒の斑あり頭に冠毛あり尾は雉子より長く、黄赤にして粗き黒斑あり、雌も尾長し、山に居て能く他鳥と闘ふ〇鏡を見すれば 支那の傳説に、昔ある王、山にて鷲鳥を獲、これが聲を聞かんとするに三年啼かず、その夫人の「鳥は類を見て鳴く」といふに従ひ、鏡を見せしに、哀音高く啼きて息絶えたりとあり、わが國にて山鳥と譯したるなるべし「山鳥の尾る(尾の事、ふはそへ詞なり)の極尾に鏡かけ」などいふ〇谷隔てたるほど 雌雄谷を隔て、臥すといふ、これも傳説なるべし、「山鳥の尾上隔て、」などいふ〇雲居まで 「鷓九阜に鳴きて聲、天に聞ゆ」などいへり(阜は澤なり)雲居は雲の居る天なり〇赤き雀 頭と背の赤き雀〇いかるがの雉どり 斑鳩の字をあつ、俗に豆廻しといふ鳥、深山に棲み冬來る、全身灰黒にして頂は深黒、翅の端黒く、尾は茶褐、脚は赤く背大きにして短く深黄なり、穀を食とし豆を含めば背にて旋轉す、故に名あり、春轉る故に三光鳥(春三ヶ月の光に浴する意)の名もあり、雄鳥は殊に美しき故にいひしなるべし〇巧どり 鷓鴣なり、果を作るに巧みなればいふ、深山の崖の樹枝に巢を懸くるに、人の髪、馬の尾、麻等にて蘆の花を綴り、機シヨウゴの如き形に造る、極めて巧みなり、形、雀に似て小さく、背尖りて錐の如し、身は灰色に黒と褐との細き斑あり冬來りて春轉る、聲美し〇鷺 晝は水に居て魚を食とし夜は樹に棲む、背、頭、脚共に長く、頂に長き毛あり身の毛散り垂れて鏡の如く全身白ければ白さぎの名あり(背と脚は黒し)眠る時は一脚にて立ち一脚を曲げて

なのが得意らしくも聞え又、歌によむにも卯の花、花橋などに半身隠して啼くのが、小にくらしいほど、しやれて居る。五月雨の短夜に寢覺をして、どうかして人より先に聞かうと待つて居ると、夜中に啼き出した聲が上品で愛嬌がある。(可愛らしさに)たましひも、あくがれてしまつて、たまらない。六月になると、音もしなくなつてしまふのも、すべていひやうもなくよい。一たい、夜啼くものは、何でも結構だ。子供だけは例外。

紫にして緑なる光あり、胸紫にして黒き點あり、背は灰色、翅は蒼黒にして緑、白、黒を交ふ、味美なり〇羽の上の霜を拂ふ 「芦鳴の拂ふ翼に波こえて、うは毛の霜やなほ氷るらむ」などいふ〇九重 九重雲深しなどいひて禁裏、九つの門の中の意にてもいふ、(九はすべて多数をいふ)〇年立ち返る 拾遺集に素性法師「延喜の月次の御屏風に」として「あら玉の年たち返るあしたより、待たるものは鶯の聲」〇雲林院 山城愛宕郡大宮村大徳寺の南にあり、天台宗、千手観音を本尊とす、初めは紫野院と

拳る〇ゆるぎの森に 六帖に「高鳴やゆるぎの森の鶯すらも、獨りは寝じと争ふもの」とあり、近江高嶋郡万木は琵琶湖のほとりにて鶯など多く集り居しにや「名にしおはゞ常はゆるぎの森にして、いかでか鶯の寝は安く寝る」などもいふ(争ふは妻を争ふ、ゆるぎは動きにとりてよめり)〇はこどり 山深き處に棲む、六帖に「深山木に夜は來て寝るはこ鳥の、明けば歸らむ事をこそ思へ」又源氏に「深山木にねぐら定むる鶯鳥も、いかでか花の色に飽くべき」等あり、名をさきておもしろしと思ひたるなるべし〇をし 雌雄相愛しの義といふ、水禽にて雄は頭に紫黒なる長毛ありて後に垂る、翅と尾との間に、銀杏の形したる羽あり、茶褐色にて一邊深黒にして翠の光あり、思羽といふ、雌は首の毛も思羽もなく、灰黒にて腹白し、雌雄並び泳ぎて常に相離れず〇かたみに居代りて 互に位置を代へて羽の上の霜を拂ひあふと推量せしなるべし、六帖に「羽の上の霜うち拂ふ友をなみ、(なまに)鶯のひとり寝するぞわびしき」〇都どり 海に近き河水に棲み、全身白毛、背と脚と赤き鳥、鳧ウツカモ(小鴨の一種)の一名ともいふ〇川千どり 川の上に群り飛ぶ故にいふ、冬月のもの。飛ぶに、うれりたる形をなす、鳴に似て小さく、頭、背、蒼黒く、頬白く、背は青黒く、胸翅は黒し、腹白く尾短く、腰、黄蒼にして細長し〇かり 啼く聲を名とせるか、頭、胸、背皆淡紫褐色、腹白くして黒と褐との斑あり、背の根領に連りて起り脚と共に赤黄色なり秋分に寒地より來り春分に歸る〇囀 頭、頸、深

いひ、淳和天皇の離宮なりしが、同天皇の天長九年雲林亭と改名あり、その後、仁明天皇第七皇子常康親王居住されしが、親王出家するに及び、貞觀十一年寺となす、後醍醐天皇の御代に已に荒廢して、その地を大徳寺に入れたり○知足院 紫野の近くにありしなるべし、蚤く廢絶したりと見ゆ○いつしか しば強めの助辭○あくがれ 在處離の轉、魂の身に副はぬなり。

上品なもの(は)。

紫の薄いの、白を重ねた汗衫。鴨の子。削つた氷を、あま茶に入れて、新しい銀の器などに入れてあるの。水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪の降りかゝつたの。美しい子がいちごを食べて居る様子。

貴なるもの、

薄色の白重に汗衫。鴨の子。削氷の甘葛に入れて 新き鏡に入たる。水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪の降たる。甚う美き兒の覆盆子食たる。

かざみ 汗衫を柔らかくいひし音便なり、古くは汗取に用ゐし服、後には大帷と稱する事となり、汗衫は童女が上着の上に着るものとなりたり、源氏物語などに童女の衣の事を「赤色に櫻重れのかざみ」又「青色に柳のかざみ」などあり○薄色にしろがさね 薄紫に白を重ねたるかざみなり、前の「櫻がさねのかざみ」とあるによりて、分明なり○かりの子 鴨の卵○あまづら 深山に生ずる蕨草にて蕨より細き根生じて他の樹につく、此頃頃は、この蕨より汁をとって今の砂糖の用に供したり、味、あまざけの如し、今いふ甘茶なり、又葉を煎じ、煉りて水飴の如くして食物に和し甘味をつけたり○かなまり 「まり」は椀なり、圓き意。かな物にてつくる椀。銀などなるべし。

蟲は、

鈴虫。松虫。促織。蟋蟀。蝶。われから。ひをむし。螢。など、どれもおもしるい) 糞虫はまことにあはれだ。鬼が生ませたから、親に似てこれも恐しい根性があらうと言つて、女親が、自分のわるい衣ものを着せて、「秋風が吹く時分になつたら来る、待つて居るのだよ」と言つて、逃げてしまつたのも知らず、秋風の音を聞き知つて、八月頃になると乳よくと果敢さうに啼くのが、たまらなくあはれだ。ひぐらし(も)、ぬかづき虫も、やはりあはれだ。何だつて、虫などのくせに、道心を起して、頭を叩き歩くのだらうとおもしろい。又、不意に暗い處などで、ことごと音をするのを聞きつけたのが、

蟲は、

鈴虫。松虫。促織。蟋蟀。蝶。われから。蟬。螢。糞蟲甚可憐なり。鬼の生ければ親に似て是も恐き心地ぞあらんとて、親の汚き衣引き着せて、今秋風吹ん時にぞ來んする。待よと言て逃て去けるも知す、風の音聞き知て八月ばかりになれば、ちよよくと憐氣に鳴く甚う哀なり。茅蜩。叩頭虫。又可憐なり。然る心に道心起して叩頭き歩くらん。又思ひ懸す暗き所などに確めきたる、聞き付たるこそ興しけれ。蠅こそ憎き者の中に入つべけれ。愛敬なく憎きものは人々しう書き出べきもの、如にあらねど、万の物に居、顔などに濡たる足して居たるなどよ。人の名に命たるは甚疎し。夏虫甚興しく、可愛氣なり。火近う取り寄て、物語など見るに、草紙の上などに飛び歩く、いとをかし。蟻は憎けれど輕び甚うて、水の上などを唯歩くこそ興しけれ。

鈴虫 野草或は松杉の籬に多し、こほろぎの屬。褐色にして髭長く、腹黄なり、秋

おもしろい。蠅といふものは、憎いものの中に、入れてよい。無愛嬌で憎らしいものを、虫がましく書き立てるでもなけれど、何處にでもとまつて、顔などに、濡れ足でとまるのは、たまたらない。人の名につけたのは、随分いやだ。火とり虫はまことにおもしろく、可愛らしい。あかりを傍によせて、物語など見て居ると、草紙の上などを飛びありくのが、實におもしろい。蟻はいやだけれど、馬鹿に身軽で、水の上など、樂々と歩くのがおもしろい。

を吐きて巢を作る、巢の長さ一寸ばかり、ひねりたる、もぐさの如くにて枝に垂る。虫は赤黒くして皺節あり、尖りたる首を出して若葉を食ふ、首を動かすさまを著たる翁の如しとて名あり、「糞虫のちよと啼きて」とあり、傳説に「親に捨てられ、親を戀ふ」と、啼聲によりていひしなるべし「親のあしき衣、引き着せて」とあるは、巢の大きなをもしろく、いへるなり」○鬼の生みければ「生ませければ」の意なり、大鏡に夏山繁樹が「我は、子産む事も知らざりしに」とあるは、「妻もなく、子を生ます事もなかりし」の意なると同じく「鬼の生ませければ」なり○親に似てこれも云々 女親の心なり、鬼のやうなる父親に似て、この子

も必ず恐しき心あらむと、思ひて、おのれの汚き衣を嬰兒に着せて逃げしを、秋になりて「乳よく」と母を戀ふとなり、この「ちよ」を「父よ」ととりて也有の俳文その他にも「糞虫の父を戀ひて」などいへり○は月 稻穂の發月の意かといふ八月の稱○ひぐらし 蟬の一種、身の色淡褐、淺黒相雜りて、綠の條あり、長さ六分ばかり、羽の長さ身に倍して透明なり、秋の日暮に鳴く、聲寂しくて「かなかな」と聞ゆとて、「かな」蟬の名もあり○ぬかづき虫 「額突く」にて叩頭するさまのおもしろしとなり俗に「米春きばつた」○ほどく 頭を叩く音○蠅 蛆より化す、身三分ばかり、六足兩翅にして首赤し、春より秋に巨り食物に集る○人々しう 「虫しう」の意○人の名に「鮪」「蠅」「難波」「根子」「武振熊」など動物の名を人につけしが多ければ、下賤の者の名には「蠅」「虫」などもありしなるべし○夏虫 夏生するものゝ蟲をいふ、「つゝめども隠れぬものは夏蟲の、身より余れる思なりけり」とは蟹をいひ、「八重むぐら茂き宿には夏蟲の、聲より外に訪ふ人もなし」とは蟬をいふ、されども、こゝは、火取蟲をいへるか、さらば諸木に生ずる毛蟲の羽化せるもの、形、蟹の蛾に似、翅は灰褐色にて粉あり、腹肥大にして赤き事紅の如し、或は白きもあり、晝は暗きに隠れ、夜、燈火に集りて焼死す、俗に「飛んで火に入る夏の蟲」などいひ、歌には「夏蟲の身をいたづらになす事も、ひとつ思ひによりてなりけり」などよめり、いづれも火取蟲の事なり、書などを見る時、妨げになりて、うるさしと思へど、人の好悪はさまざまなれば清少はらうたく、おもしろく見しにや、火取蟲の事にてはあらぬにや○蠅 小きき蟲、春、土より出で、秋の末、食を貯へて土中に蟄す、六足にして腰くびる、大きき市中に居るは一二分、山野にあるは七八分、赤黒等の種類あり、身に比して力強し。

の夜、羽を振ひて鳴く、チンチロリンと聞ゆ○松虫 ぼろぎの屬。色黒く鈴虫に似て、首小さく、尻大きく、腹黄白なり、秋の夜なく、リン／＼といふが如し（すずむし、まつむしの名、今相反せり）○はたおりの「こほろぎ」とも、「きり／＼す」ともいふもの、形いなごに似、原野に多し、夏の半より鳴く、その聲ギイストヨと聞えて機織の聲の如し、されば「きつちよ」ともいふ、雌は鳴かず、綠色なるものは竹林に居て聲低く、褐色のものは間に居て聲高し○きり／＼す 機織の一名なれども、歌などに別個に詠みあるにより、實物はよくも究むる事なく擧げたるなるべし（原著者のよくも究めずして書きし事をも、それに合せむとさま／＼の説を立つる事は、國學者の弊と思へり）○蝶 毛虫、半虫等の羽化せるもの、身小さく四翅大きく六脚。好みて草木の花に飛び集まる。小卵化して蟲となり、蛹となり、後に又羽化す○われから 藻につきたる小きき貝をいふかといふ、破殻の義、白業自得といふやうなる意に歌などにより「あまの刈る藻に住む虫のわれからと、音をこそ泣かめ世をば恨みじ」○ひそむし 朝に生じ夕に死する虫といふ、「かげろふ」など、はかなき例にひかる、虫○蠅 火垂、又火照の義、水地に生ず、大さ三四分、頭赤く、雄には黒き四羽ありて飛ぶ、雌は這ふのみ、尻、銀色をなして、夜光る事燐火の如し、夏の初めに多く出づ、人捕へて玩賞するもの。歌には「身を焦がす」など

七月頃風がひどく吹き、雨などのさあざあ降る日に、もう大てい涼しいので、扇も忘れてしまひ、汗の香の少しついた薄い衣ものをかぶつて、晝寝したのがよい。

ふみ月ばかりに

七月ばかりに、風の甚う吹き、雨などの驗き日、大方甚涼しければ、扇も打ち忘れたるに、汗の香少し抱へたる衣の薄き、引き被きて晝寝したるこそ興しけれ。

ふみ月 穂見月の轉、暑して又ふ月ともいふ、七月の稱。

不似合なもの(は)。

髪の毛の赤い人が白い綾のきものを着たの。縮れ毛に葵をつけたの。へたな字を赤い紙に書いたの。下賤の家に雪が降つたの。又、月がさし込んだのも勿體ない。月のあかるい晩に、屋かたのない車に、出逢つたのも(不似合だ)。又、さういふ車に、あめ牛がかけてあるの。年とつた女が、(懐妊して)、腹が高く、息だはしさうに歩くの。又、若い男を持つて居るすら見ともないのに、男がよそに通ふといつて、妬んだりする。(又)、年とつた男の、寝られずに煩悶して居るの。又さういふ年よりの髯澤山の男が、椎の實を骨折つて食べて居るの。齒もない女が、梅を食べて、酸っぱがつて口をゆがめて居る

髪醜き人の、白き綾の衣着たる。縮みたる髪に葵付たる。拙き手を赤き紙に書たる。下種の家に雪の降たる。又、月の射入たるも甚口惜し。月の甚明きに、屋形なき車に逢たる。又然る車に黄牛繫たる。老たる者の、腹高くて、喘ぎ歩く。又、若き夫持たる、甚見苦しきに、他人の許に往とて、妬みたる。老たる男の、寝感たる。又、然様に鬚勝なる男の、椎食たる。齒も無き女の、梅食て酸がりたる。下司の、紅の袴着たる。此の頃は、其のみこそあんめれ、靱負佐の夜行、狩衣姿も甚奇し氣なり。又人に怖らるる袍、將た誇張しく立ち徘徊も、人見付ば侮はし、嫌疑の者やあると、戯にも咎む。六位藏人、殿上の判官と打ち言て、世になく赫々しき者に覚え、里人、下賤などは、此の世の人とだに思たらず、目をだに見合せて怖ぢ戦く人の、内裏邊の廊などに、忍て入て臥たるこそ、甚似なけれ。空燻物したる几帳に打ち掛た

の。下すの女房が、紅の袴を着たの。けれども、此の頃は、それが普通になつて居る。靱負佐の夜番も、不似合だ。狩衣姿も、何だか變だ。又、人に無氣味がられる赤い袍も、何だか大げさで、うろ／＼廻つて歩くのも、見る人が見れば、(たかゞ夜番故)侮らしい。(余り退屈さに)、じやうだんに、人を咎めて見たりする。六位の藏人(は)、上の判官といつて、無上に名譽の職だと考へ、里人や下種などは、別の世界の人でもあるやうに、眼も見合せ得ず、ぶる／＼ふるえて恐れ入つて居る。その判官が、禁中の細殿などに忍び込んで、寝て居るのは、誠に不似合だ。そらだき物のしてある部屋の几帳に、かけた袴が、きつとごつ／＼と重

る袴の、重た氣に賤う、赫々しからんもと推量らるゝなどよ。賢らに袍、腋明にて、鼠の尾の如にて、結ね掛たらん程ぞ、似氣なき夜行の人々なる。此の官の間は、念じて止てよかし。五位藏人も。

鬘に葵つけたる 賀茂祭の時、男は冠、烏帽子に、女は髪に葵をつく(普通の葵と異り山中に多きもの。普通の葵は、葉の大きき二三寸、圓くして五つの稜をなし尖らず、細き鋸齒ありて互生し、莖は直上すること三五尺、春、葉の間に五瓣の花を開き白くして黄紫を帯ぶれども、これは、莖の高き、一寸余にして二岐をなし各一葉をつく、圓くして端尖る、双葉相對するによりて二葉葵、二葉草等の名あり(源氏物語の葵上を、種彦の田舎源氏に二葉の上とせり)春のはじめ岐の處に一花をつく、鐘の形して下に向ひ三瓣にして紅紫なり、賀茂祭に用うるによりて賀茂葵の名あり)○やかたなき 人の乗るは皆車蓋あり、なきは荷車○あめ牛 銜色したる牛(黄色)、上品とされたるもの、荷車には不似合となり○ゆげひの佐 靱負の畧を「ゆげひ」といふ、靱は矢を盛りて背に負ふ武器なれば、靱負は武官の總稱(近衛、兵衛、衛門の官人)なれども、この頃は衛門府の次官なる衛門佐をのみいへり衛門府は宮門を衛り行幸に供奉する外に、檢非違使(すべて非違非法の者を檢斷する役)を兼任する故、權力強し、督はありても實務は佐がなす、官等は従五位上○狩衣 畧服なり○おぢらるゝ 靱負佐の正服、赤色の袍をいふ○上の判官 上は殿上を許されたる事、判官は檢非違使尉の稱なり、藏人は六位にては昇殿を許

さうに下品で、灯かけに眼立つのも見
ともなからうと、思ひやられるなど
は、をかしい。しやれたつもりで、
袍うわさきを襦わらわにあはして、(布地がわるいから)、よれて細く、鼠の尾のやうに、まるまつてかゝつてあるなんぞは、いかめし
い夜行のお役人にも似合はない。このお役をして居る間は辛抱して、女の所へゆくなどは、やめたがよい。(靱負を
兼任しない)五位の藏人も。

細殿に、多勢と居て、そこを通る人た
ちを、見ともないほど呼び込んで、し
やべつて居ると、小ぎれいな下人だの、
小舎人童などが、きれいなつゝみ袋に、
きものなどを入れて、指貫の腰ひもな
どがこぼれて見えて居るのや、又袋に
入つた弓だの、矢だの、楯、鉾、劔な
ど持ち歩くのを、「誰の？」ときくと、膝
を突いてかしくまつて、「どなたので」と
言つて行くのは、まことに感心だ。

氣取つたり、氣まりわるがつて、「知り
ません」と言つたり、又は、耳にも入
れず往つてしまつたりすると、堪らな
く憎らしい。月夜にありく空車くわぐるま(だの)
きれいな男が、見ともない女房を持つ
て居るのだの、髻澤山で見ともない年
とつた男が、やつと物をいふ位の子
供を、おもちやにして居るのも不似合
だ。

主殿司といふものは、やはり、しやれ
たものだ。外しもとの下女しもよめは、さう美しいも
のでもないが、とのり司だけは、品
のよい人にさせたい役だ。若くて、き
りやうがよくて、いつもきれいにし
居たらば、どんなによからう。年とつ
て、古例などを知つて、平氣で、やつ

主殿司こそ

さる、故に、その兼任せるは尉官にても昇殿し得〇おもたげに粗き布の白持な
る故にいふ〇わきあけ 袖の下より裾まで縫はず、後ろ身を長く仕立てたるもの、
武官の朝服なり〇わがねかけ 三尺の几帳に折り曲げて、かけたるさま。

ほそどの
廊りやうに、數多人と居て、歩く者們、見易からず呼び寄よせて、物など
言いひに、清きよげなる男おとこ、小舎人童こざねりわらわなどの好き裏つ袋ぶくろに、衣きぬども裏つで、
指貫さしぬきの腰こしなど、打ち見うちみたる。袋ぶくろに入いりたる弓ゆみ、矢や、楯たて、鉾こ、劔けんなど
持もて歩あくを、誰たがぞと問とひに、突居ついでて、「某殿なにかのどのの」と言いて往いは甚好じきよ
し、氣色けしきばみ羞やしがりて、「知しらず」とも言いひ、聞きも入いれで去いる者は、
甚いうぞ憎にくきかし。月夜つきよに空車くわぐるま歩あきたる。清氣きよげなる男おとこの、醜氣にくげなる
妻持めもちたる。鬚黑ひげくろに憎氣にくげなる人の年老としおいたるが、物語ものがたりする人の兒こ、玩あそ
弄あそぶ。

小舎人童 又殿上童といふ出納しゅつなうの出納せし御物を持ち運ぶ事を司り、又雜役を勤
む〇つみ袋 「つみ袋」といふ説もあれど語勢「つみ袋」のやうなり、衣服
など入るゝに上につきたる紐を括れば、すばまりて巾着の如くなる、夜着ふとん
などをも入る、「好き」とあるは、そのつみ袋の織物などにてつくりあるをいふな
り〇楯 卽位式、大嘗會、行幸などの儀仗には勿論、常も用うれば持ち歩くなるべ
し、立の義。通常、楯にて造る、長さ四五尺、巾二三尺、戰場にて身を蔽ひ矢を防
ぐもの。古へのは長大にして面に牛皮を縫ひ合せ張りたり〇ほこ 兩又の劔に柄あ
りて鎗に似たるもの〇むな車 屋形のなき車(荷車)なり、前にもいひあり、甚しく
厭はしく思ひたりと見ゆ〇物語する人のちご 一本「人の」二字なし、やうく物い
ひならひたるわが子を相手になし居るさまを似氣なしとなり。

主殿司こそ、仍、興おこしき者はあれ。下女しもよめの際は、然さばかり美うらやま
ものはなし。好よき人に爲なさせま欲ほき役やくなり。若わかくて容貌かたち妍うく、衣
裳りなど常に美うてあらんは、況まて好よらんかし。年老としおいて、物ものの例たといなど
知して面おもなき様子さましたるも、甚いう々つしう眼安めやすし。主殿司このちのつかさの、顔愛敬かほあいやう
づきたらんを持ちもりて、装束さうぞく時に隨したがひて、唐衣かきぎぬなど、時装いまがしうて歩
かせばやとこそ覺おぼれ。男おとこは又、隨身せうじんこそあんめれ。甚いう美う々つしく

て居るのも、誠に似合つて見よい。愛嬌のある可愛らしい娘が、主殿司をして居て、その時々支度もきれいに、唐衣など、當世風のを、着せて歩かせたら(さぞよからう)と思ふ。男ならば隨身がよい。どんなに美々しい優雅な君達でも、隨身がないと、誠に見すばらしい。辨など、おもしろい、よいお役とは思ふけれども、下襲の裾が短くて、隨身がないのが誠に見ともない。

職の御曹司の西面の立部の處で、頭辨(行成)が、人と、長咄をして立つて居なさるから、部屋からさし出て、漬どなたと、そんなに咄して居らつしやるの」ときくと、行「辨の内侍さん」と被仰る。何をまあそんなに。大辨さんが来るものなら、あなたなんか打捨つ

美き君達も、隨身なきは甚白々し。辨など、興しく好き官と思たれども、下襲の裾短くて、隨身なき甚醜きや。

とのもりづかさ 宮中にある主殿寮の女官を「とのもりの女官」といふ、洒掃、御湯沐等の事を司る、女嬪なり○隨身 近衛の舍人が、弓箭帶劍して供奉すなり、上皇に十四人を給し奉り、攝關白に十人、大臣に八人、納言參議に六人、大將に八人、中將に四人、少將に二人を給さる○辨 太政官中に屬し、宮中の庶政を執行す、左右に分れて各大中少あり(左大辨、右中辨の如し)藏人頭を兼ねれば頭、辨といひ、參議に昇進す、清華の輩にて文才あるを撰まる○下がさねの裾短く、劇職なればなり(裾は、攝關一丈二尺より、四位五位の四尺まで差等あり)。

職の御曹司の、西面の立部の許にて、頭辨(行)の、人と物を甚久く言ひ立ち給れば、差し出て、漬其は誰ぞ」と言ば、行「辨内侍なり」と宣ふ。漬「何かは、然も語ひ給ふ。大辨見ば、打ち捨て奉りて往んものを」と言ば、甚く笑て、行「誰か斯る事をさへ言ひ聞せけん。それ然な爲せと語ふなり」と宣ふ。甚く見て、嬌き筋など主たる事はなくて、只尋常なるやうなるを、皆人然のみ知たる

て往つてしまふのに」と言ふと、はつはと笑つて、行「誰がそんな事まで知らせたのか、大辨が来ては往くではないと、今言つて聞かせて居る處だ」と被仰る。偉さうに取り繕つた處もなく、平凡らしく見える方ゆゑ、誰もさうだけにか思はないけれども、どうでも、奥深い御性質だと思ふから、あの方は、尋常の方ではないなど、宮様にも申上げ、宮様も、さうと御承知になつて居らつしやるのを、頭辨は、いつも行「女は自分を可愛がる者の爲に化粧をし、男は自分を知つてくれる人の爲に死ぬ」と古人が言つて居る」と被仰る。(又ある時は)「お互ひは、遠江の濱柳(だ)」など、言ひ合して居るのを、若い人達は、たゞ憎らしがつて、聞き

に、猶奥深き御性格を見知たれば、平凡たらずなど御前(中)にも啓し、又然知し召たるを、常に、行「女は己を悦ぶ者の爲に假粧す、士は己を知る人の爲に死ぬ」と言ひ合せつ、申し給ふ。「遠江の濱柳」など言ひ合してあるに、若き人々は、唯、言ひ憎み、見苦き事どもなど飾す言に、女屋「此の君(成)こそ轉て醜けれ。他人の如に讀經し、歌唄などもせず、氣荒涼し」など誘ふ。更に是彼に物語などもせず、行「女は目は堅如に付き、眉は額に生ひ被り、鼻は横如にありとも、唯口容愛敬づき、願の下、頸など愛し氣にて、聲憎からざらん人なん思しかるべき。とは言ながら、仍顔の甚憎氣なるは、心憂し」と宣へば、況て願細く愛嬌後れたらん人は、何なう仇にして、御前(中)にさへ惡う啓する。物など啓せさせんととも、其の初言ひ初し人を尋ね、下なるをも呼び上せ、局にも来て言ひ、里なるには文書ても自身も在して遅く參らば然なん申したると申しに參せよ」など宣ふ。「其

にくい悪口を、むき出しに言ふ。(その、いふ事に)「あの方は何だか好かない。外のお人のやうに、經を讀んだり、歌うたひなどもしないで、つまらない」など、諷る。(頭辨も)一切、他の女房達を相手にせず、(いつでも)行女は、たとへ、眼がたてについて居やうとも、額が狭からうとも、鼻が横坐りをして居やうとも、口つきに愛嬌があつて、頤の下や、頤のあたりが可愛く、そして聲が好くさへあれば、それでよいと思ふが、でも、やつぱり、余りぶきりやうなのは「いやだ」と被仰るから、まして、頤がとがつて、無愛嬌な女房は、何となく頭辨を憎んで、宮様にまで悪く申上げる。(頭辨も)又、宮様に何か申上げる時も、最初に頼んだ私を探し

の人の侍ふ」など言ひ出れど、然しも承引すなどぞ在する。清有に隨て定す、何事も扱したるをこそ好き事には爲れ」と後見聞れど、我が本来の心の本性とのみ宣ひつゝ、行改らざるものは心なり」と宣へば、清然て憚なしとは如何なる事を言にか」と奇しがれば、笑つゝ、行仲好しなど他にも言るゝ。斯う語ふとならば、何か羞る。見えなども爲よかし」と宣ふを、清甚く憎氣なれば、然あらんは、得思じと宣しに依て、得見え奉ぬ」と言ば、行實に憎くもぞなる。然ば勿見え」とて、自然見つべき時も、顔を塞ぎなどして、實に見給ぬも、真心に虚言し給ざりけりと思に、三月晦日の頃、冬の直衣の着難きにやあらん、袍勝にて、殿上の宿直姿もあり。翌旦日差し出るまで、式部の御許と廂に寝たるに、奥の遣戸を啓させ給て、帝の御前、宮の御前出させ給れば、起も敢ず感を、甚く笑せ給ふ。唐衣を髪の上に打ち着て、宿直物も何も埋れながらある上に在して、陣より出で入るものな

て、へやに居れば呼び出し、又御自分で、へやに出かけて来て言つたり、里に居る時は、手紙で頼んでよこしたり、(でなければ)御自分でお出でになつて、行もし自分の方が御所へ遅く参るやうだつたら、かう申上げて居たと申上げてくれ」などと被仰る。「誰々さんが居りますから、さう被仰いまして、おきゝ入れにならないで、どうでも私にお取次をおさせになる。清時と場合にして、無理な事はなさない方がよい」と、おせわをやいても、行是が生れ付だ」とだけで、行生れ付は、どうにも仕方がない」と被仰るので、清改むるに憚るなしといふ事も、あるでは御座いませんか」とふしぎがると、お

ど御覽す。殿上人の露知で、寄り来て物言ふなどもあるを、帝氣色な見せせ」と笑せ給ふ。然て立せ給に、宮二人ながら率」と仰らるれど、清今顔など粧てこそ」とて参す。入せ給て、仍愛たき事ども言ひ合せて居たるに、南の遣戸の傍に、几帳の手の差し出たるに障りて、簾の少し明たるより黒みたる物の見れば、説孝が居たるなんめりと思ひ、見も入で、仍事どもを言に、甚好く笑たる顔の差し出たるを、説孝なんめり、其はとて見遣たれば、あらぬ顔なり。浅ましと笑ひ騒て、几帳引き正し隠れど、頭辨(成行)にこそ在しけれ。見え奉じと爲つるものと甚口惜し。諸共に居たる人は、此方に向て居たれば、顔も見す。立ち出で、行甚く名残なくも見つるかな」と宣へば、清説孝と思ひ侍れば、侮りてぞかし。何かは、見じと宣しに然熟々とは」と言に、行女は、寢起たる顔なん甚好きと言は、ある人の局に往て垣間見して、又若し見やするとて来りつるなり。未だ、帝の在しつる折から在

笑ひになつて、行「人には、あなたと仲よしだなど、言はれる。こんなに心易くするのだから、顔ぐらゐ見せてもよさうなものだ」と被仰る。清少は、それ見、見ともない顔なので御座います。見ともない顔はきらひだと被仰つたから、お見せ申しません」といふと、行「なるほど、嫌ひになるといけない。見せずにおいてくれ」と被仰つて、どうかいふ拍子で、出くはしさうな時にも、何かで顔をかくしたりして、見ないやうになさるのも、正直な方だと感心して居たら、三月の晦日時分、冬の直衣が厚ぼつたいせいか、袍だけの殿上の宿直姿などもある朝、日がさすまで式部さんと廂に寝て居ると、奥の遣戸をおあけになつて、上様と宮様が、廂に

お出ましになつたから、起きる事も得せず、まご／＼するのを、大層お笑ひになる。唐衣を髪の上から着て、夜具もそのまゝ、ごた／＼した中に、お出でになつて陣から出入る者などを御覧になる。殿上人が、さうともしらず、私たちの御簾の前へ来て、何か言つたりするのを、帝「居ると知らせるな」とお笑ひになる。あちらへお立ちがけに、宮「二人とも、さあ一緒に」と被仰るけれども、「唯今、顔でもちやんと致しましてから」と、御辞退する。入御の後も、御美しい御様子（や、お仲のお睦じい、うれしさ）などを、お噂して居ると、南の遣戸の傍の、几帳の手がつかへて、簾が少しあいて居る處から、黒ずんだ袍が見えるので、説孝が来た

るを、得知ざりけるよ」とて、其より後は、局の簾、打ち被さなとし給ゆり。

職の御曹司 職は、中宮職その役所（曹司）なり、内裏の東、左近衛府の西、梨本の南にあり、方四十丈四面築牆にて南門なし、こゝに移られしは、この月長徳四年二月）故、道兼の女尊子入内により中宮遠慮されしなるべし（尊子は中宮の父道隆の弟故道兼の女、この時十五歳、八月女御となる）○立じとみ 部を衛立の如く造り庭前などに立つるもの○頭辨 藏人頭にて辨官を兼ねたる人、この時は、前に出でたる義懐中納言の甥、藤原行成なり書道に堪能にて才氣煥發の人。後一條帝の幼時諸臣より遊び物を上る時、他の人は「黄金などを心を盡して、風流を爲出でて持て参り合ひたるに、この人は、一獨樂つぶりに、村濃の緒をつけて上り」非常に御感に入りたる事、又秀句を言へる事など、大鏡に見えたり○辨内侍 辨官の近親にて内侍を勤むる女官を、かく呼ぶなり○大辨 辨内侍の情人にて、右大辨か左大辨かなるべし○かゝる事 寫し誤りか、もとよりか、このあたり三四行紛らはしく、至らぬかきざまなり、されば昔よりさま／＼の説あるらし「誰がかゝる事を告げしぞ、大辨来て立去るなと今云ひ居る所なり」なども解すべきか、（いみじく笑ひて）とあるに見て、○いみじく見えて、この詞なくて、「をかしき筋など」と單に云ひあらば意明かなるを、紛らばしき書きざまなるによりて、前の處と同じく多くの學者迷ひて諸説あるやうなり、この詞なくて事欠かす、省き見る方よし○をかしき筋など 頭辨の性質をいへり、一向こと更に嬌飾なしとなり○なほ奥深き 清少のみは、やはり行成の奥深き（しつかりしたる處ある）を知りたればとなり○女は云云 行成が、清少がおのれを知るを悦びて言ふなり、史記に晋の豫讓が「士爲知己

己者死、女爲悦己者一容、今智伯知我、我必爲智伯報讎死」と言ひて、智伯の爲に、その仇、趙襄子を殺して、終に死したる事あり、その詞をとりていへるなり○言ひ合せつゝ申し給ふ たゞ「宣ふ」とありて足るべし、一言ひ合せ」は談合するなり、清少と「さう咄し合ひては申される」と助けて解せば解し得るなれども、冗語なり、例の轉寫の間にかゝる所多く出で來しにもあるべし○とほたあふみの濱柳 萬葉卷七に「柿本朝臣人麿の集に出づ」とて、「霞降り遠つあふみの跡川柳、刈れども又も生ふちふ跡川柳」とあるをいふなり、刈れども又生ふとある如く、二人の中は、たとへいかなる支障出で來とも、必ず又、舊の如く親しくなるべしと語り合ひ居るとなり、この言ひ合せを一本「いひかはし」となりあれど「合し」のかたよろしかるべし○たゞ言ひにくみ 行成をそしり憎むとなり○うたてその方へ轉じゆく事にて、もとはよき方にも用ゐたりしを、後にはあしき事の方のみ用ゐる「うたての事や、」うたてゆゝしく」などのみ用ゐる事となりたり、こゝは醜き方に進む意にて「何だか氣に食はない」ほどの意なり○讀經せず 行成は高所より時流を睥睨して皮肉なる言動ありたるらし、大鏡に「殿上に談論議といふ事いで來て、その道の人々いかゞ問答すべきなど歌の學問より外の事もなきに、この大納言殿（行成）は物も宣はざりければ、」ふしぎに思ひて、某といふ人「難波津に咲くやこの花冬籠、この下は何と、」と尋ねしに、しばらく何とも言はずで非常な考ふるさまして、「得知らず」と答へしかば、人々笑ひて興をさましたる事見えたり、その頃手習の初めに習ふ歌にて、童子も知りたる歌を故らに思ひ運らすさまをして「知らず」と答へ、衆人を愚弄せるさま見るやうなり、淫靡なる事のみをなしつゝ、殊勝氣に經など讀むを嘲りて、故らに背馳し居たるなるべし、それを知らで宮女たちのそのするさまなり○歌うたひ 諺ひものを歌ふなり、器樂に合せ、又さらでも○

のだらうと、よくも見ないで、まだ咄して居ると。につと笑つた顔が出た。そら説孝だと、ひよいと見ると、ちがつて居る。「あらいやだ」と、きやつくと笑つて、几帳を引ばり直して隠れなければ追つ付かない。頭辨さんだつた。見られまいとしたのにと、残念で堪らない。式部さんの方は、(几帳を背中にして)此方向きだつたから、顔を見られずにすんだ。出かけてお出でになつて、行、やあ、すつかり見て、しまつた」と被仰るので、濟のりたかと思つたから、油断して居ました、何だつて、見まいと被仰つておきながら、そんなに穴のあくほど御覽になつたの」といふと、行女は、寝起きの顔がよいものだといふから、ある人のへや

氣すさまじ「け憎し」けだるし」など皆同じく、こゝも「何だか」「何となく」の意なり「何だかつまらない人」となり○更に、この上に「行成卿の方にては」の意もりたり、行成卿の方にては一向どの女房とも口もきかぬとなり○眼はたてさま眼尻の釣りたるをそしめるこの頃の詞なり、源氏物語などにも處々にあり、眼尻の下りたるが美人の資格なりしやうなり○まゆはひたひに生ひかゝり、眉の太きも、額の狭きも共にこの頃の美人の資格には、そむけるなり○啓せさせむ、自身が、中宮に申上ぐる事を、取次がせるにしてもなり○下、局にある事、中宮に侍し居らぬ時○式部のおもと、式部省(ノリノツカサといひ禮儀法式を掌る、卿一人、親王を任ぜられ大輔一人、少輔一人、共に儒者の重職にて従五位下、次に大丞二人、少丞二人は従六位上なり、五位に叙せられて、なほ丞たるものを式部大夫といふ)の官人を近親に持てる女房なるべし○ひさし、西の廂なるべし「陣より出で入る者を御覽す」と下文にありて陣は西門にあり(廂は、おほむね一間、母屋と簀子、縁との中間にあるもの、廣縁又は廣廂といふ。後世の入側)○上の御前、中宮こゝに遠慮ありしを、帝の臨幸ありしなり(中宮の寵は、道長の女影法師十二才にて入内あり、輝く藤壺と時めきし後も、かはらざりしやうなり、才貌ともに勝れたるは、清少納言が悦服せるにて知るべし)○めてたき事ども、御容ちの勝れたる事、御仲の睦じき、うれしさなどをなるべし○説孝、正四位下、左大辨に至り、六十六才にて卒せし人、紫式部の夫、宣孝の兄なり、この頃は六位の藏人なれば、あな色の衣なりしを、ちらと見て黒と思ひしなるべし、侮りて隠れもせざりしは卑官なる故なり○寝起きたる顔なむ、化粧品製の幼稚なる頃なれば、厚化粧の剥げ落ちたる寝起きの顔の方、美しき人もありしなるべし(四十一代持統天皇の朝に、白粉を造りし功を賞して沙門觀成に布、綿等を多く賜ひしよし、日本書紀にあり、支那文化の輸入にて鉛

粉なりし如し)。

へ往つて、のぞいて、もし見えるかと、爰へも来た。上が居らつしやつた時から居たのを、知らなかつたのね」だつて。それから、へやの簾をかついで、何か言つたりなさる。殿上の名對面といふものもおもしろい。(御用召で)御前に宿直の人が居る時は、そこへ往て、その人の名をきくのもおもしろい。足音がしてどやくと(名對面の場へ)出てゆくのを、宮様のおへやの東面で、(皆なで)耳をすまして聞くと、親しい人の名のりには、ひよいと胸を打つ。又(そんな名の人)があるとも、知らない位の人でも、さういふ時に聞くと、一寸おもしろい。名のりの爲方が、上手だ下手だと、がやくと批評するのもおもしろい。も

殿上の名だいめん

殿上の名對面こそ、仍、興しけれ。御前に侍ふ時は、即て問も興し、足音どもして崩れ出るを、上の御局東面に、耳をとなへて聞に、知る人の名告には、偶と胸潰るらんかし。又有とも熟く聞ぬ人をも、此の時に聞き付たらんは、如何覺らん。名告巧し拙し聞き醜く評るも興し。終ぬなりと聞く程に、瀧口の弦鳴し、履の音騒き出るに、藏人の甚高く履みこぼめかして、良の隅の勾欄に、高跪とかやいふ居住に、御前の方に向て後方に、藏誰々が侍る」と問ふ程こそ興しけれ。細う高う名告り、又人々侍ねばにや名對面仕う奉ぬよし奏するに、「如何に」と問は障る事ども申すに、然聞て歸るを、方弘は聞すとて、君達の教ければ、甚う腹

うすんだのだと思つて居ると、瀧口が弓をならして、履の音をごとり／＼させて退出すると、藏人が足音高くぼくぼくと踏み鳴して良の隅の勾欄の處で、高ひさまづきとかいふ居すまゐをして、御前の方に向いて、後に居る瀧口に、藏「誰々が参上して居るか」ときくのが、おもしろい。すると黄ろい聲をして、(瀧口が)「誰々が居ります」と名のつたり、又不参者が多いと見えて、瀧「名対面を致しませぬ」と、(藏人を經て)申上げると、(藏人から)「なぜか」ときいて、かやう／＼のわけだと、事情をいふと、藏「さうか」と言て歸る(のが例になつて居るのに)方弘といふ、老人は(名対面しない理由を)聞かなかつたから、若い君達が教へたら、(自分の粗忽を棚に上げて)、「名対面しないといふ事はない」と、ひどく腹を立て、叱

立ち叱て、勘て、瀧口にさへ笑る。御厨子所の御膳棚といふものに、履置で、稜へ言ひ罵るを、最惜がりて「誰が履にかあらん、得知ず」と主殿司、人々の言けるを、方や、方弘が汚き物ぞや」とて、取に來ても、甚騒し。

名対面 名詞とも、宿直申ともいふ、毎夜亥の一刻(今の午後十時)に當直の侍臣及び瀧口の武人の動情を檢する爲、名籍につきて點呼する事あり、清涼殿の「殿上の名だいめん」、瀧口の「とのあまなし」といふ〇となへて、共に居る女房の、聽覺を一つにしてなり〇瀧口 清涼殿 良の御溝水の落つる所に動番すればいふといふ、藏人所に屬して御所を護る武士の稱。武勇の士を撰びて候せしむるにて六位の侍二十人なり〇弓ならし 矢をはげす、指にて絃を引き、「びん／＼」と音立つるなり、妖聲を拂ふといひ傳ふ〇藏人 瀧口廿名の中、十九人は無官、一人は有官とある、それなり〇踏みこぼめかし 御縁の板を踏むに、故らに音高くするなり〇うしとらの隅 東北の隅、(清涼殿の)〇こう欄 欄干の折れ曲れるもの〇人々ざぶらはねばにや 念りて不參の者多きなり、皇紀の弛廢せるさまなり、三人に足らざる時は名対面はなきなり〇方ひろ 藏人なり、源方弘〇御厨子所 禁中にて朝夕の供御を、とのふる所〇御膳棚 内膳より上れる御膳部、御菓子等を載せ置く棚〇はらへいひ 稜はせんと言ひさわぐ意、無理なるいひ方なり。

つて、何々の罪科にあたるなど、言つたので、(殿上は更なり)、瀧口にまで笑はれた。又、方弘が、飛でもない御厨子所の御膳棚の上に、履をのせて置いたのを、下仕などが、「汚らしい。稜をさせなければ」とさわぐのを、(方弘の爲に)氣の毒がつて、「誰のだから。知らない」と、主殿司や、他の人達が言つて居るのに、方いや、それは私の、はき物で御座ります」と、とりに來たのも、大騒ぎの種だつた。

若くて、身分のよい男が、下す官女の名を、言ひなれて呼んで居ると、たまらなく憎らしい。知つて居ても、わざと、名の半分の字は知らない風に、「何なんとかさん」位に、言ふのは、氣がきいて居る。官仕所のへやにでも寄つた夜なんか、さうとほけるのは悪からうけれども、晝は、主殿司か、外場所でなら、侍か、藏人所に居る家來でもつれて往つて、呼ばせでもする方がよい。自分で呼ぶと、聲も、誰と分つて眼立つから。極のおはしたただの、童

若くて貴き男の、下賤女の名を言ひ慣て、呼たるこそ甚憎けれ。知ながらも、何とかや片文字は憶で言は興し。宮仕所の局などに寄て、夜などぞ然恍かんは悪かりぬべけれど、主殿司、然ぬ處にては侍、藏人所に在る者を、率て往て呼せよかし。自身は聲も著きに。婢、童女などは、然ど好し。

下す女 禁中女房(一人に一つづ、局ある女房をいふ尊稱なり、今、平人の妻をもいふは初めは敬稱なりしなり)の上臈は、御匣殿、尙侍、二位三位の典侍、(大臣の女又は孫)をいふ、禁色の衣にて陪膳をなす、(大中納言、左衛門督、帥、按察使等の呼名)次に小上臈(尙侍及び公卿の女、又、四五位の殿上人の女)。次に中臈は、外命婦(人の妻にて命婦の役を勤むる者)又、四五位の殿上人の女、諸大夫、良家の女、醫、陰陽道の女等にて、呼名は小宰相、小督、小兵衛督、中將、少將、左京大夫、宮内卿、右京大夫、督、大貳、辨、侍従、少納言、小輔、大進等、

などは、誰も疑はないから、よいけれども。

若い男と、子供は、肥つて居るのがよい。受領などいふ頭立つ人は、がつしりしたのがよい。余り痩せがれて居るのは、気が小さく、いら／＼して居さうに見える。何よりも、牛飼童のなりわいのを、つれて歩くのは、いけない。他の者は、きたないなりでも、うしろから往くからよいが、先端に立たせて、汚いなりをじつと、みつめて往くのは、いやだ。(けれども又)、車

(紫式部、清少納言等はこの中なり) 下蔭は、攝關家の家司の女、賀茂、日吉の社司及び藏人等の女にて、伊豫、播磨、丹後、周防、越前、伊勢、讃岐、相模等の名を稱ふ。中蔭以下は夜御殿、朝餉の内に入るを得ず、この下に諸司の女官(御膳、御宿の刀自、御厨子所の得選、主殿司の女官、内侍司の女孺等)あり、なほこの下には、はした者、下仕、極洗、御厨人等の卑賤なるものあり、「げす女」といへるは、女官をさせるなるべし。さぶらひ 自家の侍の詰所。藏人所。これも親王、攝關、大臣の家にはあるなり(攝關になりし時、侍所を藏人所と改稱するなり)。

若き人と、兒は、肥たる好し。受領など、首立たる人は、肥きが甚好し。余り痩せ枯向たるは、焦躁たらんと推量る。万よりは、牛飼童の、衣服醜くて持こそあれ。他物どもは、然れど、後に立てこそ往け。先に目成れ往く者、穢氣なるは、心憂し。車の後に、殊なる事なき男の連立たる、甚見苦し。細小なる男、隨身など見ぬべきが、黒き袴の末濃なる、狩衣は何も打ち糞ばみたる、走る車の旁などに、緩徐にて打ち副たるこそ、我が物とは見ね。仍、大方、服装醜くて人使ふは悪かり。着破など處々打爲たれど、糞ばみて罪なきは、然る方なりや。使用人などはあ

のあとから、立派でもない男たちが、ぞろ／＼と往くのも、實に見苦しい。隨身とも見える(きやしやな)男が、紫の、す／＼けて黒ずんだ袴の、裾の方が汚れて、余計黒いのに、狩衣は、くた／＼になつたのを着て、走る車の側に、のそ／＼と、張合なさうについで来るのは、これが、自分の附添かと、淺ましい。一たい汚いなりをさ

りて、童の穢氣なるこそは、あるまじく見れ。家に居たる人も、其處に在る人として、使者にても、客人などの往たるにも、愛しき童の數多見るは、甚趣致し。

ふときがいとよし この頃は男も女も貴人は豊饒なるを、よしとしたり、關白道隆、その子伊周隆家、次の關白道長、いづれも豊かに肥えたりしやうなり。○をかしき重美き女房、愛らしき童などを多く召使ひて豪華を競ふは、この頃の風習なり。

せて、使つて居るのは悪い。處々破れはしても、身につけて格好のよいのは、まだよい。大人の召使は、兎に角、童女の汚いなりをしたのは、(これは又)實に、いけない。自分の家に居るのでも、又、どこそこの童女だとして、使に來たり、客に往ても、そこに可愛らしい童女が多勢見えるのは、誠によいものだ。

人の家の前を通ると、侍らしい男が、庭などを敷いて、(其の上に)十才位の男の子の、美しい髪を結んで長く垂れたのや、結ばずに、捌いて垂れたのや、又

人の家の前を

人の家の前を渡るに、侍向たる男、土に居る庭などして、男子の十歳ばかりなるが、髪美しげなる、引き延でも、捌きて垂も、又五六歳ばかりなるが、髪を頸の許に搔包て、顔甚紅う豊圓なる、

五六歳の(子が)、髪を頸の處につゝこ
んで眞紅に、ふくらんだ顔をしたのな
どが、變な弓だの棒切などを持つて居
るのが、まことに可愛い。車をとめて、
抱へ入りたいほどだ。さて、又、往く
と(ある門の處で)薰物の匂ひが、ぼ
うつと漂つて居るのも、おもしろい。
立派な家の中門をあけて、積椰毛の車
の眞新しく、きれい(なのに)、端が蘇
芳色(になつて居る)下簾の艶々しい
のを、榻に立てゝあるのがよい。(そし
て)五位や六位などが、下襲の裾を(石
帯に)挟んで眞白い笏を肩にさしたり
して、あちらこち往き交ふのに、又ち
やんと装束して、壺胡篋を背負つた隨
身が出たり入つたりするのは、まこと
に似合しい。その家の厨女のきれいな

奇き弓、楯だちたる物など指上たる、甚愛し。車停て抱き入ま
欲くこそあれ。又然て往に、薰物の香の甚く抱たる、甚興し。貴
家の中門啓て、柝椰毛の車の、白う清氣なる、端蘇芳の下簾の
艶甚清氣なる、榻に立たるこそ愛たけれ。五位六位などの下襲の
裾を挿みて、笏の甚白き、肩に打ち置などして左右往き交に、又
装束し、壺胡篋負たる隨身の出で入る、甚似々し。厨女の甚清氣
なるが差し出て、厨、某殿の人や侍ふ」など言たるも興し。

さむらひ 親王、攝家、大臣以下の家人をいふ○しもとだち 棒のやうなるもの、
木の葉枝を「しも」といふ(木の枝の細きもの)○たき物の香の これは他の家な
り、家の中にてたき物をたくと見え、外まで薫り来るなり○かゝへ 含み有つ事。
その邊一帯に薫り居るなり○中門 貴人の家に、外の門と寢殿(正殿)との間に設け
たる門○はし蘇芳 下すだれば車の簾の内にかくる帷にて、白絹の裾に色をつ
け、ほかしたるなどを通例とす、これは、中、薄色にて端の蘇芳(暗紅)色なるべし
「尼の車、中略簾は上げす、下すだれも薄色の裾少し濃き」など、ありて、すべて
端の色を濃くするなるべし○しち 車を止めおくとき、轅をのするもの○下がさね
東帯の時、抱の下、小袖の上に着る、背後の裾を「裾」といふ○はさみて 裾は長
くて進退に不自由なれば正式に練り行く時の外は折り縮めて石帯にかけ結び置くな
り○さくといしるき 新きなり○壺やなぐひ 矢を盛りて負ふ具。十矢を差す、

のが出て来て、「どなた様の御家来さん
は、居らつしやますか」など言つて居
るのもおもしろい。

瀧(のおもしろい名)は、

音無の瀧だ。布留の瀧は、法皇が御覽
に居らつしやつたのが、名譽だ。那智
瀧は、熊野にあるから、身にしみる。
轟の瀧は、どんなにか、やかましく、
恐ろしい様子なのだらう。

形高く筒のやうなるをいふ、(平たきは平やなぐひ)○厨女 水仕なり。

瀧は、

音無の瀧。布留瀧は法皇の御覽じに在しけんこそ愛たけれ。那智
瀧は熊野にあるが興なるなり。轟の瀧は如何に喧騒く恐しからん。

音なしの瀧 山城國大原來迎院の東四町にあり、飛泉二丈余にして翠岩にそふて
南へ落つ、綠樹蒼鬱、陰涼心に徹し、毛骨悚然として近づき難しといふ、夫木集に
西行「小野山の上より落つる瀧の名の、音なしにのみゆる、袖かな」又拾遺集に清
原元輔「音なしの瀧とぞつひに流れ出づる、言はで物思ふ袖の涙は」○布留の瀧 大和國布留村、桃尾山にあり桃尾ノ瀧ともいふ
翠巒峩々として飛泉三反ばかり、勝景窮りなしといふ、續拾遺集に「今も又行きても見ばや石上、ふるの瀧つせ跡をたづねて」と
後嵯峨院の詠あり○法皇が 宇多法皇は諸所御遊覽あり、攝津の川尻、又同國鳥飼院等に御幸ありたる事、書に見ゆれば大和のこの
瀧なども必ず遊覽せられたるべく、又花山法皇は紀伊熊野の千里濱にて、石を御枕に大殿ごもられたるほど諸國を行脚されたるなれ
ば、近きこのわたりには必ず足跡をとめられしなるべければ、いづれをか言へるなるべし○那智の瀧 紀州熊野にあり、續古今に式
乾門院御匣「那智の山はるかに落つる瀧つせに、すゞ心の塵も残らじ」花山法皇こゝに修行せられしより瀧修行初まる。後世文覺
の荒修行尤も名あり○あはれなり 觀音の靈場たる熊野にあるが感深しとなり○とどろきの瀧 紀伊南部川の上流にもあれども、大
和國白川村にある方をいへるなるべし、同所には、とどろきの瀧、轟の橋もあり、初めに音なしをいひ末に轟をいへるは技巧なる
べし。

川は

川は

飛鳥川が、淵瀬定まらないのが頼りなからうと誠にあはれた。大井川。泉川。水無瀬川はおもしろい。耳敏川は何をそんなに、はしこく聞きつけたのかとおもしろい。音無川（は川水は音を立て、流れるものだけに）案外な名とおもしろい。細谷川。玉星川。貫川（もおもしろい）。澤田川（は）催馬樂などの氣がしておもしろいのだらう。なのりその川（もおもしろい）。名取川（は）これも、どんな名をとつたのかと聞きたい。吉野川（もよい）。あまの川（は）、天斗りと思つたのに）地にもあつた。七夕女に宿を借らうと、業平が詠んだのは、わけて、おもしろい。

1110

川は

飛鳥川、淵瀬定まらなからむと甚哀なり。大井川、泉川、水無瀬川。耳敏川、又何事を然も賢く聞けんと興し。音無川、意外なる名と興しきなり。細谷川、玉星川、貫川、澤田川、催馬樂などの感は爲るなるべし。名告その川。名取川も如何なる名を取たるにかと聞ま欲し。吉野川。あまの川、此の下にもあるなり。七夕女に宿借んと業平が詠けんも況て興し。

飛鳥川 大和、飛鳥村にあり古今集「世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ今日に瀨になる」○大井川 山城、嵐山の麓を流れ、となせ、攝津、桂を過ぎて淀川に入る、拾遺集に忠岑「いろ／＼の木の葉流る、大井川、下は桂の紅葉とや見む」○泉川 山城にあり、奈良へゆく道にて木津に近し、木津川なり、上古は挑川といひしを訛りていふとぞ、古今集「都出で、今日みかの原いづみ川、川風寒し衣かせ山」みかの原も鹿背山もこの近くにあり○みなせ川 攝津。古今集「言にいで、言はぬばかりぞ水無瀬川、下に通ひて戀しきものを」○耳敏川 禁裏に近き小川なりしなるべし、六帖に貫之「百敷の大宮近き耳敏川、ながれて君を聞き渡るかな」○音無川 山城、東山泉湧寺の前の橋の下に入るとぞ、川なれば水の流る、音のすべきを、おとなしといへるが奇抜なるとなり○細谷川 大和三笠山の下を流れた

るか、萬葉集に入唐「大君の御笠の山を帯にせる、細谷川のおとのさやけさ」○玉星川 陸奥。夫木集に「みちのくの玉星川のたまさかに、流れあふ瀬やあるとこそ待て」○貫川 貫川といふがあるにか、糸貫川（又いつのときとも）をいへるか、さらば美濃なり、金葉集「君が代は幾萬代か重ぬべき、いつのき川の鶴の毛衣」藤原道經。催馬樂には「貫川の瀬々のやはら手枕、やはらかにぬる夜はなくて親さくる妻」○さは田川 大和奈良、廣瀬川と同じ流れにて末は龍田川となる、拾遺集「澤田川まきのつぎ橋うきぬれば、人も渡らずさみだれの頃」催馬樂には「澤田川袖つばかり浅けれど、恭仁の宮人高橋わたす」○催馬樂 雅樂の一種、古へ諸國より貨物を上る時、歌ひし故にこの名ありとも、唐より傳はりし樂ともいふ、初めは歌のみなりしを管絃に合するやうになりたり、その中に貫河、澤田川などあり○名のりその川 所不明、「名のる勿れ」の名おもしろしとなるべし○名取川 陸前名取郡にあり、「みちのくにありといふなる名取川、なき名とりては苦しかりけり」○吉野川 大和にあり、國中の大河なり、古今集「よしの川岩浪たかくゆく水の、はやくぞ人を思ひそめてき」○天の川 河内、北河内郡にあり、伊勢物語に「交野を狩りて天河の邊に到るを題にて」云々○この下にも「牽牛星と織女星のゆき合ふ天界のみにある川と思ひしに、この下界にもあつた」なり○業平がよみけむ 惟喬ノ親王の御供して天河のほとりに到れりし時、業平「狩り暮し織女に宿からん、天ノ河原に我は來にけり」。

橋（のおもしろい名）は、

あさむつの橋。長柄の橋。あまびこの橋。濱名の橋。ひとつ橋。佐野の船橋。うたじめの橋。轟の橋。小川の橋。かけはし。勢多の橋。木曾路の橋。堀江の橋。鵲の橋。ゆきあひの橋。山菅の橋。（これは）きいた處がおもしろい。

橋は

橋は、

あさむつの橋。長柄の橋。あまびこの橋。濱名の橋。ひとつ橋。佐野の船橋。うたじめの橋。轟の橋。かけはし。勢多の橋。木曾路の橋。堀江の橋。鵲の橋。之會の橋。小野の浮橋。山菅の橋。名を聞たる興し。假寝の橋。

あさむつの橋 淺水橋と書けり、夫木集「見し人も袖やゆるらん五月雨に、名さへ

1111

うたゝねの橋。(もおもしろい。)

忘るゝあさ水の橋」○長等橋 攝津、長等川にかけたる橋、古今集に「世の中に
ふりぬるものは津の國の、ながらの橋とわれとなりけり」○あまびこの橋 天彦は
山彦(こたま)なり、名のおもしろしとなるべし、飛彈にありといへり○濱名の橋 遠江なり、拾遺集「汐満てる程に行きかふ旅人
や、濱名の橋と名づけそめけむ」○ひとつ橋 六帖に「津の國のなにはの浦の一つ橋、君をし思へばあからめもせず」(あからめは
他を見る事)ひとつ橋(一本橋)の名をおもしろしとなるべし○さのゝ船橋 上野の佐野にあり、烏川を舟橋にて渡せしなり榎の大
樹をつなぎたるもの。萬葉集「東路の佐野の船橋とりはなし、親しきくれば妹に逢ひぬる」○うたじめの橋 大和奈良、東大寺の地
中にありしといふ○とどろきの橋 東山、清水の麓、三年阪の下に渡したりし小さき石橋にもこの名ありしといへど、堀川百首の
「我妹にあふみなりせばさりとわが、ふみも見てまし蓋の橋」の歌を思ひていへるか、○小川の橋 拾遺集に業平「筑紫よりこま
ま來れどつともなし、たちの小川の橋のみぞある」とあるによりて、いへるか、○かけはし 木曾路などにある棧の名をきき、お
もしろく思ひしなるべし、固有名詞にはあらじ○勢田の橋 近江、琵琶湖の南口なる勢田川にかけたる橋、玉葉集「先立ちてわたる
人だに見えぬまで、夕霧深し勢田の長橋」○木曾路の橋 信濃木曾山中にある橋「かくる」といふ事にかけて歌によみたるを聞き知
りて、おもしろしといへるなるべし、拾遺集に「中々に云ひも放たて信濃なる、木曾路の橋のかけたるやなぞ」又千載集に「淺まし
やさのみはいかに信濃なる、木曾路の橋のかけ渡るらん」等○ほり江の橋 攝津の難波堀江にかけれる橋をいふなるべし○かさゝぎ
の橋 山城の御池通、烏丸西へ入る町の溝にかけたりし橋にこの名ありしよし見ゆれど歌にも多くあり大和物語に「鶴の渡せる橋の
霜の上を、夜半にふみわけ殊更にこそ」の類○ゆき舎橋 同じ名諸所にあり、名をおもしろしといへるなるべし歌には「かさゝぎの
行會の橋」などいへり○小野の浮橋 不明○やますげの橋 下野の今の日光の神橋をいふ、第四十八代稱徳天皇の神護慶雲元年、勝
道上人跋涉のみぎり、神佛の加護により大河の上に大蛇の長橋忽ちに架りしかど、踏踏されしに又蛇橋の上に數根の山菅を生じ、山
間に一路を開きたるに異ならず、冥助の著るきを感嘆しつゝ、徒弟と共に長橋をわたり北岸に至りて後るをかへりみしに、大蛇かき消す
如く見えすなりしにより、この橋を山菅の蛇橋といへり○名をききたる 俗に「聞いた處が」なり○うたゝねの橋 所在不明。

里(の名でおもしろい)は、

逢坂の里。ながめの里。いさめの里。
人づまの里。たのめの里。朝風の里。
夕日の里。十市の里。伏見の里。長井
の里。つまとりの里。(これは)人にと
られたのか、自分がとつたのか、どつ
ちにしてもおもしろい。

里は、

逢坂の里。ながめの里。いさめの里。人づまの里。頼めの里。朝
風の里。夕日の里。十市の里。伏見の里。長井の里。つまとりの
里、人に奪れたるにやあらん、我が奪たるにやあらん、孰も興し。
あふ阪の里 近江なる逢坂山の附近なるべし○ながめの里 物思して長見(一つ
所を見守る)するといふ意の里名をおもしろしとなるべし所在不明○いさめのさと
不明「戒め」の意のおもしろきなるべし○人づまのさと 所在不明「他人の妻」とい
ふ名をおもしろしとなるべし○たのめのさと 美濃○あさ風のさと 所在不明○夕
日のさと 所在不明○とほちのさと 大和、十市郡、拾遺集に藤原伊尹「暮ればと
くゆきて語らん逢ふ事は、遠ちの里の住みうかりしも」○伏見のさと 山城紀伊郡
深草の續きなり、後撰「名に立て、伏見の里といふ事は、紅葉を床に敷けばなりけ
り」(大和にも伏見村、伏見山菩提寺(菅原寺)等あれども、里とは見えす)○ながめ
のさと 所在不明、長居の名のおもしろきなるべし○つまとりのさと 所在不明。

草は、

菖蒲(と)菰(がおもしろい)。葵(が又)
まことによい。神代からして、さうい
ふ時のかざしとなつたのが、實に結構

里は 草は

草は、

菖蒲、菰、甚興し。祭の時、神代よりして、然る挿頭と成け
ん、甚う愛たし。物の容も甚興し。澤瀉も名の興しきなり。慢